

泥海古記指掌全

泥海古記校本

泥海古記指掌

泥海古記指掌 目次

泥海古記校本

緒論……………二

第一 成立要件……………三

一、泥海古記とは何ぞや……………三

泥海古記・泥海古記の集成、泥海古記の定本

二、泥海古記の成立要件……………五

泥海古記の地位・泥海古記の成立要件・泥海古記に対する態度

第二 内容の中心點……………七

第一章 神の存在

一、天理王命

天理王命・天理王命の人格

二、神の意匠

宇宙の起源・自然法・創造の意義・創造の意匠・生物の起源・道德法の

起源・靈魂の起源・人体の意匠・植物の起源・生死の起源・意匠の完了

・人祖の出現・受生・文明の起源・天理王命と十柱の神との關係

三、十柱の神

くにとこたちの命・おもたりの命・いざなぎの命・いざなみの命・くに

さづちいの命・つきよみの命・くもよみの命・かしこねへの命・をふと

のべへの命・たいしよく天の命

第二章 人

間

一、人間の歴史的過程

七

七

三

七

四

四

起生・人格の發展・人格内容の拡充・罪惡の起源・天地開闢・人類の分

布・人類の起源・文化の創造

二、人

間

神の子・原罪・自罪・神の人物評價の標準

第三章

神と人との關係

一、救

主

啓示の意義・救主教祖

二、祈禱の形式

神樂勤の意義・神樂勤と救ひの關係

三、恩

寵

おびやゆるし・守り・農家の福音

四、理想の世界

地場・甘露台・人類の將來・甘露台建設

第三 意義の解明……………七〇

第一章 人間の起源……………七〇

一、神 観……………七〇

神の観念・神の人格・神の品性・啓示

二、宇 宙 観……………八三

宇宙の神祕・自然科学と泥海古記・應用科学と泥海古記・宇宙観

三、人 間 観……………八七

神の意匠・人間の價値・靈魂の起源・人格の起源・良心の起源・人格の

發見・信仰の本義

四、理 想 の 人……………九五

理想の人・教祖の人格・たすけ一條・存命の理・再臨

第二章 人 生……………一〇三

一、道 德 観……………101

道德の淵源・判断と自由・かきもの・かりもの

二、罪 惡 観……………106

人の罪惡・罪惡の起源・罪惡の結果

三、救 極 観……………113

聖と善・救ひの意義・神の人物評價の標準・罪惡に打ち克つ力・御供の

意義・祈禱の意義・祈願・靈交

四、運 命 観……………117

苦痛の存在・不義者の榮達と義人の困窮・苦痛の意義・人間創造・因縁

五、征 病 観……………125

病の存在・征病観

六、人 生 観……………131

道德と人生・人生観

七、人間生活……………一四

人間生活の四要素・感謝・讚美・懺悔・祈願・陽氣暮し

第三章 人間の將來……………一四

一、生 死 観……………一四

死の解決・人格永存の信仰・個人の生死

二、未 来 観……………一五

甘露台世界・甘露台の建設・甘露台実現の時間・甘露台世界の中心地

三、新世界の建設……………一五

人間の創造・新家庭の建設・新社会の建設・新世界の表現

第四章 人間の進化……………一六

一、進化の原理……………一六

進化論の成立・進化の意義・進化の原理・進化の形式

二、進化の法則……………一七

文明進歩の要素・ギリシヤ思想・天理教思想・進化の目標

三、進化の方法……………一七〇

進化の方法・泥海古記の價值

四、泥海古記の特異点……………一七四

進化に対する見解・單種と複種・進化の原理・泥海古記の特異点

結・論……………一七七

泥海古記指掌目次 終

泥海古記稿本

火の巻

天理王命と言ふ原因は、大和國山邊郡もと庄屋敷村中山善兵衛の妻みきと言ふ者、此の人は生れつき宗教心深く、又難澁の者共を救助する事夥しく、出産する毎々には乳澤山につき、隣家の乳不自由なる者兩三人を乳をもて助け給ふ。其の中に男一人預りて乳の世話を致し居る折柄、其の預り子疱瘡にかゝり、十一日目より黒疱瘡と相成る。醫者は此の疱瘡ではとても助かる事むつかしと言ふにつき、吾がの世話中に死なせては何とも申譯なし、何でも助けねばならぬと決心し、吾が夫へも知らさずして一心不亂に氏神へ参り、其の他八百萬神を呼出し「此の度の吾が預り子の疱瘡をお助け下され、此の子の壽命には無理な願にはあれども、百日の跣足参りを致します。右願の通り壽命下さるならば、其の代り吾が子三人ある中かゝり子一人お残し下さればあと二人の命を差し上げ、尙又子供二人で不足の時は、願満つ上は吾がの壽命も差上げます」と願をかけ、其の他奈良の二月堂觀世音、稗田の大師、武藏野の大師（子安地藏なりとも言ふ）の三ヶ所へも、一ヶ年三月の間は月参りをすると誓つて願ひたて、一心不亂に願ひ給へば、預り子無難にて全快せり。

然るに天保八年酉年右みき四十歳の時、十月廿六日長男善右衛門農業致し居る中、俄かに足痛み早速醫者に就き成るべく養生致しおれども治らざ、餘儀なく同國同郡長瀧村山伏市兵衛なる者を傭ひ、護摩を焚きて寄せ加治をせしに痛み治る。又痛み、同じ人を傭ひて寄せ加治をすれば痛み治る。故に一ヶ年十度も護摩を焚きて寄せ加治をなし、其の度毎に痛み治る。

みき四十一歳の十月廿四日の寄せ加治に、始めてみきに幣を持たせば、それよりみきは夢中となり、荒ぶる神降り給ふ。如何なる事と思ひ恐れて尋ね奉れば「吾は天の將軍」と答へ給ふ。故に恐れて尙も伺ひ奉れば「此の度はみきの身體を神の社に貫ひうけに天降りた」と宣給ふ。然れども皆の者は神と更に思はず、是は狐狸の類、憑きもの、仕業と思ひ、親類一同寄り集り談じ合ひ、退ぞかさんとお斷り申上ぐれば「此方はなか／＼退ぞく神に非ず、みきの身體を神の社にもらいうけ、もらいうけたる上は、神のまゝにして三千世界になきめづらし助けを教へる神の身體とするなり。是を彼此と云ふならば此の家斷絶さす」と厳しく仰せらる。三日三夜の押し問答せしも、みきは此の間水一滴も飲まず、其のまゝ言ひ通すに付き、力及ばずよんどころなく十月廿六日朝九つ時「差し上げ奉る」と申上ぐれば、夫よりみき正氣と相成り、其の夜の九つ時に至り、みきの寢間の天井に大

なる音ありと思ひしに、みきの心耳に「吾はくにとこたちの命と云ふ神なり」と聞え、身重くなりし如く感じ給ひ「神が代りて出る程に」と仰せられ、暫くして前の如くにして「吾はおもたりの命と言ふ神なり、十柱の神が代るゝ天降るなり」と曰ふ。それより神が次々に降り給ひ、其の度毎に身が重くなる如く感じ給へり。

夫より何時となく月日兩神より仰せらるゝには、我が兩人の神はもと泥海の中より現はれて、ない人間ない世界を拵へた神である。今天降る爲、是迄に寄せ加治を教へ置き、天より見澄ませば此の屋敷は人間を最初に宿し込みたる因縁ある故に、もとの約束にて天降りたるなり。みきの魂と云ふは、人間を宿し込みたる母親いざなみの命の魂を授けおきたるをもつて、どんな人でも助けたいとの心あるなり。世界中に我が子程可愛いものはない。それに吾が子二人も差し上げ、其の上に吾が壽命まで捨て、人を助ける心あるは、人間の最初の親の魂ある故なり。みきの魂は最初此の屋敷にて人間をうみ出したる親の魂なり、故に其の魂をもとの屋敷へ連れ歸り、それを見澄まし天降りたるなり。然る上は神のまゝなり、よつて神の云ふ事守るべし。此の上は神より至極貧に落すなりと仰せ給ふ。

神は今より此の上もなき貧に落ち切れ、それより世界を助けさすと曰へども、内々は言ふに及ばず親類まで夜晝限らず寄り合ふて彼此と談じ、神やと言ふても貧に落ちきれと言

ふ様な神なれば何でも彼でも退ぞかさんとて、親類は此の様な神を祈る事ならば、今後一切つき合はずと申せども、神は退ぞかず、何でも彼でも家財は残る所なく施せ、然る上は三千世界をめぐらし助けすると仰せらるゝ故、内々の者もよんどころなくして神の仰せに従ひ、親類はつき合はずなりしなり。其の間にも皆の者が餘りにもみきを責めし爲、井戸溜池へ身を投げんと其の場に近付き身を投げんとすれば足は動かさず、故にあと戻りして歸りし事も度々なり。

中山家は相當の百姓家なりし所、内々の者は餘儀なく神の仰せに従ひ田畑を賣り拂ひ、尙も神の仰せの通り建物家財残らず十ヶ年の間に人々に施し、身代を無くして難澁致し居るに、誰言ふとなく自然と人々が拜みに參り、天理王命と拜みすれば何でも願通り助かる事不思議なり。

助けと云ふは、是迄に人間を拵へ教へたる事も同じ事、是迄になき助けなり。最初世界を創めるはむつかしき事でありた、今めづらし助けを創めるも同じ事、神が表へあらはれて此の世の眞美を教へてめづらし助けを教ゆるを、誰も知りたる者は更になしと御聞かせ給ふなり。

水の巻

此の世の本源なるは人間もなく世界もなく泥の海ばかり、其の中に神と云ふは月日兩人居たばかり、其の月様と云ふは「くにとこたちの命」と言ふ神、日様と云ふは「おもたりの命」と云ふ神なり。

其の中より月様が先に出て國床を見定め、御固め給ひて後、月日の相談により、泥海の中に月日兩人居たばかりでは神と言ふて敬ふものはなく、何の楽しみもなきをもつて、人間と云ふものを拵へる事とし給へり。

人間を拵へ何か萬づの事を教へて守護すれば、人間は重寶なるものにて「よふきゆさん」を見らるゝ事と相談を定め給へり。

人間を拵へるには種苗代に道具雛形がいる、故に之を見出す事と見澄せば、泥海中に「どぢよ」ばかり居る。其の中に「うを」と「み」と他なるものもあるなり。

よく見澄せば「ギギヨ」とも亦人魚とも云ふ魚がある。此の魚は今の人間の顔にて鱗もなく、肌は人間の肌。又見澄せば「み」といふ白蛇がある。此のものも人間の肌にて顔は

人間鱗もなし。世界中に唯一すじより他になき「み」なり。二人共心は眞直で正直なり。此の姿心をみて此のものを引寄せて、此の度人間と云ふものを拵へたきにつき、其の方の姿心をもつて人間の種苗代に貰ひうけよふと仰せられども、兩人それを嫌ひしを以て、うんだ子數の年限がみちた上は元の屋敷へ連れ歸り、此の世の一の神とし、人間の親神と云ふて拜をさすと約束し、無理に承知させてもらいうけ給へり。

然る上は男女の道具、人間の魂、五倫五體の道具雛形を見出す事と見澄せば、泥海の中に「どちよ」ばかり居る。此のものを月日兩人食て其の味はい心の勢をみて、人間の魂とし給へり。

見澄せる乾の方に「しやち」と言ふ魚がある。此のものも承知させて貰ひうけ、食べて心味はひを見るに「しやち」と言ふ魚は勢ひ強く變にしやくばるものである故に、男の一の道具に仕込み、人間の骨の守護とし給へり。

又見澄ませば、巽の方に龜が居る。此のものも食べて心味はひを見るに、此のものは皮強く倒れぬものである故に、女の一の道具に仕込み、人間の皮つなぎの守護とし給へり。

又見澄ませば、東の方に「うなぎ」がある。此のものの心味ひをみるに、此のものは勢強く頭からでも尾の方からでも出入りするものなる故に、人間の飲み食ひ出入りの守護と

し給へり。

又見澄ませば、坤の方に「かれ」がある。此のものの心味ひをみるに、此のものは身うすく味ひよきものなり。圓きものや角きものにては風が出ず「かれ」は身うすきもの故、人間の息、風の守護とし給へり。

尙も人間の楽しみ、食物を拵へる道具と見澄せば、西の方に「黒くつな」がある。此のものを引きよせて貰ひうけ、食べて心味ひ姿をみるに、此のものは勢強く、引てもきれぬもの故、立毛、地より生えるものを引き出す守護とし給へり。

又、人間生き死に出直す時に縁切る道具と見澄せば、艮の方に「ぶぐ」と云ふ魚がある。此のものももらいうけ食べて心味ひをみるに、此のものは大食するものにして、食へばよくあたる魚である故に、人間の生死の時に縁を切る守護とし、其の他此の世の萬つ切るもの一切の守護とし給へり。

右に表はすものども、嫌ふものを無理に承知させてもらいうけ、人間を拵へる相談しまりついたり。

是に月日様の守護によりて「ギギョ」の方へ「しやち」と言ふ魚の勢を男の一の道具に仕込み「くにとこたちの命」の心入り込み給ふて男神とし給ひ「いぎなぎの命」と名付け

給へり。之人間の種の神なり。又「み」の方へ龜の皮強きを女の一の道具に仕込み「おもたりの命」の心入り込みて女神とし給ひ「いざなみの命」と名付け給へり。之人間の苗代の神なり。

月日二柱の神は「いざなぎの命、いざなみの命」を種苗代とし、甘露臺の地場を神體の中央とし、北枕の西向きに寝て九億九萬九千九百九十九人の數を、三日三夜になむくと二人宛宿し給へり。

なむくとはアウンの事なり、なむとは夫婦の事、天地を象りて夫婦をはじめ、人間の一の樂しみとしたる事をもつて、人間もなむくとしてゐるはよき事なり。

又、人間と云ふ名を付けしは、雛形を人魚とも云ひ、ギギヨとも云ふをもつて、此の理によるなり。又、人間がよき事あれば之を今にゲンがよいと云ふは之によるなり。

西東北南と云ふは神も人間も目は本心なる故に、人間宿し込みの時に月日兩人の目の向きたる方を二神のしんと云ふ心にて西と名付け、目を西から東へかす故に東と名付け、又、宿し込みがすんで「ぎ様」が先にたつて向きたる方を北と言ひ「み様」が後より起きて向きたる方を南と名付け、是で方位も定まりしなり。之を今に西東北南と云ふなり。

之等は皆人間を創めた事を形どりて名付け給ひし事を今にても云ふてゐる事なり。

今此處に現れてゐる天理王命と言ふは、此の世界最初の十柱の神、人間を拵へ世界を拵へた元の十柱の神を奉稱する御名なり。世界も人間もなき時に道具に使ふた此のものを神としておいたる、是まで言ふた事なし、教へた事なし。

くにとこたちの命は天にては月様なり。御姿は頭一つ尾一筋の大龍にして男神なり。此の世界の國床を見定め給ふ理を以て「くにとこたちの命」と云ひ、又の名を「くにみさだめの命」とも云ひ、此の神は宿し込みの時「つく理」をもつて月と云ひ、月様が先に立つ故に月日と云ふ。此の神が萬物に至る迄心を配り給ひ、人間の惡氣をなをさんが爲に佛法を弘め、子供の爲に法事を教へ給ひしなり。人間身の内にては目胸うるほひの御守護、身の内の水氣は此の神の守護にして、目は此の神の守護なり。即ち此の世界何によらず先の水の守護下さる故萬物出来るなり。水は此の世界一の神なり。

おもたりの命は天にては日輪なり。此の神は女神にして姿は十二頭三尾の大蛇にして、人間宿し込み給ひて後は日々身が重くなる故に、此の理をもつて「おもたりの命」と言ふ。此の神は宿し込みの時「ひく理」をもつて日様と言ひ、頭十二あり。一つにて一ヶ月宛御守護下さる理にて、一ヶ年を十二ヶ月と定め給ひ、又一日を十二刻に刻み、十二時と定め御守護下さる理なり。十二支と云ふも同じ理なり。又尾に三つの劔ある故に、此の理を

もつて悪氣な女を邪劍と言ふ。人間身の内にては温みの守護、温みは皆此の神の借物なり。

此の世界に神と云ふて所々にあれども、月日より御働き遊ばされ、守護し給ふことを詳に知りたるものはなし。右兩人の神は此の世の人間の實の親なり。又人間には此の世を御照しの如く入り込み給ふて守護下さる故に自由自在が叶ふものにして、あとなる神は皆月日の仰せによりて御働きある事詳に知りたるものはなし。是迄書物にない事を皆取次へ教へ給ふ事なり。

いざなぎの命は天にては天の川を隔て、現れる牽牛と云ふ星なり。男神にして人間の男種に使ふた父親なり。

いざなみの命は天にては天の川を隔て、現れる織女と云ふ星なり。女神にして人間の女苗代に使ふた母親なり。

くにごさづちの命は天にては源助星なり。女神にして御姿は龜なり。龜と云ふものは、土色なるもの故に「くにごさづちの命」といふ神名を授け給へり。此の神は女の一の道具に仕込み給ひし故に、龜の甲の理をもつて女を「めこ」と云ふ。此の神は人間の皮つなぎの守護、縁結びの神にして、此の世界何事によらず継ぎものの類は残らず此の神の世話と

りにて、萬づつなぎものは此の神の守護なり。

つきよみの命は天にては破軍星と云ふ星に現れ、男神なり。此の神は男一の道具に仕込まれたる神にして、此の神の御姿たる「しやち」と言ふ魚は勢強きものなる故に、此の理を以て男一の道具を「せいの子」と云ふ。男と云ふものは宿し込みの時上よりつくが故に、此の理をもつて「つきよみの命」と名付け給へり。人間身の内では骨の守護、人間の骨は皆此の神の借物なり。

くもよみの命は女神にして天にては明けの明星なり。此の神の御姿は鰻にして、鰻と云ふものは頭からでも尾の方からでも出入し、つるづくものなる故に飲み食ひ出入りの守護とし給へり。

かしこねへの命は男神にして、天にては坤の方に數ある星なり。御姿は鰈と云ふ魚にして、人間の息、風の道具に使ふた神なり。人間の息は此の神の借物なり。此の世界火と水とは一の神、風よりほかに神はない。息は風なり、風は神なり、如何なる悪しきも吹き拂ふなり。

をふとのべへの命は天にては宵の明星なり。男神にして御姿は黒くつな。此のものは人間ののじきもつ、立毛を地より引出しの守護、其の他何によらず引出すもの、道具に使ふた

神なり。又引出すには苦勞がある。今にてもよふするものを「くろと」と云ふは、此の理にて名付け給ふなり。第一は百姓のつくり神なり。

たいしよく天の命は女神にして、御姿はふくと云ふ魚なり。此の魚は食すればよくあたる魚にして、人間も大食すれば壽命を失ふ。此の理をもつてたいしよく天と名付け給へり。人間の生るゝも親と子との胎縁をきる故に生るゝなり。又死亡の時に縁を切る道具に使ふたもの、又此の世の縁を切る鉄にて、萬つ切る神、良鬼門の神なり。

人間は皆神の子なり、身の内は皆神の貨物にて、人間を守護下さる神は、此の世を夜御照し下さる神は「くにとこたちの命」晝は「おもたりの命」此の二柱の神は最初の親神、元の神なり。後の八柱の神は人間を拵へるに付き道具雛形に使ふた因縁によりて、右二柱の神より道具主に神名を授け給ひしなり。即ち此の十柱の神は世界の元の神なり。此の外には神と云ふては更になし、と御聞かせ下さるなり。

風の巻

人間身の内は皆神の守護なり。人間身の内よりほかに神と云ふては更になし、神や佛と云ふて拜みしてゐれども、皆人間が紙や金や木をもつて拵へたものばかり。どうも紙や木の中へは神が入り込む事出来ぬもの、人間は皆神が入り込んで何の守護もする故に、人間にまさりた神はなきなり。

人間は皆元十柱の神の魂を一々人間に生れさせおきて何事によらず教へ來りし故に、人間は皆月日の使ふ一の道具にして、是迄に人間の仕込み相濟みしを以て、元の神々の魂を此度此の屋敷へ引き寄せ生み出したるなり。此度迄は此の助けを教ゆる事出来ざる故に、人間の修理肥しに、世界中に拜み祈禱や易判断、醫者藥を教へたるなり。

又、珍らし事を始め出し、甘露臺の地場を顯はす。此の屋敷は最初人間宿し込みの地場にして、地場は人間の親里なり。即ち此の元は、月日様より「ぎ、み」兩人の神を人間の種苗代とし、天地を象りて夫婦を教へ、此處にて九億九萬九千九百九十九人の人數を、なむ／＼と二人づゝ三日三夜に宿し込み、三年三月とゞまりゐて、それより今の奈良初瀬七

里四方の間へ七日かゝりてうみおろし、残る大和國中へ四日かゝり、是で十一日を「産明け」と言ふ。山城伊賀河内此の三ヶ國へ十九日、残る日本國中へ四十五日かゝりてうみおろし、都合七十五日かゝりし故に七十五日の間を「産屋中」と云ふなり、産みおろしおく地場は今の宮地となる。いざなぎの命はいざなみの命と共にうみおろしに廻り、子供にいきを吹きかけ給ひ、うみおろしのすむと共に死亡し給ひぬ。

最初にうみおろされし人間は、五分から生れて五分くゝと成人し、九十九年に三寸迄成長して皆死亡す。一度教へられた守護により再度母親の胎内へ宿り込み、十月目より以前の所々へうみおろしに廻り給ふ。此の地は今の墓所となれり。此の人間も五分から生れて五分くゝとして成人し、九十九年目に三寸五分まで成長して皆死亡す。又、前の如くにして同じ胎内へ三度宿り込み、十月目より諸所へうみおろしに廻り給ふ。此の地は今の詣り所となれり。此の人間も五分から生れて九十九年目に四寸まで成長す。之をみて母親は茲まで成長すれば月日の仰せの通り五尺の人間になるに相違なしと、喜んでにつこり笑ふて死亡し、人間も亦親のあとを慕ふて皆死亡せり。

母親がにつこり笑ふた理と、死亡された理とを以て、人間の生るゝ穴も二寸に四寸、死に行く穴も二尺に四尺と、皆二四の理をとるなり。

夫れより又鳥類畜類蟲類異形のものに八千八度生れ變りたり、故に今日の人間は何もの眞似でも出来るなり。

八千八度の生れ變りの濟みし時皆死亡し、其の中に猿（女猿也）一人残る。是即ち「くにさづちいの命」なり。此の胎内より男五人女五人宛十人づゝうみ出し給ふ。此の人間も五分から生れて五分くと成長し、八寸迄成長せし時泥水に高低が生じ始め、一尺八寸迄成長してより親が子となり子が親となりてもとの人數うみそろひ、水土分りかけ、それより男一人女一人と二人づう生れ、三尺まで成長せし時ものを言ひかけ、天地海山水土すきやかに分り、人間も五尺になりて男か女か一人宛生るゝ事となれり。

人間が五尺になりたる時、九億九萬九千九百九十九人の人數の内、大和國にうみおろしたる人間は日本の地に上り、他の國にうみおろしたる人間は食を求めて唐や天竺の地に上り行きたるなり。

此の年限も九億九萬年は水中の住居、地に上りてより天保九年十月廿六日まで九千九百九十九年なり。内六千年は智慧の仕込み、三千九百九十九年は（外國へは六千年）文字の仕込み、人間のする事は皆神が入り込み何事も教へ來るなり。

此の事は誰も知るまい。其の筈や人間拵へ、人間に神が入込んでゐれども口を借りて教

へし事なし。今始めての事故之を實に承知するものなし。此の事を嘘と思へば嘘となる。神の云ふことをきゝわけるなら、藥飲まずとも話一條で皆助かるは嘘でなき證據なり。

斯くの如く地場は人間の親里なり。何故に此度地場を顯はすかと言へば、最初此處にて月日兩人談じ給ひ「うを」と「み」とをもらいうけたる時に、うんだ子數の年限がたちたなら元なる屋敷へ連れ歸り、陽氣ゆさんを見せて楽しみ遊びをさすとの約束あるを以て、此の度は天より天降り、此の地場を顯し出して何でもかでも返へしてやらにやならん故に、先づ元なる親の魂を生れさせおき、其の者を月日の社として神が入り込み、珍らし助けを教ゆるなり。

此の助けを教ゆるも、無い人間無い世界を拵へるはむつかしき事にてありたと同じ事にて、神の言ふ事は是まで書物にある事や、人間の知りてゐる事は言はず、是までにある事を教ゆるには及ばず、書物にても無い事、人間の知らぬ事を言ふて教ゆる事故、是亦むつかしきはすの事なり。

此の世界といふは月日兩人の身體なり、天地抱き合せの世界、人間は月日の懷住居をしてゐるものなり。それ故に人間のする事は皆月日の知らぬ事なし。人間は皆神の子なり。身の内は皆神の借物なる故に、他人と言ふは更になし、皆兄弟なり。此のものと知りたる

ものなし。

是迄人間は病と言へば醫者藥、拜み祈禱やと言ふたれど、人間には皆八つの心得違ひあり。それは、ほしい、をしい、かわい、にくみ、うらみ、はらだち、こうまん、よくにして、それは皆身の内の埃なり。

十五歳までの子供の悪しきは皆親の埃を子に現はして意見する事なり。又十五歳以上の者も悪しき病、不時災難も、皆其の者は勿論、第一家内中の埃積り重る故に、神より意見立腹、意見立腹と云ふも憎くさではなし、助けたいから心をなす爲に意見する、之を「病の元は心から」と云ふなり。人間には病もなく、薬もなく病と云へば皆心からと教へ給ふ。

此の親に助けを頼む者は、親の教の通り家内残らず十五歳より心得違ひを眞實より懺悔し、此の度は神の教の道を守り、嘘とへつらふと慾と高慢なき様にして、人を助ける心と入かへて願へば、其の心を神がうけとりて萬づ助けをする。即ち、月日天に現れて照すは兩人の目にして、目はあかき故に世界中は明かなり。社の赤き衣服の中に月日籠りる故に何事も見ゆるも、他なる衣服を着れば身が暗くして着ておる事出來ず、此の社も同じ人間にてはあれども、此の人と云ふは元親のいざなみの命の魂なる故に、何國の者でも助け

たい可愛ばかりの心あるなり。此の者を雛形として月日入り込み助けを救ゆるものなるが故に、世界中の者も親里へ参り親に助けをもらをと思ひ願ふには、親の心を雛形として心を入れかへて願ふなら、助けは勿論善悪とも神より心を見わけて返しする事間違は更になしとの仰せなり。

此度此の地名に天理王命と授け給ふは、中山のみき、此の者は若年より今に至りても人を助ける心一筋のもの、此の心月日しかと受取りて見すます所、此の者の元なる魂と謂ふは元なる親のいざなみの命の魂を生れさせおきたる事故、天より降り給ふて體內を月日の社にもらいうけ、みきの代りに此の屋敷地名に天理王命と授け給ひしなり。

人間身の内は神の貸物、身の内は神の自由用、おびやたすけを思案してみよ、此の屋敷へ願ひ出るなら、腹帯いらすづ凭れ物いらすづ七十五日の毒忌いらすづ身の穢れなし。常の通りに許しおく、おびやたすけは最初人間を拵へた神の證據、萬づ助けの道明けなり。此の先はおびや自由用、早めなりと延しなりとも願の通り叶ふの守りを出す。

又、疱瘡せぬようの請合の守り、悪難よけの守りを出す。

其の上百姓の助けは芽出しの札、蟲よけの札、實りの札、其の他に肥の授けと言ふは、糠三合、灰三合、土三合、都合九合調合して肥し一駄の助けとなる。

之を施すに就いては、肥の助けは百駄づゝ、一勤にかけ、守り千かず、御札も千かずを一勤にかけて出す。勤と云ふは皆神樂勤の本勤なり。

又、人間の心をすましたる上は、何時迄も病まず死なず弱りなき様の萬づ助けを教へる。即ち人間を宿し込みたる地場の證據に、元十柱の神のいはれ形をもつて甘露臺を建て置き、世界中の人間の心すみたる上は、甘露臺の上へ平鉢と「じきもつ」とをそなへ、夫に天より甘露を與へる。是は世界中の人間の壽命藥となる。人間は死に行くと云ふも死ぬるではなし、身の内を神が退くなり。死ぬと云ふは、衣服を脱ぎすてるも同じ事なり。此度神樂勤を教へるは是も亦今迄にない事を創めかけ。是は元十柱の神の姿を象るものにして、神樂兩人は元親のくにとこたちの命におもたりの命なり。又男神は男の面を被り、女神は女の面を被り、勤め手振りも元の道具雛形の形を學びさせ、陽氣手踊りをするなり。此の人数十人鳴物九つ、都合十九人にて、神を勇むる陽氣勤なり。

陽氣勤して助かると云ふは、此の世界は人間の陽氣ゆさんを見ようとて人間を拵へ世界を拵へたるなり。依つて元の姿を寄せて、ともに勇むるに付き助かるもの、只今の人間は夫れを知らずして、人はどうでも我が身さへよくばよき事と思ふ心が違ふ故に、此度は月日様がだめの助けを教へ給ふなり。其の教は悪しきをはらふて陽氣の心になりて願へば、

神の心も人間の心も同じ事、人間身の内は神の貨物なる故に、人間の心が勇めば神も勇んで守護するなり。身の内の悪しきを助ける事を願ふ勤をするには、願人は勿論、勤人衆も悪しきをはらうて眞實助けたいとの心をもつて願ふべし。

此の先は國一番に説きかかせ、人間の心をすましたる上は毎年豊熟をとらせ、尙又日本におや柱を建て、萬國までも親國と云ふて敬はせ、日々助けをもらをとて國々より參る道を第一に神はせきこみ給ふ。

此の御話は常々取次へ御聞かせ給ふ事の大略を記すものなり。

泥海古記指掌

緒論

天然美

宇宙は偉大なる藝術品である。人智人力を超えた偉大なる藝術品である。而かもそれは單なる藝術品に非ずして、宗教と藝術とが混一せる藝術品である。

凡そ美とは無關心の快感を與へるものを指して言ひ、宇宙の完善なる統一と調和こそ眞の美である。一輪の花を見、一匹の小蟲を見ても、其処に美があり、其處に我等に教ゆる何ものかが存する。何故に然るぞ、曰く、神の意匠に満ち／＼てゐるが故である。一つの藝術品には作者の魂が込められてゐる如く、宇宙のありをあらゆるものには、創造主の御旨がみちみちてゐる。

凡そ如何なる宗教と雖も創世記をもたぬものなく、キリスト教は旧約聖書あり、佛教に成劫論あり、本教に泥海古記あり、其の何れもが、其の宗教の特異性を窺ふに足るものである。本教の泥海古記は本教々理の淵源にして單なる創世説に非ずして、人類救済の書であり教理の淵源の理がこもりてゐるのである。故に吾人は之を創世説として扱はず、何処迄も泥海古記として扱はんとするものである。

本書を泥海古記指掌と題する所以は、泥海古記の内容の全般を掌を指す如く解明せんとする所に本書編纂の目的を有するが故である。

第一 成立要件

一、泥海古記とは何ぞや

泥海古記

泥海古記とは教祖時代に「此の世元初りのお話」と言はれてゐたもので、教祖時代には之より他に教理はなかつた。こんな訳で、泥海古記と言ふものは、通常一般に考へてゐる様な一冊の書物の名ではなく、一つの噺、即ち「此の世の元初りのお話」であつたのであるが、後に之が一冊の書物にまとめられて「泥海古記」と呼ばれる事となつたものである。故に泥海古記は本教々理の淵源と爲るものにして、其の骨子を爲すものは創世説である。

然らば「此の世の元初りのお話」を何故に泥海古記と名付けられる事となつたかと言へば、泥海古記は其の巻頭に「此の世の元初りは泥の海」と誌してゐる所から、誰言ふとなく「泥海古記」と呼ぶ事となつたものである。従つて教祖が「泥海古記」と名付けられたのではない。

泥海古記の
集成

前述する如く泥海古記は最初一つのお話、即ち「此の世の元初りのお話」であつたのであるが、それが如何にして一冊の書物となつたか、即ち泥海古記となつたかと言へば、晩年教

祖が「こふきをつくれ」と頼りに仰せられたので、高弟達は「此の世の元初りのお話」を通俗的に布衍したものを作れと仰せられたものと解して、之が泥海古記集成の動機となり、高弟達は我も〜と競つて泥海古記を集成した。然し之を教祖の御覽に入れると「そんなものやない」と仰せられて、にこ〜と笑つてをられたと云ふ事である。

それは泥海古記とはそんなものではないと仰せられたのか、或は「こうき」とはそんなものではないと仰せられたのか、今日では不明であるけれども、教祖が口授せられたと云ふ点に於て、或はそれが人類救済の上に必要欠くべからざる点に於て、或はそれが本教々理の淵源をなすといふ点に於て、泥海古記は重要な存在である。

序ながら「こうき」の解釈として最も一般的には泥海古記と解されてゐるが、之を「おふでさき」と解するものもあれば、或は教祖の傳記だと解する向もあれば、めい〜の「こうき」を作る事だと解する向もある。何れが其の眞意であるかは、今後の研究にまつ事とする。前述する如く泥海古記は多くの高弟が各々筆をとつたものであり、而かも其の何れもが教祖の思召に叶はなかつたものであるから、泥海古記には定本がない。故に「此の世元初りのお話」を誌した文献を総称して泥海古記と言ふ。

斯くの如く泥海古記には定本がないが、傳道の盛んとなるに連れて、此の種の分り易い通俗的な布衍書に対する一般の要望は加速度的に増加し、高弟の集成した泥海古記が信者の間

に続々として手写せられ、廣く流用するに至つたのである。
之を要するに泥海古記とは、天理教の創世説に関する文献の總称である。

二、泥海古記の成立要件

泥海古記の
地位

教祖が此の世の元初りのお話を遊ばされたのは一度や二度ではなく、或る時は断片的に示され、或る時は終始一貫して述べられた事もあるが、其の文献に現れた最初のものは「おふでさき」にして、それは明治二年から十五年に亙つて教祖御自ら筆を執られたものである。而して泥海古記に関する思想が最も明確に示されてゐるのは、明治七年の第六号にして、之を高弟の手によつて布衍したものが此処に言ふ泥海古記である。学語を借つて之を言へば「おふでさき」は聖典であり、泥海古記は聖傳即ち聖典に関する思想の発表である。故に其の地位より言へば「おふでさき」が第一次的であり、泥海古記は第二次的である。

泥海古記の
成立要件

然しながら泥海古記は高弟の思想によつて著作せられたものではなく、教祖のお話を高弟が集成したものであるから、言ふまでもなく其の成立要件は啓示に他ならない。

とは云ふものの、泥海古記は其の何れもが高弟の手によつて集成せられたものであるから、動もすればそれを集成した人の私見も混る事は止むを得ない。従つて大同小異のある事も亦止むを得ない事である。故に泥海古記を見るものは、聖典と対照して教祖が之を示されし眞

泥海古記に
対する態度

意を汲まなければならぬ。吾人も亦此の態度に於て泥海古記の眞意を宣揚せんとするものである。

泥海古記は何の目的を以て示されたかと言へば、單なる神の創造の説明書ではなく、人類救済の目的を以て書かれたものである。従つて泥海古記は独り創世説の名に於て價值を有するのみでなく、人類救済の書なる所に絶大なる價值を有する。故に之を哲學的に解する事は誤りである。或は又泥海古記に於ける進化の道程が、一般進化論に示す道程と酷似するの故をもつて、之を普通進化論と同一視する事も亦誤りである。即ち泥海古記を哲學的に、科学的に取扱ふ事は誤りである。即ち泥海古記は學術書に非ず、吾人の知的要求に満足を與へる爲に示されたものではなく、宗教的要求を満たす爲に書かれたものである。されば泥海古記は神話傳説歴史等を記されたものではない。故に泥海古記に示す神名と、日本の古典に示す神名とが酷似するの故を以つて、之を同一の神として扱ふ事も亦誤りである。要するに泥海古記に臨む者は、宗教的態度か若しくは美的態度かの何れかによつて臨むに非ざれば、其の眞意を汲む事は出表ない。

之を要するに泥海古記は啓示についての思想を發表せしものにして聖傳に屬する。故に泥海古記の成立要件は啓示に他ならない。

第二 内容の中心點

泥海古記の示す内容の中心點は（一）神（二）人（三）神と人との關係の三点に歸着する。吾人は今之を三章に分ちて逐次詳説する事とする。

第一章 神の存在

一、天理王命

泥海古記は天理王命が啓示によつて示された所を集成したものであるが、天理王命とは如何なる神かと言へば、泥海古記は之を次の如く記してゐる。

地場に天理王命と名付け給ふは、みきの心天理に叶ふた故なり。なれども人間には神名を付ける事能はざる故、此の屋敷の地名に末代の名として授け給ふなり。此の屋敷と云ふは、世界創めし因縁ある故に神名を授け給ふなり。

即ち教祖は神の実現にましますが、人間に神名を授けては一般人が神を人間と同じく肉体をも具へた存在だ、目に見える存在だと誤解してはならない。神は人間の如く眼に見える存在ではない、飽迄天地の心である。此の意義を示す爲に、人間が造られた最初の地場に天理王命

と名付け給ふたのである。即ち天理王命は目に見えざる天地の心であるが、それは宇宙を創造し給ふた造物主に在します事を示す爲に、人間の親里、地場に天理王命と名付け給ふたのである。此の事は次の聖傳（おさしづ、二一、二、八）に明かである。

天理王命と云ふ原因はもとなし人間をこしらへた神一條である。

而して造物主は唯一であると聖典（おふでさき八―七五）に、

にんけんをはじめたおやがも一にん どこにあるならたつねいてみよ

と示されてゐる。要するに地場に天理王命と名付け給ふたのは、天理王命は唯一の神に在します事を示し、それは目に見えざる存在即ち天地の心である事を示す爲である。

而して天地の心とは靈を意味し、其の靈は不滅であると「此の屋敷の地名に末代の名として授け給ふなり」と示してゐる。

之を要するに神は目に見えざる不滅の存在即ち心霊である。

然らば神は根本原理と云ふが如き哲学的存在かと言へば、さにあらずして人格を具有し給ふ。然らばそれは如何なる人格かと言へば、教祖の人格が神の人格を代表する。之を「みきの心天理に叶ふた」と記してゐる。然らば教祖の人格は如何なる人格にましますか、泥海古記は次の如く記してゐる。

天理王命と言ふ原因は、大和國山辺郡もと庄屋敷村中山善兵衛の妻みきと言ふ者、此の人

は生れつき宗教心深く、又難産の者其を救助する事夥しく、出産する毎々には乳沢山につき、隣家の乳不自由なる者阿三人を乳をもて助け給ふ。其の中の男一人預りて乳の世話を致し居る折柄、其の預り子疱瘡にかゝり、十一日目より黒疱瘡と相成る。医者はこの疱瘡ではとても助かる事むつかしと言ふにつき、吾がの世話中に死なせては何とも申訳なし、何でも助けねばならぬと決心し、吾が夫へも知らさずして一心不乱に氏神へ参り、其の他八百万神を呼出し「此の度の吾が預り子の疱瘡をお助け下され、此の子の壽命には無理な願にはあれども、百日の跣足参りを致します。右願の通り壽命下さるならば、其の代り吾が子三人ある中かゝり子一人お残し下さればあと二人の命を差し上げ、尙又子供二人で不足の時は、願満つ上は吾がの壽命も差上げます」と願をかけ、其の他奈良の二月堂觀世音、稗田の大師、武藏野の大師（子安地藏なりとも言ふ）の三ヶ所へも、一ヶ年三月の間は月参りをすると誓つて願ひたて、一心不乱に願ひ給へば、預り子無難にて全快せり。然るに天保八年酉年右みき四十歳の時、十月廿六日長男善右衛門農業致し居る中、俄かに足痛み早速医者に就き成るべく養生致しおれども治らず、余儀なく同國同郡長瀧村山伏市兵衛なる者を傭ひ、護摩を焚きて寄せ加治をせしに痛み治る。又痛み、同じ人を傭ひて寄せ加治をすれば痛み治る。故に一ヶ年十度も護摩を焚きて寄せ加治をなし、其の度毎に痛み治る。

みき四十一歳の十月廿四日の寄せ加治に、始めてみきに幣を持たせば、それよりみきは夢中となり、荒ぶる神降り給ふ。如何なる事と思ひ恐れて尋ね奉れば「吾は天の將軍」と答へ給ふ。故に恐れて尙も伺ひ奉れば、「此の度はみきの身体を神の社に貰ひうけに天降りた」と宣給ふ。然れども皆の者は神と更に思はず、是は狐狸の類、憑きものの仕業と思ひ、親類一同寄り集り談じ合ひ、退ぞかさんとお断り申上ぐれば「此方はなかく退ぞく神に非ず、みきの身体を神の社にもらいうけ、もらいうけたる上は、神のまゝにして三千世界になきめづらし助けを教へる神の身体とするなり。是を彼此と云ふならば此の家断絶さす」と厳しく仰せらる。三日三夜の押し問答せしも、みきは此の間水一滴も飲まず、其のまゝ言ひ通すに付き、力及ばずよんどころなく十月廿六日朝九つ時「差し上げ奉る」と申上ぐれば、夫れよりみき正氣と相成り、其の夜の九つ時に至り、みきの寢間の天井に大なる音ありと思ひしに、みきの心耳に「吾はくにとこたちの命と云ふ神なり」と聞え、身重くなりし如く感じ給ひ「神が代りて出る程に」と仰せられ、暫くして前の如くにして「吾はおもたりの命と言ふ神なり、十柱の神が代るく天降るなり」と曰ふ。それより神が次々に降り給ひ、其の度毎に身が重くなる如く感じ給へり。

夫より何時となく月日両神より仰せらるゝには、我が兩人の神はもと泥海の中より現はれて、ない人間ない世界を拵へた神である。今天降る爲、是迄に寄せ加治を教へ置き、天よ

り見澄ませば此の屋敷は人間を最初に宿し込みたる因縁ある故に、もとの約束にて天降りたるなり。みきの魂と云ふは、人間を宿し込みたる母親いざなみの命の魂を授けおきたるをもつて、どんな人でも助けたいとの心あるなり。世界中に我が子程可愛いものはない。それに吾が子二人も差し上げ、其の上に吾が壽命まで捨て、人を助ける心あるは、人間の最初の親の魂ある故なり。みきの魂は最初此の屋敷にて人間をうみ出したる親の魂なり、故に其の魂をもとの屋敷へ連れ帰り、それを見澄まし天降りたるなり。然る上は神のまゝなり、よつて神の云ふ事守るべし。此の上は神より至極貧に落すなりと仰せ給ふ。

神は今より此の上もなき貧に落ち切れ、それより世界を助けさすと曰へども、内々は言ふに及ばず親類まで夜晝限らず寄り合ふて彼此と談じ、神やと云ふても貧に落ちきれと言ふ様な神なれば何でも彼もで退ぞかさんとて、親類は此の様な神を祈る事ならば、今後一切つき合はずと申せども、神は退ぞかず、何でも彼でも家財は残る所なく施せ、然る上は三千世界をめづらし助けすると仰せらるゝ故、内々の者もよんどころなくして神の仰せに従ひ、親類はつき合はずなりしなり。其の間にも皆の者が余りにもみきを責めし爲、井戸溜池へ身を投げんと其の場に近付き身を投げんとすれば足は動かさず、故にあと戻りして帰らし事も度々なり。

中山家は相当の百姓家なりし所、内々の者は余儀なく神の仰せに従ひ田畑を賣り拂ひ、尙

も神の仰せの通り建物家財残らず十ヶ年の間に人々に施し、身代を無くして難澁致し居るに、誰言ふとなく自然と人々が拜みに参り、天理王命と拜みすれば何でも願通り助かる事不思議なり。

助けと云ふは、是迄に人間を拵へ教へたる事も同じ事、是迄になき助けなり。最初世界を創めるはむつかしき事でありた、今めづらし助けを創めるも同じ事、神が表へあらはれて此の世の眞美を教へてめづらし助けを教ゆるを、誰も知りたる者は更になしと御聞かせ給ふなり。

即ち教祖の偉業は到底筆舌の能く盡し得る所ではないが、それは恰も自殺せんとする者を見る時、如何なる人も身の危険を忘れて無意識に之を助けに走る、自殺せんとする者でさへ他の自殺せんとするものを見る時は思はず助けに走る。即ち教祖は人を救ふ事を此の上もなき喜びとし給ひ、其の御生涯を通じて救ひ一條に終始し給ひ、人を救ふ爲めに心を碎き給ふた。而かもそれは艱難辛苦を超越し、教祖の御心から自然に流露する止むに止まれぬ白熱的愛であつたのである。即ち教祖は救ひし人間を新しく創造する爲めに白熱的愛を注ぎ給ふ。換言すれば天理王命は教祖の如き人格をもち、教祖の如き愛をもつて人間を創造し、教祖の如き白熱的愛をもつて人間を育成し給ふ。天の將軍とは罪惡討伐の將軍即ち救主にして、天理王命が救主として顯れ給ひしもの即ち天の將軍である。天の將軍の人格は教祖の人格が之を示

天理と命の
人孫御教祖
の人格七?

宇宙の起源

し給ふ。

之を要するに天理王命は人格的心靈に在し、其の人格は教祖の人格が之を代表する。

天理王命は教祖が人間を新しく創造したる如く人間を創造し給ひ、教祖が人間を愛し給ひし如く人間を愛し給ふ。之泥海古記の示す天理王命に在します。

然らば天理王命は如何に人間を創造し、如何に人間を愛し給ふか。之を神の御業に於て示してゐる。

二、神の意匠

天理王命は如何にして人間を創造し給ふたか。泥海古記は宇宙の起源を示して、

此の世の本源なるは人間もなく世界もなく泥の海ばかり、其の中に神と云ふは月日兩人居たばかり、其の月様と云ふは「くにとこたちの命」と言ふ神、日様と云ふは「おもたりの命」と云ふ神なり。

と記してゐる。

抑々宇宙は最初から今日の如きものであつたかと言へば、否、否、決して今日の如きものではなく、宇宙は殺風景なる泥の海であつて、森羅万象何一つなく、たゞ其処に月日両神が在しましたのみであつた。即ち宇宙は最初眞暗な闇であつたが、天理王命は先づ月日即ち光

を與へ、月日を中心として人間を創造し給ふ事とせられ、月日に創造の事を一任し給ふたので、月日は此処に先づ泥の海を創造し給ふたのである。

自然法

泥の海とは混沌たる貌を示すと共に物質を意味し、それは宇宙の発生源を示すものである。而して物あれば則ちあり、即ち物あれば之を支配する法則がある。物質を支配する法則は自然法なるが故に、月日両神が「泥海の中にゐた」とは、神が自然法によつて万物を支配せられてゐる事を示し、それは同時に自然法の出発せし事を示すものである。

之を要するに暗黒から光明へ、光明から混沌たる宇宙が発生し、神は自然法によりて之を支配せらるゝ事とし給ふたのである。

創造の意義

上述する如く神は宇宙を創造し給ふたが、然らば如何なる意義をもつて神は宇宙を創造し給ふたか。之を、

其中より月様が先に出て國床を見定め、御固め給ひて後、月日の相談により、泥海の中に月日兩人居たばかりでは神と言ふて敬ふものはなく、何の樂しみもなきをもつて、人間と云ふものを拵へる事とし給へり。

と示してゐる。即ち先づ月神が「國床を見定め御固め給ひて後」即ち人間の住居する所を定め給ひ、殺風景なる泥の海に月日両神が在しますのみでは何の意義もないから、人間と云ふものを拵へて、人間をして長く樂しく神に仕へしむる爲めに人間を造り給ふ事とし給ふたの

である。

斯くて人間は創造せらるゝ事となつたのであるが、神は如何なる意匠をもつて人間を創造し給ふたかと言へば之を、

人間を拵へ何か万づの事を教へて守護すれば、人間は重宝なるものにて「よふきゆさん」を見らるゝ事と相談を定め給へり。

と記してゐる。此処に言ふ「よふきゆさん」は人生最大の幸福たる神人交樂の樂しみを意味し、神人交樂の意匠を以つて人間は創造せられし事を意味すると共に、それは同時に人間に人格を賦與し給ふ事とせられし事を意味する。

凡を樂しむは自由の存する所に存し、機械的なる所に樂しむはない。従来^レの運命觀が諦らめにあつた事も、要するに人間は因縁因果の法則に縛られて身動きも出来ぬとする所にあつたのである。即ち樂しむは機械的な所に存在するものに非ずして、自由の存する所に樂しむも亦存する。而して自由の存する所には責任が存する故に、自由を與へられてゐる限り、其の濫用と誤用とは自由意志即ち人間に責任がある。然しながら自由を濫用し誤用しては自由の眞義に悖る。此処に神人交樂と云ふ目標を與へ、此の目標に向つて自由意志を用ゆべく教へられ、其の爲めに良心が興へられたのである。即ち判断（良心）と自由とは神より出で、此処に道徳が成立するのであつて、此の事は人間に人格を與へられし事を意味する。要する

人類創造

意義

ようき

生物の起源

に此の事は人間に道德性を與へ給ひし事を意味する。故に人間は其の道德性をもつて神人交樂する意匠に基づいて創造せらるゝ事となつたのである。人たるものは宜しく此の神の御旨を尊重せねばならぬ。

斯くて人間創造の意匠は定まつたが、さて人間を造るには資材を必要とする。此処に天理王命の攝理によつて種々のものが顯れて来る。之を

人間を拵へるには種苗代に道具雛形がある。故に之を見出す事と見澄せば、泥海中に「どちよ」ばかり居る。其の中に「うを」と「み」と他なるものもゐるなり。

と記してゐる。凡を見るの意義には二つの意義がある。目に映して知るを借光眼と云ひ、知りて明かにする事を心眼と云ふ。泥海古記に示されてゐる月日が見ると云ふ事は、月日即ち神が其の心眼によつて道具雛形即ち資材となるものを判別し、之を創造の資材とし給ふ事を意味する。即ち神は心眼を開いて泥の海を見渡された所「どちよ、うを、み、其の他のもの」が現れて来たのであるが、それは神の攝理によつて物質に生命が與へられた事を意味し、それは同時に生物の起源を意味する。

道德性の起源

「うを、み」とは何か、又之と創造と如何なる關係があるか。之を次の如く記してゐる。よく見澄せば「ギギヨ」とも亦人魚とも云ふ魚がある。此の魚は今の人間の顔にて鱗もななく、肌は人間の肌。又見澄せば「み」といふ白蛇がある。此のものも人間の肌にて顔は人

間鱗もなし。世界中に唯一すじより他になき「み」なり。二人其心は眞直で正直なり。此の姿心をみて此のものを引寄せて、此の度人間と云ふものを拵へたきにつき、其の方の姿心をもつて人間の種苗代に貰ひうけよふと仰せられども、兩人それを嫌ひしを以て、うんだ子数の年限がみちた上は元の屋敷へ連れ帰り、此の世の一の神とし、人間の親神と云ふて拜をさすと約束し、無理に承知させてもらいうけ給へり。

此処に言ふ「嫌ふ」と言ふ意味は、嫌悪に非ずして謙遜して之を遠慮すると解するを至当とする。何故ならば之が月日の約束の動機となつたからである。即ち神がうけとり給ふたから約束せられたのであつて、神が嘉納し給ふには「嫌悪」ではなく、神の御心に叶つた「嫌ふ」でなければならぬ。即ち神の道具に使はれると云ふ事は名誉であるが、名誉利慾に囚はれずして、自分はそんな柄でもない謙遜したから神が之をうけとり給ふたのであり、それを「嫌ふ」と表現したのである。而して「嫌ふ」と言ふ事は感情である。故に此の事は動物に感情を興へられし事を意味する。然しながら其の感情は人間の如く完全なものでない事は言ふ迄もない。更に之を道徳的に言ふ時は、其の人情から言へば謙遜してへり下るのが人情の自然の美しさである事を示し、それを神が嘉納し給ふて樂しみを興へらるゝ事を示す。即ち謙遜の徳は神は之を嘉納し給ふも、よくどころまんより人を眼下に見下し、神を蔑ろにする者は神の御心に叶はぬ事を示し、名誉利慾に囚はれぬものにこそ却つて名誉が興へられる事

旬初限にふる泥

海古記 指掌

悪神がまゐれたか

泥涌を記す

うき、み、ふ、こ、人、り

即ち「うを、み」の二人は共に其の性質が良心的であつたので、お前達の姿心を人間の種苗

代に用ひたい、就いてはお前達の身も心も共に神の方へもらひうけたいと仰せられたが、二

人は謙遜して之を遠慮した。其処で月日両神はうんだ子数の年限がたつたならば元の屋敷へ

連れ帰り、此の世の一の神、人間の親神と云ふて人間に拜をさすからと約束せられ、遠慮す

るのを無理に承知させて了はれた。種は発展の徳、苗代は育成の徳を象徴し、良心をもつて

人間の主体とし、自由意志によつて神の御心に従つて行く事を以て人間の本性とする事と定

め給ふたのである。而して此の事は人間を道德的に支配し給ふ事とせられた事を意味する。

此の時の月日の約定は、教祖の出現を予言する一大予言である。即ちうんだ子数の年限の

到未した上は、人間の親神と云ふて拜をさす一神人交通の攝理を示し、以つて神人親和交通

の道をひらく事を示してゐるのである。

靈魂の起源

を示し、それは同時に神を信じ神に仕へ人を敬愛してこそ神が嘉納し給ふ事を意味する。故に「嫌ふ」を嫌悪と解せずして、遠慮申上げると解するを至当とする。心が眞直で、正直とは良心的なる事を指す。即ち「うを、み」の二人は共に其の性質が良心的であつたので、お前達の姿心を人間の種苗代に用ひたい、就いてはお前達の身も心も共に神の方へもらひうけたいと仰せられたが、二人は謙遜して之を遠慮した。其処で月日両神はうんだ子数の年限がたつたならば元の屋敷へ連れ帰り、此の世の一の神、人間の親神と云ふて人間に拜をさすからと約束せられ、遠慮するのを無理に承知させて了はれた。種は発展の徳、苗代は育成の徳を象徴し、良心をもつて人間の主体とし、自由意志によつて神の御心に従つて行く事を以て人間の本性とする事と定め給ふたのである。而して此の事は人間を道德的に支配し給ふ事とせられた事を意味する。此の時の月日の約定は、教祖の出現を予言する一大予言である。即ちうんだ子数の年限の到未した上は、人間の親神と云ふて拜をさす一神人交通の攝理を示し、以つて神人親和交通の道をひらく事を示してゐるのである。

右に示す如く神は人間に道德性を與へ、之を道德的に支配し給ふ事とせられ、良心を以つて人間の主体とする事と定められた。次に、

然る上は男女の道具、人間の魂、五倫五体の道具雛形を見出す事と見澄せば、泥海の中に

「どちよ」ばかり居る。此のものを月日兩人食て其の味はい心の勢をみて、人間の魂とし給へり。

と記されてゐるが、此の事は「どちよ」の性質に基づいて、靈魂を與へ給ひし事を意味する。即ち理性は此処に出発するのである。

凡そ「どちよ」なるものは泥の中に居て泥に塗れぬものである。故に「どちよ」の性質に基づいて靈魂を與へられたとは、泥を道徳的に解する時は誘惑なるが故に、誘惑に打ち克つ爲めに理性を與へられし事を意味する。

以上示す所によつて明かなる如く、人間の主体、人間の本性、人間を支配する法則を定め給ひ、次に人体の意匠にかゝり給ふた。即ち、

見澄せば乾の方に「しやち」と言ふ魚がある。此のものも承知させて貰ひうけ、食べて心味はひを見るに「しやち」と言ふ魚は勢ひ強く変にしやくばるものである故に、男の一の道具に仕込み、人間の骨の守護とし給へり。

と記してゐる。此の事は「しやち」の特性をもつて建設の徳とし、此の徳を用ひて男の一の道具とし給ひ、此の徳をもつて堅固の機能を愛護する事とし給ふた事を意味する。又、巽の方に亀が居る。此のものも食べて心味はひをみるに、此のものは皮強く倒れぬものである故に、女の一の道具に仕込み、人間の皮つなぎの守護とし給へり。

と記してゐるが、之は亀の特性をもつて比和（中和）の徳とし、此の徳を用ひて女の一道具とし、此の徳をもつて結合、連続の機能を愛護する事とし給ひし事を意味する。又、

東の方に「うなぎ」がある。此のものの心味ひをみるに、此のものは勢強く頭からでも尾の方からでも出入りするものなる故に、人間の飲み食ひ出入りの守護とし給へり。

と記してゐるが、之は鰻の自由自在の特性を以つて保養の徳とし、之を以つて保身の機能を愛護する事とし給ひし事を意味する。又、

坤の方に「かれ」がある。此のものの心味ひをみるに、此のものは身うすく味ひよきものなり、円きものや角きものにては風が出ず「かれ」は身うすきもの故、人間の息、風の守護とし給へり。

と記してゐる。之は「かれ」の活動の敏速なる特性をもつて活動力の徳とし、之をもつて生氣の機能を愛護する事とし給ふた事を意味する。次に

尙も人間の樂しみ、食物を拵へる道具と見澄せば、西の方に「黒くつな」がある。此のものを引きよせて貰ひうけ、食べて心味ひ姿をみるに、此のものは勢強く、引てもきれぬもの故、立毛、地より生えるものを引き出す守護とし給へり。

と記されてゐるが、之は「黒くつな」の特性を用ひて力の徳とし、此の徳をもつて人間の食物たる草木の発芽の機能、人間産出の機能を愛護する事とし給ひし事を意味すると共に、植

生死の起源

物發生の起源を示すものである。

又、人間生き死に出直す時に縁切る道具と見澄せば、良の方に「ふぐ」と云ふ魚がある。此のものももらいうけ食べて心味ひをみるに、此のものは大食するものにして、食へばよくあたる魚である故に、人間の生死の時に縁を切る守護とし、其の他此の世の万づ切るもの一切の守護とし給へり。

と記してゐるが、之は「ふぐ」の特性を用ひて切斷の徳とし、此の徳をもつて人間を始め万有の生死の機能を愛護する事とし給ふた事を意味する。即ち生死の起源を示すものである。

右に表はすものども、嫌ふものを無理に承知させてもらいうけ、人間を拵へる相談しまりついたり。

意匠の完了

と記されてゐるが、之は右の者等は皆繪べて道具雛形となることを、謙遜して遠慮するのを無理に進めて承知させた上之を用ひる事となり、此処に人間創造の意匠の完了した事を意味する。

之を要するに天理王命は月日即ち正義と仁愛（後章参照）の徳を用ひ、發展、育成、建設、比和、保養、活動力、力、切斷等の諸徳を作用せしめ、人間をはじめ万有を創造し給ふ事とせられた事を意味する。

人祖の出現

斯くて此処に人間を創造する事となつたのであるが、是に月日両神の愛護によりて、人間

が受生する事となつた。之を

是に月日様の守護によりて「ギギヨ」の方へ「しやち」と云ふ魚の勢を男の一の道具に仕込み「くにとこたちの命」の心入り込み給ふて男神とし給ひ「いざなぎの命」と名付け給へり。之人間の種の神なり。又「み」の方へ亀の皮強きを女の一の道具に仕込み「おもたりの命」の心入り込みて女神とし給ひ「いざなみの命」と名付け給へり。之人間の苗代の神なり。

と記してゐる。之は正義の徳を用ひて建設と発展の作用を「いざなぎの命」に賦與し、之を男性の人祖とし、仁愛の徳を用ひて比和と育成の作用を「いざなみの命」に賦與し、之を女性の人祖とし給ひし事を意味する。

月日二柱の神は「いざなぎの命、いざなみの命」を種苗代とし、甘露台の地場を神体の中央とし、北枕の西向きに寝て九億九万九千九百九十九人の数を、三日三夜になむぐくと二人宛宿し給へり。

と記されてゐるのは、人祖によりて人間が受生した事を意味する。九億九万九千九百九十九人、三日三夜、地場、西、北等は後に示す如く之等には深い意義が藏されてゐるのであるから之を軽々に看過する事は出来な

「なむ」とは何か。

なむくとはアウの事なり、なむとは夫婦の事、天地を象りて夫婦をはじめ、人間の一の樂しみとしたる事をもつて、人間もなむくとしてゐるはよき事なり。

と記されてゐるのは、呵呷の吸呼をもつて人間即ち夫婦を造つたのであり、夫婦は天地を象つて造つたのである。即ち天地と云ふももと一なりし如く、人間も一對の夫婦をもつて人間といふ。即ち夫婦はもと一体である。夫婦は一体なるが故に和合する。故に夫婦の呼吸が合ふて夫婦和合する事は、人間の最大の樂しみとする所であり、天地抱擁の中に万物生ずる如く夫婦相抱擁する中に子供を生ずる。天地の愛によつて万物が成長する如く、夫婦の愛によつて子供は成長する。即ち夫婦は人倫の大本である。而して天地を象りて夫婦を始めたとは、男女の天職使命の出発点を示すと共に、社会は愛をもつて結ばるゝものなる事を意味する。何となれば夫婦は家庭を形造るの始めにして、而かも社会は家庭の延長であるからである。又、人間と云ふ名を付けしは、雛形を人魚とも云ひ、ギギヨとも云ふをもつて、此の理によるなり。又、人間がよき事あれば之を今にゲンがよいと云ふは之によるなり。

と記されてゐるのは、男性の人祖として用ひた資材が人魚とも云ひギギヨとも云ふから人間と名付けたのである。人間がよい事があれば「げんがよい」と云ふ事は今でも言ふてゐるが、其の起りは茲にあるのである。之は夫唱婦和の眞理を示し、男女は同時に創造せられたのであり、男女は平等であるが、男女の天職使命よりして、家庭は男子が中心となり、女子は其

の補助者となり、互に敬愛してこそ夫婦和合する事を示されたのである。此の事は月日の相談に於ても見らるゝ。即ち先づ人間創造の事を月神が提唱せられ、日神が之に和し給ふたのである。されどそれは男尊女卑を現すものではなく、男女の差別を現すに止まるものである。何となれば、靈は男女何れも「どぢよ」によつて與へられたからである。従つて男女の差別は根本的な差異ではなく、差別に過ぎない。

西東北南と云ふは神も人間も目は本心なる故に、人間宿し込みの時に月日兩人の目の向きたる方を二神のしんと云ふ心にて西と名付け、日は西から東へかす故に東と名付け、又、宿し込みがすんで「ぎ様」が先にたつて向きたる方を北と言ひ「み様」が後よも起きて向きたる方を南と名付け、是で方位も定まりしなり。之を今に西東北南と云ふなり。

方位の名称も亦人間を宿し込んだ時に付けられたものである。即ち神も人間も目は最も重要なものであるから、月日両神の目の向いてゐる方を西と名付け、日を西より東へかす故に東と名付け、宿し込みがすんで「ぎ様」が先に立つて向き給ふた方を「き、たつ」北と名付け、「み様」があとより起きて向き給ふた方を「みなみ」即ち南と名付け、茲に方角が定まつたのであり、此の事を今でも西東北南と言ふてゐるのである。又、

此の世と云ふは世をお照し下さる月様が先に思ひ付きて世界を拵へ下さる先祖様、國床を御固め定めありて始まりました。即ち夜を照し下さる神よりはじまる故に此の世といふ。

此の世界を此の世といふのは、夜を照し給ふ月神より始まつた故に此の世といふのである。
又、

くにとこたちの命は宿し込みの時「つく理」をもつて月と云ひ、月様が先に立つ故に月日と云ふ。此の神が万物に至る迄心を配り給ひ、人間の悪氣をなをさんが爲に佛法を弘め、子供の爲に法事を教へ給ひしなり。

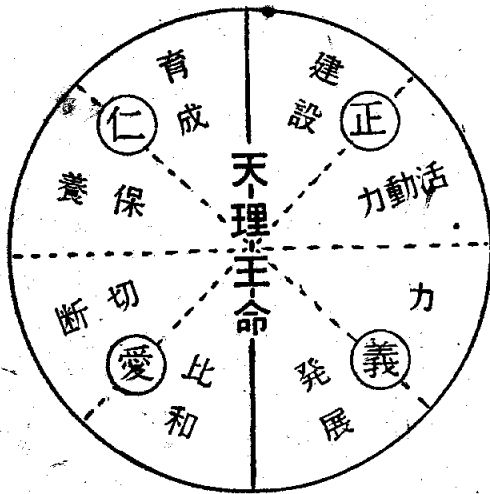
と記されてゐるのは、天文学上の名称も暦日上の名称も亦神の徳を讚美する爲めに付けられてゐたものである事を示すと共に、異教も亦神の御旨によつて現はした事を意味する。又、おもたりの命は宿し込みの時「ひく理」をもつて日様と言ひ、頭十二あり。一つにて一ヶ月宛御守護下さる理にて、一ケ年を十二ヶ月と定め給ひ、又一日を十二刻に刻み、十二時と定め御守護下さるなり。十二支と云ふも同じ理なり。と記されてゐるのも亦同じである。

要するに凡ての名称は皆人間を始めた事を象つて名付け給ふたものにして、人間はそれをそのまゝ用ひてゐるのである。此の事は文明の起源を承し、それは神の攝理を根底として文化を創造し得るものなる事を示すものである。而して、

今此処に現れてゐる天理王命と云ふは、此の世界最初の十柱の神、人間を拵へ世界を拵へた元の十柱の神を奉称する御名なり。世界も人間もなき時に道具に使ふた此のものを神と

天理王命と
十柱の神と
の關係

しておいたる、是まで言ふた事なし、教へた事なし、と示されてゐる如く、天理王命の神徳を十ヶの方面から讃へ奉つて十柱の神と奉称する。十はものの円満を現し、天理王命の人格の円満なることを現すものである、即ち神の完全なる智と、完全なる美と、完全なる愛とを現されしもの即ち十柱の神である。無限の智と無限の美と、無限の愛とを十柱の神の御名に於て示されたのである。



を建設、活動力、力、発展の四方面に於て示し、愛

の内容を育成、比和、保養、切断の四方面に於て之を示し給ふてゐる。而かも正義は愛を伴ひ、

愛は正義を伴ふ。教祖は斯くの如き人格を具
有し給ふ。即ち十柱の神は天理王命の人格的
分裂にまします。今之を図示すれば上図の如
くである。

之を要するに十柱の神は天理王命の人格的分裂
にまします、其の関係は因果的であり、性質に於
て連鎖的である。而して月日両神は創造の中心とな

り給ひし神にして、天理王命の人格の中心の神にまします。故に天理王命と月日とは一体にまします。而して他の八柱の神は、天理王命の人格の内容を示すものである。泥海古記は之を十柱の神に於て示してゐる。

三、十柱の神

前段に詳述する如く十柱の神は天理王命の人格的分裂にまします。泥海古記は更に之を次の如く詳述してゐるのである。

くにとこた
ちの命

くにとこたちの命は天にては月様なり。御姿は頭一つ尾一筋の大龍にして男神なり。此の世界の國床を見定め給ふ理を以つて「くにとこたちの命」と云ひ、又の名を「くにみさだめの命」とも云ひ、人間身の内にては目胸うるほひの御守護、身の内の水氣は此の神の守護にして、目は此の神の守護なり。即ち此の世界何によらず先に水の守護下さる故万物出来るなり。水は此の世界一の神なり

即ち「くにとこたちの命」は人間の住居する所を見定め給ふ神にましますから「くにとこたちの命」とも又「くにさだめの命」とも申上げる。

凡そ天文界に於て我々人間に最も關係の深いものは月と日とである。古代に太陰暦を用ひたのも、要するに月が人間生活に關係が深いからであり、現在太陽暦が用ひられるのも同じ

理由による。

潮汐が人間生活に及ぼす影響の如何に大なるかは衆人の等しく知る所である。即ち生死と潮汐の関係、出血の潮汐の關係の如何に大なるかは、周知の一例である。而かも潮汐作用は月と日との引力關係によつて起る現象である事を知る時、月日の人間生活に及ぼす影響の大なる事は今更言ふ迄もない。故にくにとこたちの命、おもたりの命の二柱の神を月日を以て表象せられたのは、此の両神の神徳の如何に偉大なるかを象徴するものと言はなければならぬ。

「月はおぼろ」と古の佳人は朧月を激賞したが、月の四季は我々を美の世界に遊ばしめる。春の月は我々にゆとりを與へ、夏の月は我々に安らかさを與へ、秋の月は我々に清らかさを與へ、冬の月は我々に嚴肅さを與へる。実に月の世界は我々の息ひの世界、安靜の世界、反省の世界である。月の美は何ものにも代へ難い。月の光によつてすべては清められる。人は古から月を友として之に詩情を訴へ、其の心を月に托すを常とした。「月みれば千々にもこの悲しけれ」我々の詩情を豊かにするものは月である。若し夫れ月に澄む自然界を眺めんか、我々の詩情はますますたまらなくさせられる。その靜かなる美、如何なるものをも反省させずにはゑかない月、実に月は我々の心の友である。斯くて月のもつ徳は、正義であると云はなければならぬ。すべてを正義に訴へて反省し、正義に訴へて解決してこそ人は誤り

なく道を歩む事が出来る。月は正義の藝術化されたものである。斯くて神の創造は藝術的であり宗教的である。

白日の下に照らされては醜き骸も、一度月の光に溶する時は藝術化されて美しくなる。白日の下にあつては蠢動すら許されぬ魑魅魍魎も、月の世界に於ては藝術的に跳梁する。斯くて月の世界は一面に於て恐ろしき世界となる。正義の世界に斯くの如きものの存在し得るは、実に其の裏面に愛を含むが故である。即ち愛を含む正義こそ眞の正義でなければならぬ。

くにとこたちの命の御姿は一頭一尾の大龍なりとは、正義の嚴肅性を示すものである。龍が実在すると否との鑿穿は科学者に一任するとして、古来龍は王と結びつけて考へられ、男性を表徴する。即ちくにとこたちの命は十柱の神の首座にます神、天理王命の神徳の第一なる事を示し、一頭一尾は終始易る事なきを意味し、これは嚴肅の意を象徴するものである。即ち誰しも犯す事を得ざる嚴肅なるものを示すものである。誰しも犯す事を得ざる嚴肅なるものとは正義でなければならぬ。即ち男性の徳の理想はくにとこたちの命の品性である。此の故に男子は義に勇むのである。即ち教祖が「龍王とは理の王である」と示された所以である。

而かも月日は一体なるが故に、くにとこたちの命の性徳の裏に含まるゝものはおもたりの命の性徳である、おもたりの命の性徳は次に示す如く「愛」である。故に正義の裏に必ず愛

あり、愛を伴ふ正義こそ眞の正義である。くにとこたちの命は完全なる正義の徳を具有し給ふ。斯くてくにとこたちの命の性徳は、世界に於ては水の守護として現れ、人体においては目胸濕ひの守護として現れる。

凡そ水なるものは冷めたきものである。而かもそれは清き冷めたきもの程人に喜ばれる。此の事は正義は嚴肅であり、近より難きものである事を示すものである。彼の人は水の様だと云へば、冷めたい人を指す。此の場合の冷めたきは義理人情を知らざる人を意味する。然し此の神の性徳は愛を含む正義である事を思へば、嚴肅なる正義により、秩序と法則とを維持せらるゝ事を思ふ事が出来る。即ち此の神の守護が水となつて現れる所以である。

水は靜かなる様に譬へられる。如何なる大事大變が勃発するとも動じざる不撓不屈の偉丈夫、大腹の偉丈夫は水によつて譬へられる。蓋し此の神は如何なる大腹の偉丈夫と雖も尙及ばざる大度量をもつて正義を行ひ給ふ。

水は如何なるものも正しく映して止まぬ。而かもそれは鏡の如き冷めたき映像に非ずして美しくも亦豊かなる映像である。古来山水が如何に人心を和やかにし、如何に人心を喜ばしめたかは此処に詳述するの必要を認めない。そののみならず。水に映る我が影をみて自分の心を反省せぬものありやと考ふる時、正義は人に反省を促し、人生を美化するものなる事を示すものである。

水は総べてを洗ひ清める。教祖も「みづとかみとはおなじこと、こゝろのよごれをあらいきる」と示されてゐる。即ち正義の一度顯るゝや、邪惡は遂に影をひそむるに至る。人間にして正義を維持せんか、其の人は清らかな人として世に仰がるゝは故なしとせぬ。此の事は正義の内容は建設なることを意味するものである。

「雨だれ石をも穿つ」水の力の偉大なる。蓋し吾人の想像の外に存する。水の力によつて泰山も崩れ、地形爲めに變化す。即ち正義の偉大なるは想像に絶する。此の事は即ち正義の内容は力なる事を意味する。

水は方田の器に従ふ。而かも水の性質は易らぬ。そのみならず熱しては蒸氣となり雨となり風となり、凍つては氷ともなる。斯くの如きは正義の機動性を意味し、それは正義の内容は活動力（集中せる力）なる事を意味する。

水は総べてのものを養ふ。即ち山川草木はもとより、人間にして水なくば一刻も生活をつづける事は出来ぬ。即ち正義の内容は發展なる事を意味する。

水は常に低さに流れ、深き程美しき水の湧出する事を思へば、正義は常に深く存し、濫りに表に現れず、而かもそれで常に常に正義が維持されてゐる事を示すものであり、濫りに発動する時は、正義が其の價値を失ふものなる事を示すものである。

凡そ目ほど我々に大切なるものはない。「画竜点睛」と言はるゝ程、目は我々を活殺する

の力をもつ。目の清濁によりて其の人の性質を窺ふ事が出来、目の美しき女は傾城の美人と言はれる。或る時は目は口程ものを言ふこともある。それは目は心の窓であるからである。

目は総べてを正しく映す。我等が善に感じ、美に感じ、眞理をみる事が出来るのは、正しくものをみる事が出来るからである。

我々が心眼を開く時は神の力の愈々益々偉大なるに驚倒し、善悪正邪を判断して人としての行くべき道を判然と知る事が出来る。

要するに目はくにとこたちの命の御性徳たる正義の顯れしもので、目の働きは水と何等異なる所はない。

此の神は正義の徳を有し給ふが故に、人間の悪氣をなほさんとして異教を弘め、人間に神恩に報ずる道を教へ給ふたのである。

之を要するに「くにとこたちの命」は正義をもつて総べてを愛護し給ひ、發展、建設、活動力、力を以て正義の内容とする。

おもたりの命は天にては日輪なり。此の神は女神にして姿は十二頭三尾の大蛇にして、人間宿し込み給ひて彼は日々身が重くなる故に、此の理をもつて「おもたりの命」と言ふ。

又尾に三つの劔ある故に、此の理をもつて悪氣な女を邪劔と言ふ。人間身の内にては温みの守護、温みは皆此神の借物なり。

おもたりの命

と記されてゐるが、人間宿し込みの後は、日々身がおもくなる故に「おもたりの命」と云ふ。古来太陽は人間崇拜の的となつてをり、愛と光とは太陽によつて表象せられてゐる。太陽は我々に活動力を與へる。即ち森羅万象は太陽の光によつて活力を與へられ、憇ひの世界から活動の世界へ、靜の世界から動の世界へ、消極から積極へ、それは何ものをも焼きつくさなければおかぬ強烈な活動力を與へる。総べては太陽の光に蘇り、前途に洋々たる希望を與へられる。斯くて太陽は希望と愛とを表象する。即ち太陽のもつ徳は愛でなければならぬ。愛の存する所必ず希望あり。見よ鷄鳴曉をつげて旭日東天に紅する時の希望にみちみてる宇宙を。それは希望そのものでなければならぬ。従つて太陽西山に没するは希望を失ふに譬へられる。

太陽の輝く所、邪惡遂に姿を没し、また隠るゝ所なからしむ。そは愛の裏に正義を含むが故に他ならない。おもたりの命の御姿は十二頭尾に三つの劔ある大蛇なりとは、此の意義を象徴するものである。

古来蛇は竜の属として考へられてゐる。故におもたりの命はくにとこたちの命の次に位する神なる事を意味する。十二の頭は調和させる、従つて行く、即ち和の精神を意味し、三尾は、うむ、育てる、つなぐの婦徳を意味し、三尾に三劔ありとは、此の三つの婦徳を正しく行使すべきを示すものである。而して第一の婦徳は「慎しみ」にある。故に慎しみを忘れた

女一惡氣なる女は邪劍な女と言はれる。

凡そ蛇は熱烈なる愛を象徴し、それは女性を意味し、劍は正義を象徴する。故に何ものをも灼き盡さずにはおかぬ熱烈なる愛、而かもそれは正義に基づく熱愛にして、之こそ眞の愛であり、女性は眞の愛を本体とし、鋭敏なる頭腦と、婦徳とを供へなければならぬ事を示すものである。即ち女性の徳の理想はおもたりの命の品性である。斯くて愛はすべてのものを育む温床にして、「大蛇とは台ちや」と教祖が示された所以である。此の故におもたりの命の性徳は、世界に於ては火の御守護、人体に於てはぬくみの守護として顯れる。

火は磨擦によりて起る。太古の原人は木と木の磨擦によりて発する火を発見して之を利用するに至り、之が文化の源泉となつたと言はれる。太陽の熱も地熱も森羅万象を育てゝやまぬ。斯くて火はものを育てる徳を有するものである。即ち愛により総べてのものは育成せられる。母の偉大なる愛によりて子の育つ事を思へば、育成は愛の内容でなければならぬ。

愛はすべてを和らげる。愛人の優しき愛によりてこそ人生行路の疲れも亦医せられる。即ち中和は愛の内容である。

火は如何なるものも焼きつくす灼熱的愛によりてこそ、如何なる悪人をも善人に立ち返らしむる事が出来る。即ち保養は愛の内容である。

火は如何なるものも灰燼に帰せしめる。愛の最高潮と嫉妬とは紙一重である。即ち情に流

れし灼熱的愛は火と燃えて、やがて総べてを無に帰せしむる。即ち切断は愛の内容である。此の神の愛は人体に顯れて「ぬくみの守護」となる。あの人は温い人だと言へば愛の豊かな人を指す。人は宜しく温き人とならなければならぬ。

要するに此の神は愛をもつてすべてを愛護し給ひ、育成・保養・比和・切断を以て愛の内容とする。

之を要するに月日二柱の神の愛護によりて万物は生成化育し、月日二柱の神が人体に入り込み給ふて愛護せらるゝが故に、人体の自由が叶ふのである。さればこれを、

此の世界に神と云ふて所々にあれども、月日より御働き遊ばされ、守護し給ふことを詳に知りたるものはなし。右兩人の神は此の世の人間の實の親なり。又人間には此の世を御照しの如く入り込み給ふて守護下さる故に自由自在が叶ふものにして、あとなる神は皆月日の仰せによりて御働きある事詳に知りたるものはなし。是迄書物にない事を皆取次へ教へ給ふ事なり。

と記してある。即ち十柱の神と云ふも、要は月日二柱の神に帰する。陰と陽、月と日、男と女、総べて之月日二柱の神の神徳の顯れしものにして、あとの八柱の神は月日二柱の神の仰せによりて働き給ふのであり。故に月日二柱の神は人間の親にまします。

月神は父神に在し、日神は母神に在します。而かも月神の裏に、必ず日神ましく、日

神の裏に必ず月神まします。即ち月日二柱の神の相抱擁し給ふ中に、森羅万象は生活してゐるのである。

月神の性徳は正義にして、日神の性徳は愛である。凡そ万有は正義によつて統一せられ、愛によつて結ばれてゐる。正義は男性を象徴し、愛は女性を象徴する。正義の故に男は強く、愛の故は女は強い。正義をみて男は身を犠牲にし、女は愛に身を投ず。されど此の二つのものは別個の存在に非ずして、正義の裏に愛存し、愛の裏に正義存す。然らば何れに重きを置くべきか。愛なき家庭は殺風景なる如く、愛なき人生は最早生くる甲斐なしとさへ言はるゝ。愛はすべてを美化し、愛の故にこそ人生は温く、萬有は潑刺として輝く。故に実生活に於ては正義よりも愛に重きがおかれる。人の死に當つて胸をうつものは母の愛である。即ち女性的美徳は愛である。愛のある故に女性は美しく、愛なき女性は最早存在の意義はない。斯くて愛は人間生活の根底になくてはならぬ存在である。而かも愛には比和の徳あり、女子は男子と中和して茲に美しき家庭が実現する。即ち日神の月神に対する中和が宇宙の完全なる美を顯し、萬有は存続するを許される。激烈なる愛にのみはしる時は、愛も又無きに如かずとや言はん。即ち水氣五分、ぬくみ五分、五分五分によりて人間は生活する事が出来る。之を要するに月日二柱の神の性徳は、天理王命の品性の中心を爲すものである。

いざなぎの命は天にては天の川を隔てゝ現れる牽牛と云ふ星なり。男神にして人間の男神

に使ふた父親なり。

と記してゐるが、此の神は男性の人祖にして人間の父親にましく、此の神の性徳は種即ち發展である。

いざなぎの命以下八柱の神は、それ／＼星によつて表象されてゐるが、星とは人間の本心（即ち良心）を天に現したものであるとの教祖の御言葉に従へば、星の名称と神徳との關係は、其の穿鑿はいらざるものの様である。故に我々は以下の八柱の神と神徳と星との關係を述べる事は暫く措く事とする。

いざなぎの命は天にては天の川を隔て、現れる織女と云ふ星なり。女神にして人間の女苗代に使ふた母親なり。

と記してゐるが、此の神は女性の人祖として、人間の母親にましく、此の神の性徳は苗代即ち育成である。

泥海古記は「ぎ・み」二柱の神の御姿を「うを・み」によつて表象してゐるが、而かも顔は人間、肌には鱗なく人間の肌であると示してゐるが、鱗がないと云ふ事は鬭争性の無き事を意味する。即ち人間の發展と育成は他動物の如く鬭争によつて發展し育成さるゝのではない。換言すれば生存競争によつて人間は進化するのではなく、柔かな肌と肌との接觸、即ち平和的に愛によつて進化するものなる事を示すものである。

凡そ愛には犠牲的精神がなければ眞の愛は行はれない。即ち種は総べて犠牲的なものであつて、新しき生命は種の中に籠り、生命の成長と共に種自身は其の姿を消滅するものであり、姿を消滅せずとも一度新しき生命の成長をみるや、其の種は最早や種としての意義を失ふのである。即ち新しき生命の爲めに総べてを捧げて惜しまぬ所に、種子の生命があり、此の犠牲によつて新しき生命はすく／＼と成長する。換言すれば種子は發展性の象徴である。教祖の教は「種の教」とも云ふがそれは教祖の教を信仰する事によつて、信するものは先づ犠牲的精神になれば、それは何より高價な代價であるが、如何に高價な代價を拂つても金錢をもつて購ふ事の出来ぬ尊い新しき生命を成長せしむる種となるのであつて、人として之より以上に生き甲斐のある生き方はない。教祖の拂はれた犠牲、いざなぎの命が拂はれた犠牲は何ものにも代へ難い高價なものであるが、それが今日の人間となり、人間が救はれる種となつたのである。要するに犠牲なくして愛は行はれない。

愛は総べてのものを育成する。即ち愛は育成の温床である。換言すれば苗代は育成の象徴である。苗代は一度下された種を完全に育成するの使命をもつ。此の事は第二章第一節に於けるいざなぎの命の御働きに明かである。苗代は善惡共に総べてのものを育てるべき使命を有するが故に、苗代は種の撰択をなさぬ。即ち如何によき苗代であつても、種が悪ければ苗代の存在價值がない。故に種の撰択は慎重を期さなければならぬ。教祖の教は其の種の撰択

を教へ、之を完全に育成する道を教へてゐる。即ち人間の種苗代となられた「ぎ・み」二神の心は「眞直で正直」であつた。種苗代共に良心的―善人であつたのであつて、種苗代共に申分がない。然るに埃に塗れて人間はその本性を暗まされてゐる爲めに、育成の徳をもつていざなみの命が、之を眞の神の子として育成すべく現れ給ふたのである。即ち育成の徳は飽迄もすべてのものを育成せすんば止まない。人間は此の發展と育成の徳によつて今日あるを得るのである。此の故に人たるものは神の子として眞面目を發揮すべきは言ふを俟たない。

之を要するに「ぎ様」の種即ち發展の徳と、「み様」の苗代即ち育成の徳とによつて今日の人間が存在するのである。

くにさづちいの命は天にては源助星なり。女神にして御姿は龜なり。龜と云ふものは、土色なるもの故に「くにさづちいの命」といふ神名を授け給へり。此の神は女の一の道具に仕込み給ひし故に、龜の甲の理をもつて女を「めこ」と云ふ。此の神は人間の皮つなぎの守護、縁結びの神にして、此の世界何事によらず継ぎものの類は残らず此の神の世話どりにて、萬づつなぎものは此の神の守護なり。

と記されてゐるが、此の神は女神に在し、人間創造の際龜を女の一の道具として用ひられたとは、龜をつなぐ道具として用ひられた事を意味する。即ち女の一の道具は子を産み、人間の子孫をつなぐ事の爲めに造られたものである。斯くてくにさづちいの命の神徳は比和

にして、比和なるが故によくものともをつなぐ事が出来るのである。

古耒龜は四靈の一として貴ばれてゐるが、龜甲は龜卜に供せられ、又太古に於てはたから（貨）とせられた。即ち龜はつなぐ道具として太古より用ひられてゐるのである。従つて此の神の性徳によつて、人間の皮つなぎ、縁結び、交際、交通機関、貨幣等其の他何によらずつなぐ事、つなぐ用に供せらるゝものは総べて此の神の徳によつて與へられるものである。即ち此の神は比和の徳をもつてすべてを愛護し給ふ。

すべて建設はつなぐ事によりて成される。故に建設と比和とは離す事の出表ぬ関係にあるのである。

命
つきよみの

つきよみの命は天にては破軍星と云ふ星に現れ、男神なり。此の神は男一の道具に仕込みたる神にして、此の神の御姿たる「しやち」と言ふ魚は勢強きものなる故に、此の理を以て男一の道具を「せいの子」と云ふ。男と云ふものは宿し込みの時上よりつくが故に、此の理をもつて「つきよみの命」と名付け給へり。人間身の内では骨の守護、人間の骨は皆此の神の借物なり。

と記されてゐるが、此の神の徳は建設の徳にして、建設の徳をもつて男一の道具とし給ふたのである。即ち子を宿し込むとは、新しき生命の創造である。されど宿し込みなるものは男女相寄りて成し得るのであつて、一方的に之を爲す事は出来ない。即ち比和の徳と建設の

くもよみの
命

徳とは両々相俟つて始めて意義を有するのであつて、何れの一を以つてしても十分なる効果は期し難い、此の事は月日二柱の神の關係と一般である。

建設とは「おこしたつ」の義である。従つて此の神の徳が人体に現れて骨となり、世界に現れては草木家等自立するものとなる。即ち此の神は建設の徳をもつてすべてを愛護し給ふくもよみの命は女神にして天にては明けの明星なり。此の神の御姿は鰻にして、鰻と云ふものは頭からでも尾の方からでも出入し、つるづくものなる故に飲み食ひ出入りの守護とし給へり。

と記してゐるが、鰻は保養を象徴する。即ち此の神の性徳は保養にして、生物は其の生命を持續するが爲めには保養を要する。保養なくして生命の持續は困難である。人間が今日生活を続ける事が出来るのは、此の神の徳によつて食物をとる事が出来るからである。衣食住の内食物は人間の最も楽しみとする所であるが、食物が美味しく頂けるのは此の神の徳なるが故に、食事に當つて神に感謝を捧げる事を忘れてはならない事は言ふまでもなく、礼儀正しく頂かなければならない。

かしこねへの
命

かしこねへの命は男神にして、天にては坤の方に數ある星なり。御姿は鰻と云ふ魚にして、人間の息、風の道具に使ふた神なり。人間の息は此の神の借物なり。此の世界火と水とは一の神、風よりほかに神はない。息は風なり、風は神なり、如何なる悪しきも吹き拂ふな

と記されてゐるが、鏢は活動力を象徴する。即ち此の神の性徳は活動力にして、此の徳をもつて何によらず愛護し給ふのである。

陰と陽、火と水とによつて風起る。即ち風は神の活動性を表象するものにして、之によつて総べてのものを生ずる。一度神が活動し給へば、邪惡も遂に滅却する。即ち神には罪惡がない。故に神によつて人間は救はれるのである。

凡そ人間にして呼吸する事を忘れたものはない。呼吸してゐると云ふ事は生きてゐると云ふ事であり、それは此の神の守護である。而かも呼吸は人間の活動力の源泉なるが故に、我は寢た間も神に感謝する事を忘れてはならない。然るに人間は神に仕へる事を忘れたり、甚だしきは之を嫌つたりするが、一度呼吸を忘れてみたならばこんな事が出来ぬ事がわかる筈である。

をふとのべへの命

をふとのべへの命は天にては宵の明星なり、男神にして御姿は黒くつな。此のものは人間のじきもつ、立毛を地より引出しの守護、其の他何によらず引出すものゝ道具に使ふた神なり。又引出すには苦勞がある。今にてもよふするものを「くると」と云ふは、此の理にて名付け給ふなり。第一は百姓のつくり神なり。

と記してゐるが、黒くつなは力を象徴する。即ち此の神の性徳は力にして、此の徳をもつて

たいしよく
天の命

何によらず愛護し給ふが、特に百姓のつくり神にまします。

凡ての人間の職業は皆神の守護によつて與へられるのであるが、就中百姓は其の農作物が豊作となるのも不作となるのも皆すべて神の守護である事を誰よりもよく知つてゐる筈である。即ち農作物は此の神の守護である。従つて人間は食物に不足を言ひ、食物を粗末にするといふ事は、此の神の御恵みを粗末にする事である事を思ひ、感謝を捧げなければならぬ。

たいしよく天の命は女神にして、御姿はふぐと云ふ魚なり。此の魚は食すればよくあたる魚にして、人間も大食すれば壽命を失ふ。此の理をもつてたいしよく天と名付け給へり。

人間の生るゝも親と子との胎縁をきる故に生るゝなり。又死亡の時に縁を切る道具に使ふたもの、又此の世の縁を切る缺にて、萬づ切る神、良鬼門の神なり。

と記されてゐる。ふぐは切断を象徴する。即ち此の神の性徳は切断にして、此の徳をもつてすべてを愛護し給ふ。

凡そ人間の「お産」は此の神の守護にして、人間が生れる時は、此の神が先づ親子の内縁を切り、をふとのべへの命が引出し、くにさづちいの命があとをもとく通りにせられるのである。又人間が死ぬ時に此の世との縁をお切り下さるのも此の神の守護にして、生死の神である。

以上述べて来た十柱の神の御徳によつて人間は生活してゐるのであり、人間は神の子とし

て限りなき御恵みに浴してゐるのである。之を、

人間は皆神の子なり、身の内は皆神の貨物にて、人間を守護下さる神は、此の世を夜御照し下さる神は「くにとこたちの命」晝は「おもたりの命」此の二柱の神は最初の親神、元の神なり。後の八柱の神は人間を拵へるに付き道具雛形に使ふた因縁によりて、右三柱の神より道具主に神名を授け給ひしなり。即ち此の十柱の神は世界の元の神なり。此の外に神と云ふては更になし、と御聞かせ下さるなり。

と記されてゐる。即ち人間は如何なるものであつても皆神の子にして、人間の肉体は言ふに及ばず、総べてのものは皆神の貨物で、人間から言へば借物である。故に之を大切に使ふべきは言ふを俟たない。而して之等の総べてのものを愛護し給ふのは月日両神にましまし、夜はくにとこたちの命、晝はおもたりの命の愛護し給ふ所であり。此の両神は人間を創造し給ふた親神にまします。其の他の八柱の神は、人間創造の際用ひた道具雛形に、月日二柱の神より神名を授け給ふたのである。故に我々は此の十柱の神を拜し、其の恩寵に答へ奉らなければならぬ。

第二章 人間

一、人間の歴史的過程

前章に於て示す如く、人間は地場に於て宿されたのであるが、扱て人間は其の後如何なる歴史的過程を辿つたのであらうか。

月日様より「ぎ・み」兩人の神を人間の種苗代とし、天地を象りて夫婦を教へ、甘露台の地場にて九億九万九千九百九十九人の人数を、なむくくと二人づゝ三日三夜に宿し込み、三年三月とゞまりゐて、それより今の奈良初瀬七里四方の間へ七日かゝりてうみおろし、残る大和國中へ四日かゝり、是で十一日を「産明け」と言ふ。山城伊賀河内此の三ヶ國へ十九日、残る日本國中へ四十五日かゝりてうみおろし、都合七十五日かゝりし故に七十五日の間を「産屋中」と云ふなり。産みおろしおく地場は今の宮地となる。いざなぎの命はいざなみの命と共にうみおろしに廻り、子供にいきを吹きかけ給ひ、うみおろしのすむと共に死亡し給ひぬ。

と記されてゐる如く、受生した人間は母親の胎内に三年三月の間とゞまり、それから日本國中のうみおろしに廻られたのである。即ち今の奈良初瀬七里四方の間へ七日間、残る大和國中へ四日間かゝり、都合十一日で大和國中へ産み下された。其処で十一日を「産明け」と云ふ。次に山城伊賀河内の四ヶ國へ十九日、残る日本國中へ四十五日、都合七十五日間かゝつて日本國中へ産み下された。故に七十五日間を「産屋中」と云ふ。此の時産み下された所は今の産土神である。いざなぎの命はいざなみの命と共に産み下しに廻られ、生れた子に息を

人格の發展

吹きかけて廻られたが、其の苦勞の爲にいざなぎの命は遂に姿を隠し給ふた。此の事は人間に靈を與へ、働き(養ひ)をつけ給ひし事を意味する。

人間は五分から生れて五分／＼と成人し、九十九年に三寸迄成長して皆死亡す。一度教へられた守護により再度母親の胎内へ宿り込み、十月目より以前の所々へうみおろしに廻り給ふ。此の地は今の墓所となれり。此の人間も五分から生れて五分／＼として成人し、九十九年目に三寸五分まで成長して皆死亡す。又、前の如くにして同じ胎内へ三度宿り込み、十月目より諸所へうみおろしに廻り給ふ。此の地は今の詣り所となれり。此の人間も五分から生れて九十九年目に四寸まで成長す。之をみて母親は茲まで成長すれば、月日の仰せの通り五尺の人間になるに相違なしと、喜んでにつこり笑ふて死亡し、人間も亦親のあとを慕ふて皆死亡せり。

と記してゐるが、之を三度の更生と云ふ。三度の更生は人格の發展せし事を意味するものである。即ち五分、三寸、三寸五分、四寸等は其の程度を示し、五分五分として成人する、即ち發展性によつて智徳が發展して行つたのである。然らば其の發展性は何処より来りしか、即ち人祖に與へられたものが遺傳したものである。而かもいざなぎの命が先に死亡せられたとは、發展性の遺傳により、男性の人祖の存在が不要となり、独り女性の人祖が残り、其の徳性によつて専ら育成に任せられた事を意味する。斯くて此処に男女の天職使命を判然と示

日本書紀、
音と羽ま中に
理、と空釋り、
關係が、あり。

人格内容の
拡充

されたのである。

九十九日目に皆死んだとは、或る時期に達した時に、人格の進展即ち智徳の發達が停止せし事を意味し、いざなみの命が一度教へられた守護即ち育成の徳によつて之を打開し、生れ出した即ち智徳向上の道をつけ給ふたのである。宮、墓、詣り所等は人間の納まるべき所を意味し、五尺とは人間の人格發展の標準を示すものである。

母親がはつこり笑ふた理と、死亡された理とを以て、人間の生るゝ穴も二寸に四寸、死に行く穴も二尺に四尺と、皆二四の理をとるなり。

と記してゐるのは、母親が満足して姿をお隠しになつた理を以つて、人間の生るゝ穴、死にゆく穴も共に二四の理をとるのであると示されたのであつて、之は満足の意味を表し、満足を以つて終始する事が人間生活に必要な事を意味するものである。

夫れより又鳥類著類蟲類異形のものに八千八度生れ變りたり、故に今日の人間は何もの眞似でも出未るなり。

と記してゐるが、之を八千八度の更生と云ふ。八千八度の更生は轉生であるが、それは人格内容の擴充を意味し、特に智慧の發達せし事を意味する。鳥、蟲、蕃等は智慧の發達の程度を示すものにして、普通進化論と其の趣を異にする。眞似とは神の眞似即ち文化創造の能力を意味する。

斯くて徳に比して智がより發達し未つた。之を、

八千八度の生れ變りの濟みし時皆死亡し、其の中に猿（女猿也）一人残る。是即ち「く」さづちいの命」なり。此の胎内より男女五人宛十人づゝうみ出し給ふ。

と記してゐる。猿は智慧を象徴し、女猿とは男より女の方がより智慧の發達せし事を意味する。即ち今日に於ても一應の智慧は男が勝り、再出の智慧は女が優る。然し「女さかしうして牛をうりそこなふ」の諺の如く。余りに智慧に走りすぎる時は迷ひを未たす。之を子供の數に於て示す。迷ひとは自由意志の濫用と誤用とにして、之罪惡の起源を示すものである。此の時生れた人間も五分から生れたと。

此の人間も五分から生れて五分／＼と成長し、八寸迄成長せし時泥水に高低が生じ始め、一尺八寸迄成長してより親が子となり子が親となりともとの人數うみそろひ、水土分りかけ、それより男一人女一人と二人づゝ生れ、三尺まで成長せし時ものを言ひかけ、天地海山分りかけしなり。夫で今の人間も三歳でものを言ひかくなるなり。又五尺になるまでに人間の成人に應じて天地海山水土すきやかに分り、人間も五尺になりて男か女か一人宛生るゝ事となれり。

と記してゐる。此の人間も五分から生れてとは、徳の發達は智の發達に伴はなかつたが、人間は其の元の性質即ち神に似た性質―神性を失はざりしことを意味する。八寸、一尺八寸、

人類の分布
人種の起源

三尺等は徳の程度を示し、人間の成長に應じて天地が開闢したとは、人間の人格の向上に連れて天地の開闢せし事を示し、人間の人格が一定の標準に到達した事を五尺になつたと示してゐる。

三尺になつた時に言葉を語り始めたとは、文化創造の能力が発達して、愈々文化を創造し得るに到つた事を示し、親が子となり子が親となるとは靈魂の分派支流せし事を示し、八寸一尺八寸、三尺と成長するに連れて生れる子供が減少し、五尺になつて一人宛生れる事となつたとは、人間の人格の發展に連れて埃をはらふ事が出来る事となつた事を意味し、次第に智徳が併進し始めし事を意味する。

人間が五尺になりたる時、九億九万九千九百九十九人の人数の内、大和國にうみおろしたる人間は日本の地に上り、他の國にうみおろしたる人間は食を求めて唐や天竺の地に上り行きたるなり。

と記されてゐるのは、人格が一定標準に到達した時に、地球全体に人間が分布し茲に人種が発生した事を意味する。斯くて日本は根の國にして、外國は枝先の國である。即ち文化の根は日本に存し、其の余光は外國に輝くのである。

此の年限も九億九万年は水中の住居、地に上りてより天保九年十月廿六日まで九千九百九十九年なり、内六千年は智慧の仕込み、三千九百九十九年は（外國へは六千年）文字の仕

文化の創造

込み、人間のする事は皆神が入り込み何事も教へ来るなり。

此の事は誰も知るまい。其の筈や人間拵へ、人間に神が入込んでゐれども口を借りて教へし事なし。今始めての事故之を實に承知するものなし。此の事を嘘と思へば嘘となる。神の云ふことをきゝわけるなら、薬飲まずとも話一條で皆助かるは嘘でなき証拠なり。

と記されてゐる。即ち九億九万年は水中の住居、水は神を意味し、神と共に暮す生活即ち靈的生活―罪惡なき生活を爲したのであるが、五尺になりて人体が完備し人格をもつて地上生活を爲す事となり。日本を中心として全世界に人類が分布したのである。

地上生活を爲す事となつてから六千年は智慧の仕込み―智慧の訓練を行ひ給ふ。之は知識の訓練の準備にして文化の曙光時代が到来したのである。それから天保九年十月二十六日即ち教祖が神の実現と爲り給ふた時までの三千九百九十九年は文字の仕込み―知識の訓練を行ひ給ふ。此の事は学問の發達を意味し、それは徳育の準備にして、茲に文化時代が到来したのである。神は人間に最後の仕込みを行ひ給はんとして、理想の人教祖を世界に下し給ひ、教祖の人格によつて人間の徳性を陶冶し給ふ事とせられたのであつて、現在は其の道程である。

以上述べて来た事は是迄に一度も教へた事はない。神は日々人間を愛護し給ふてゐるが、口をかりて教へた事はない。即ち神が啓示を垂れて教へた事なく、今度始めて啓示したので

あるから、誰も之を事実と信するものはない。之を嘘と思へば嘘になるし救はれない、然し教祖の教を信する者は、医薬に依らずして神癒によつて病が助かるのは、教祖の示す所が事実なる事を実証する。即ち教祖の教を信する者は救はれる。此の事は教祖の教は唯一の教なる事を意味する。

二、人間

上述する所によつて明かなる如く、人間は神の子にして神によつて生かされてゐるのであるから、人間は皆兄弟にして他人と云ふものは更にない。之を、

此の世界といふは月日兩人の身体なり、天地抱き合せの世界、人間は月日の懐住居をしてゐるものなり。それ故に人間にする事は皆月日の知らぬ事なし、人間は皆神の子なり。身の内は皆神の借物なる故に、他人と言ふは更になし、皆兄弟なり。此のもとを知りたるものなし。

と記されてゐる。即ち宇宙は月日兩人の身体―神の愛によつて満たされてゐる。宇宙は天地抱き合せの世界―神の愛の世界であり、人間は月日の懐住居―神の深き愛によつて生かされてゐるのである。それ故に人間にする事は皆月日の知らぬ事なし―神は全智全能である。斯くの如く人間は神の愛の中に生活してゐるものにして、神の可愛い子供である。故に他人と

原罪

云ふものは更になく、人間は悉く兄弟である——四海同胞である。

然しながら何故四海同胞なるか、何故に人間は兄弟なるかを知る者なく、又之を自覚する者はない。即ち神と人とは親子の關係にある事を自覚し、其の自覚に立つて人間は神の子なりの信條に基づいて生活する者のない事は、神は非常に遺憾とし給ふ所である。故に之を自覚せしめ、其の信條に基づく生活を爲さしむるが爲めに、神は身上事情を與へ給ふ。それは此の自覺と、此の信條とが確立されざる時は、人生の本分が全ふされざるのみならず、人間の心身の平和、世界の平和は破られるものなる事を意味する。

人間は神の子であり、神の愛の中に生かされてゐる事を知る時は、神の心に叶ふ生活となつて現れずにはをらぬ。神の心に叶ふ生活とは、教祖が「神の心は親心、親の心はたすけたい心ばかり」と繰り返し示されてゐる如く、親が可愛い子供の爲めに日夜心を碎くより以上の愛をもつて、人間を助けたいとの心をもつて人間に臨み給ふてゐる。故に神の此の至聖性を目指して進む生活こそ、神の御心に叶ふ生活であり、人生の本分も亦此処に存する、されば人を助ける爲めには我が身どうなつても精神——聖き愛、美しき愛をもつて生活する聖き生活、美しき生活即ち助け一條の生活こそ、眞の人間生活である。然しながら之を自覚せぬ時は、我さへよくば人はどうなつてもかまはんと云ふ利己主義に陥り、身心の平和は破られる。抑々人間は聖き生活、美しき生活を爲さんとする要求に燃えてゐるにも拘らず、此の生活

はなかく實現せぬ。それは「我さへよくば人はどうなつてもかまはん」と云ふ精神があるからである。此の精神は我々が造つたものではなく、遺傳的に有するものである。即ち自由意志が生存慾を濫用するによつて生ずるものであり、それは遺傳的のものである。故に之を原罪と言ふ。学的に之を言へば、良心に反する思想と行爲である。我々が物心の何れの方面からでも人を助ける時は無関心の快美感に浸る事が出来るのは、良心の命する所に従ふ事が出来るからである。將に自殺せんとする者を見る時、我々が無意識に之を救はんとするのは、良心の命する所である。それは人の性は善し神の子なるが故である。無意識の善の生活が、眞の人間の生活であり、それは教祖の生活である。故に神は之に反する生活―我が身さへよければ、人はどうなつてもかまはんと云ふ精神から人を救はんとして、身上事情を與へ給ふ。

又我々は之は善なりと信じて行つてゐるにも拘らず、其の方法を誤つた爲め、結果に於て惡となる事がある。それは過にして、過は自由意志の誤用によつて起る。之を身の内の埃と云ふ。即ち埃とは生存慾の誤用である。要するに自由意志によつて本前を誤用するが故に埃となる。埃は過にして、之は自らが犯せる罪、即ち自罪である。自罪なるが故に懺悔する事が出来る。懺悔する事によつて人格を向上し美化する事が出来る。

凡そ自由の存する所に責任存し、責任の存する所に自由が存する、されば自由意志の濫用

神
の
道

魂花は五五に
自由を
知る。

此四節は

誤或は内

誤或は内

あるの外は

身々の外は

者へてな

直はそれの心

存する(目録)

れば誤

誤或は内

身々の外は

誤或は内

又は誤用の責任は、我々人間にある。即ち犯罪の責任は神にあるに非ずして我々人間にある。故に我々は罪と過に對して飽迄も責任を負はねばならぬ、而して自由意志の誤用と言ふも濫用と言ふも、それは生存慾即ち**誘惑**に打ち負かされたからであり、其の責任は人間にある。之をそのままにする時は人間は其の本性を失ふにより、之を救はんが爲めに神は身上事情を與へ給ふ。即ち身上事情は親が涙と共に打ちふる鞭である。故に病は惡の結果ではない。病の元は心からと云ふも、此の意である。されば、

是迄人間は病と言へば医者藥、拜み祈禱と言ふたれど、人間には皆八つの心得違ひあり。それは、ほしい、をしい、かわい、にくい、うらみ、はらだち、こうまん、よくにして、それは皆身の内の埃なり。

●十五歳までの子供の惡しきは皆親の埃を子に現はして意見する事なり。又十五歳以上の者も惡しき病、不時災難も、皆其の者は勿論、第一家内中の埃積り重る故に、神より意見立腹、意見立腹と云ふも憎くさではなし、助けたいから心をなす爲に意見する、之を「病の元は心から」と云ふなり。

と記してゐる、即ち病と言へば直ちに医者藥に頼り、或は單なる拜み祈禱に頼つてゐるが、病の元は罪をはらへと神が意見してゐるのであつて、意見立腹と云ふても憎惡に非ずして愛の最高潮である。即ち病を契機として人格内容の充實を求め給ふてゐるのである。

おまゝ入と

申してあげ

おまゝ入と

おまゝ入と

然らば罪と過は如何なる経過を辿つて身上事情となるか。神は人間を愛し給ふ、其の愛は人間の親の愛に優る事数等である。故に一々之に小言や愚痴をこぼし給ふのではなく、見るに見かねて意見し給ふ。埃が積り重なるとは其の意である。而かもそれは一個人の埃に対して、其の者に意見し給ふのではなく、親の罪を子供（十五歳まで）に現し給ふ。之は子供の罪は罪ではない、子供の過は過ではない、即ち子供には罪も過もない事を意味する。教祖は子供を「小さい神」と呼ばれてゐる。何故親の罪を子供に現し給ふかと言へば、親には子供程可愛いものはない。だから子供に病の現れる時は、親が懺悔し易いのみならず、乳幼児にとつて、親は欠ぐ事の出来ぬ存在であるからである。又大人（十五歳以上）の身上事情は、本人は勿論ではあるが家内中の埃が積り重なつてゐるから、神が之を意見し給ふ。即ち神は個人のみ意見し給ふのではなく、親、家族全体に対して意見し給ふもの即ち身上事情である。而かもそれは親は子供を愛するが故に、放蕩息子を勸当する如く、神の愛の鞭に他ならない。

斯くの如く信する時は、人間は病と云ふ事を超越する事が出来る。即ち人間には病の觀念がなくなり、之を神が涙と共に打ち振ふ愛の鞭として喜んでうけさして頂く事が出来る。之を、

人間には病もなく薬もなく、病と云へば皆心からと教へ給ふ。

神の人物評
價の標準

と記してゐる。要するに病に囚はるゝ事なく、神を信じ、神の御旨に答へ奉る生活を爲す事が、何より肝要である。

上述する如く身上事情は「我さへよくば人はどうなつてもかまはん」と云ふ考へから、生存慾を濫用し、誤用するが故に、之に対して神が意見し、立腹せらるゝにより現れるものである。故に之を方向轉換―悔改し、懺悔する事が必要である。即ち「我が身どうなつても人をたすける」と云ふ精神になり、埃を懺悔する事が必要である。而かもそれは本人は勿論家族全体が其の心となる事を必要とする。之を、

此の親に助けを頼む者は、親の教の通り家内残らず十五歳より心得違ひを眞実より懺悔し、此の度は神の教の道を守り、嘘とへつらふと慾と高慢なき様にして、人を助ける心と人かへて願へば、其の心を神がうけとりて萬づ助けをする。

と記されてゐる。即ち神に救ひを願ふものは、教祖の示されてゐる通り、本人は勿論家族全部の者が残らず十五歳からこちらへ通つて未だ心得違ひを神に懺悔し、神の道―神の言葉は神の道である。神の言葉とは啓示即ち教祖である―を守り、嘘を吐かず、追従せず、即ち心から神に信頼し、慾即ち我さへよければ人はどうなつてもかまはんと云ふ心を取り去り、高慢即ち神を無視する心を取り去つて、人を助ける爲には我が身どうなつてもかまはんと云ふ精神に心を入れかへて―心の方向を轉換し、神に願―神に祈願する時は、其の心を神がうけ

とつて―其の心を容れて如何なるものも助けて下さるのである。

之を要するに神の人物評價の標準は、其の人の志向にあり、即ち人を助けると云ふ方向に志が向ふならば、神は之を救ひ給ふ。故に救ひとは「我が身さへよければ人はどうなつても」と云ふ精神が、「人を助ける爲めには我が身どうなつても」の精神に轉換出表する事を意味する。此の精神になる事が出表、日常生活が此の精神の発露となつた時こそ、その人は眞に救はれたのである。故に我々は此の生活の建設に向はなければならぬ。此の生活の建設に向つて進む時は行爲に変化を来たし、其の結果新しき品性が創造せられて、美しき人格、聖き人格が創造せられ、病は医薬によらずとも神癒によつて癒え、遂には教祖の人格が我々の人格に反映し、教祖の人格が我々の人格に再降し給ふのである。斯くて人間は神の子としての眞面目が発揮せられ、聖き人、美しき人となる事が出来る。而かもそれは人類が常に希求して止まぬ理想の人である。

第三章 神と人との關係

一、救主

前章及び前々章に示す如く、神と人とは親子の關係にある。故に神は何処迄も人間を可愛我が子として愛育し給ふ。故に時機をみて人間を救ひ給ふ。然しながら神は時機の到来す

元の神々の魂

十柱の神々の魂

間接も人々

の屋敷に引き

よふふの神聖性

しつてはな

かしく勅せ

よふふの人数

何れは

神聖

まきま

まきま

まきま

まきま

まきま

まきま

まきま

ると否とを問はず、人間の上に心を配り給ふ。之を、

此度迄は此の助けを教ゆる事出まざる故に、人間の修理服しに、世界中に拜み祈禱や易判

断、医者薬を教へたるなり。

と記してゐる。即ち今度迄神が実現し給ふ有期限一時機が到来しなかつたが爲めに、神が実

現して眞に人間を救済する事が出来なかつた。故に其の準備として、異教（拜み、祈禱、易

判断）医者薬等を教へ給ふのである。然しながら愈々時機が到来した、即ち、

人間は皆元十柱の神の魂を一々人間に生れさせおきて何事によらず教へまらし故に、人間

は皆月日の使ふ一の道具にして、是迄に人間の仕込み相済みしを以て、元の神々の魂を此

度此の屋敷へ引き寄せ生み出したるなり。

と記されてゐるが、凡そ人間は如何なるものも皆、十柱の神の魂の理をもつて生れさせてあ

るものである。即ち人間は神性を有するものであるから、神は何事によらず之に教へ給ひ、

茲に人間は文化を創造し得る事となつたのである。従つて人間は神の一の道具、即ち萬物の

靈長である。天保九年十月廿六日を以つて人間救済の準備を終へたのであるから、元の十柱

の神の魂を地場へ引き寄せて出生せしめたのである。此の事は神樂勤を創め給ふ準備である。

（後節参照）

以上述べて来た事は要するに、人間の靈は神より分派支流し、人間の人格は神より流出分

初代天皇 万葉集

神代卷 一ノノ

布し、十柱の神の魂―特徴ある品性を有してゐる事を示すものにして、それは同時に神性を有する事を示すものである。然しながら人間は罪惡により其の神聖が汚濁した爲めに、茲に人間救済の要を生じ、贖罪形式として神樂勤を創め給ふものなる事を意味するものである。上述する如く、人間は神性を有し、萬物の靈長なるが故に、人間以外のものに神は実現し給はない。之を、

人間身の内よりほかに神と云ふては更になし、神や佛と云ふて拜みしてゐれども、皆人間が紙や金や木をもつて拵へたものばかり。どうも紙や木の中へは神が入り込む事出来ぬもの、人間は皆神が入り込んで何の守護もする故に、人間にまさりた神はなきなり。

と記してゐる。即ち偶像（紙や金や木をもつて拵へた神）には神が実現する事は出来ぬ。神が実現するには神の子である人間の形をとつて顯れる外に道はない。之教祖が顯れし所以である。

以上の事は皆取次へ御聞かせ下されし御話にして、其の話といふは「みき」に人間の心なく何の覚えもなく、月日が入込んで神の御話下さるものなり。

と記されてゐるのは、教祖は神の実現にましますが故に人間の心即ち罪惡がなく、又神の実現なりとの自覚をもち給ふたものでもない。神其のままの教なのである。即ち教祖の天啓は具体的天啓である事を意味する。従つて啓示は人類救済の幸なる音信れである。されば之を

信じ、之を實行するものは神の御心に叶ひ、救はれる。

救はれる
成程、了り

月日天に現れて照すは兩人の目にして、目はあかき故に世界中は明かなり。社の赤き衣服の中に月日籠りゐる故に何事も見ゆるも、他なる衣服を着れば身が暗くして着ておる事出まらず、此の社も同じ人間にてはあれども、此の人と云ふは元親のいざなみの命の魂なる故に、何國のものでも助けたい可愛ばかりの心あるなり。此の者を雛形として月日入り込み助けを教ゆるものなるが故に、世界中の者も親里へ参り親に助けをもらをと思ひ願ふには、親の心を雛形として心を入れかへて願ふなら、助けは勿論善惡とも神より心を見わけて返しする事間違は更になしとの仰せなり。

と記されてゐるのは、教祖は神の実現にまします事を詳細に示すものである。即ち月日はくにとこたちの命・おもたりの命の目であり、之は神と人とが最も深き関係にある事を示す重要な意義を有するものである。即ち目の故に光を仰ぐことが出来るのであり、心眼を開くによつて希望の光は燦然と輝くのである。神の目と人間の目は、斯くて最も重要なものである。即ち月日より送らるゝ光によりて、人間はものを見る事が出来るのであり、神の愛によりて人間の心眼が開け、心機一轉して希望の光にみちみつるのである。教祖が心眼を開いてをられた事を赤衣をもつて表象せられた。従つて人間も亦心眼を開かなければ眞の教祖を知る事が出来ない。

教祖の性徳は人類の親にましますいざなみの命の性徳にますが故に、人類を救けたいとの愛に満たされてゐる。神は此の教祖の心を雛形として啓示し給ひ、此処に教祖は神の実現となり給ふた。即ち教祖は教主となり給ふたのである。

之を要するに教祖は神の実現にましく、教祖の肉体は神の社に外ならない。

二、祈禱の形式

我々が神に祈願するには一定の形式を要する。それは神によつて示されなければならない。本教の神樂歌も神樂勤も教祖の御手になつたものであり、其の形式に於て普通の踊りと趣を異にする。即ち普通の踊りに於ては、手と足とが反対の方向に出るが、本教の神樂勤に於ては手と足とを同じ方向に出す。而してそれは口と心と行との一致せる事を示すものである事を示し、神の「人を助ける」と云ふ心を現すものであり、人間も亦此の心になつて願ふ事を意味すると共に、**鳥の鳴物は人間の九つの道具（目、耳、鼻、口、両手、両足、男女一の道具）**が勇む事を意味する。即ち人間の心が助け一條の心に勇みたつて、神の心に和する事である。従つて之によつて人間は罪惡より赦され、祈願に神の應答があるのである。之は一般教会の神樂勤の意義であるが、甘露台を中心として行はれる本勤には尙深遠なる意義を有する。即ち、

わびし
おひし
南

一
號
40

神樂勤と教
ひの関係

此度神樂勤を教へるは是も亦今迄にない事を創めかけ。是は元十柱の神の姿を象るものにして、**神樂西人**は元親のくにとこたちの命におもたりの命なり。又男神は男の面を被り、女神は女の面を被り、勤め手振りも元の道具雛形の形を学びさせ、陽氣手踊りをするなり。此の人数十人鳴物九つ、都合十九人にて、神を勇むる陽氣勤なり。

と記されてゐる如く、神樂勤（本勤）は元十柱の神の姿を象り、人間創造の意義を現す陽氣勤―神人交樂の勤にして、之を祈禱の形式として定められたのである。故に神樂勤によつて神癒が下る、其の一例として。

肥の助けは百駄づゝ一勤にかけ、守り干かず、御札も干かすを一勤にかけて出す。勤と云ふは皆神樂勤の本勤なり。

即ち信者へ下附する御守り、肥のたすけ、御札（虫よけ札等）は皆総べて神樂勤によつて與へられる。神樂勤なくして與へられない。之神樂勤の意義を明かに示すものである。

然らば神樂勤は何故に贖罪形式であり祈禱の形式であるか、即ち何故に神樂勤によつて助かるぞと云へば、

陽氣勤して助かると云ふは、此の世界は人間の陽氣ゆさんを見ようとて人間を拵へ世界を拵へたるなり。依つて元の姿を寄せて、ともに勇むるに付き助かるもの、只今の人間は夫れを知らずして、人はどうでも我が身さへよくばよき事と思ふ心が違ふ故に、此度は月日

様がだめの助けを教へ給ふなり。其の教は惡しきをはらふて陽氣の心になりて願へば、神の心も人間の心も同じ事、人間身の内は神の貨物なる故に、人間の心が勇めば神も勇んで守護するなり。身の内の惡しきを助ける事を願ふ勤をするには、願人は勿論、勤人衆も惡しきをはらうて眞実助けたいとの心を以つて願ふべし。

即ち神の宇宙創造の意義は、神人交樂し人間をして長く樂しく神に仕へしむる爲めであり、之を形式に表したものの即ち神樂勤である。従つて神樂勤は祈願と靈交の意義を有し、眞の人間生活は神に対する感謝と、神の徳に対する讚美と、過に対する懺悔と、罪に対する悔改との四要素がなければならぬ。之を形式に現したものの即ち神樂勤なるが故に、人間は神樂勤によつて救はれるのである。

今日の人間は斯うした神の深意を知らずして、人間中心、自我中心となり、自分さへよければ人はどうなつても構はんと云ふ心持になつてゐるが、此の心は宇宙創造の意義に反するものであり、神の御心に叶はぬ。故に此度神が「だめの教」——唯一の教を弘めて、斯うした心持から人間を救はうとしてゐるのである。

神の教は、神の御心に叶はぬ惡しき心を蔽ふて、人々互に相和する陽氣な心となつて神に願へよと云ふにあるのであるが、此の時の心持は、神の心も人の心も同じ事になつてゐるのであり、人間の身体は神の貨物神の自由であるから、人間の心の勇むにつれて神も勇み神人

親和するから、身上から救はれるのである。即ち神樂勤は神人交通の攝理―贖罪形式なるが故に、神樂勤によつて身上事情から救はれるのである。

上述する如き次第であるから、神の救ひを願はんとするものは、願人は勿論、勤人衆も神の御心に叶はぬ悪しき心を祓ふて眞に人を助けたいとの心になつて神樂勤を奉仕し、心から神に願ふてこそ救はれるのである。

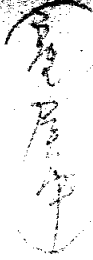
之を要するに神樂勤は祈禱の形式であると同時に贖罪形式なるが故に、神樂勤によつて身上事情から救はれるのである。

三、恩　　寵

人間身の内は神の貨物、身の内は神の自由用、おびやたすけを思案してみよ、此の屋敷へ願ひ出るなら、腹帯いらす凭れ物いらす七十五日の毒忌いらす身の穢れなし、常の通りに許しおく、おびやたすけは最初人間を拵へた神の証拠、萬づ助けの道明けなり、此の先はおびや自由用、早めなりと延しなりとも願の通り叶ふの守りを出す。又、人間の心をすましたる上は、何時迄るても病ます死なす弱りなき様の萬づ助けを教へる。

即ち天理王命は人類創造の神―人間の親神にまします。と云ふても、人間は淺幕かなものであるから之を信する事は出来まい。故に其の証拠に「おびやゆるし」を出し給ふ。

おびやゆるし



おびやゆるし

先に述べた如く、人間の身体は神の貨物、神の自由用であるから、おびやゆるしを頂けば、腹帯も凭れものも毒忌みもいらす穢れもない。即ち平常の如くしてをつて何等差支へない。それは最初人間を造つた神であるから此の自由が出来るのであつて、異教の神では此の自由は出出来ない。之から考へて此の神に願へばどんなものも救はるゝ事が明かであらうが、之からはまだ其の上に、お産を早めなりと延ばしなりと、其の者の願通り叶ふ守りを出す。又、人間の心がすんだならば―人間を罪惡より救ふたならば、何時までゐても病ます死なす弱らんとしたすけを教へ、神人交樂の世界を実現するのが、神が啓示を実現した所以である。更に、

守り

瘡瘡せぬようの請合の守り、惡難よけの守りを出す。

と記されてゐるが、瘡瘡守りは小人の頂くお守りである。此の守りも、惡難よけの守りも、人間の親里は地場である―天理王命は人間の親神である事を人類に示す爲めに渡される。又、教祖は「一に百姓助けたい」と仰せられて、百姓の爲めに特に意を用ひ給ふ。即ち、

百姓の助けは芽出しの札、蟲よけの札、実りの札、其の他に肥の授けと言ふは、糠三合、灰三合、土三合、都合九合調合して肥し一駄の助けとなる。

と示されてゐるが、教祖の教は下級社会より逐次上級社会に及び、もつて人類を救はんとするものである。

地場

四、理想の世界

又、珍らし事を始め出し、甘露台の地場を顯はす。此の屋敷は最初人間宿し込みの地場に
して、地場は人間の親里なり。母親は三年三月の間地場に止まりゐて此の屋敷よりうみ出
したるなり。何故に地場を顯はすかと言へば、最初此処にて月日兩人談じ給ひ「うを」と
「み」とをもらいうけたる時に、うんだ子数の年限がたちたなら元なる屋敷へ連れ帰り、陽氣
ゆさんを見せて楽しみ遊びをさすとの約束あるを以て、此の度は天より天降り、此の地場
を顯し出して何でもかでも返へししてやらにやならん故に、先づ元なる親の魂を生れさせ
おき、其の者を月日の社として神が入り込み、珍らし助けを教ゆるなり。此の助けを教ゆ
るも、無い人間無い世界を拵へるはむつかしき事にてありたと同じ事にて、神の言ふ事は
是まで書物にある事や、人間の知りてゐる事は言はず、是までにある事を教ゆるには及ばず、
書物にても無い事、人間の知らぬ事を言ふて教ゆる事故、是亦むつかしきはすの事なり。
と記されてゐる。先に述べた如く教祖は神樂勤によつて珍らし助けを教へられたが、今又茲
に地場を顯されたと云ふことも亦珍らしい事の一つである。

教祖は明治八年春「地場の蕊定め」を遊ばされ、此処に甘露台を建てて事を定められたが、
地場は人間宿し込みの地、人類発祥の地にして、神が最初人類創造の際の約束に基づき、人

類発祥の地を人類に示し、神と人とを陽氣遊びさせなければならぬ。其処で神が実現して此の教を説いてゐるのであるが、無い人間無い世界を拵へるのは容易なことではなかつたのと同じ事で、此の道を創めるのも容易な事ではない。地場を顯したのも、一に人類創造の恩を人間に示し、罪惡の自覺を促し、以つて神人交樂の世界を実現する爲めである。

神は人間の知つてゐる事、書物に記されてゐる事は教ゆる必要がないから教へない。人間の知らぬ事即ち超經驗的、超知識の事を神は示すのであるから、之を人間にうけこまず事はなか／＼容易ならぬ事である。然し人間を眞に救ふが爲には、如何なる困難があつても、之を人間に得心させねばならぬと示されてゐる。即ち現代の文化は科学文明である。科学は人間に正確な知識を與へるが、暗夜廣漠たる原野を小さい提灯を持つて歩くのと同じく、科学のみにては足許だけしかわからない。此の廣い天地の中で眞実の安住の場所、人生の方向方針を科学に求める事は困難である。にも拘らず人間は足許のみを見て、其他を顧みない。暗夜廣漠たる大海原を航海するものは北斗星を頼りとするが如く、此の廣漠にして神秘なる人の世を旅するものは、教祖の教を頼りとせねばならぬ。其処に暗黒なる人生を照す光が存する。徒らに啓示に疑ひの眼を向けるものは、光に背きて光を求むるの愚を敢てするものである。地場には甘露台が建てられるが、それは人間の親里を世界人類に示す爲めである。即ち甘露台の形状は十柱の神のいはれ形をもつて定める―人間創造の意義を現すものであると、

人間を宿し込みたる地場の証拠に、元十柱の神のいはれ形をもつて甘露台を建て置き、世界中の人間の心すみたる上は、甘露台の上へ平鉢と「じきもつ」とをそなへ、夫に天より甘露を與へる。是は世界中の人間の壽命藥となる。

と記されてゐる。即ち世界人類の心がすんだ曉に、甘露台の上に平鉢（じきもつを入れ）をそなへ神樂勤をするならば、天より人類の壽命藥となる甘露を與へられ、永生の賜が與へられる。即ち不死の世界が実現する。之泥海古記の示す理想の世界である。要するに甘露台は人間救済の爲めに建てられる。

斯くて我々の靈魂は不滅である。即ち人格は永存する。故に人間の死は、滅亡に非ずして出直しである。之を、

人間は死に行くと云ふも死ぬるではなし、身の内を神が退くなり。死ぬと云ふは、衣服を脱ぎすてるも同じ事なり。

と記されてゐる。即ち人間は物靈より成る。靈魂が肉体を具へてゐる時は、神が肉体に入り込んで守護し給ふ故に、肉体は生活を続ける事が出来る。然し一度神が退き給へば、物は生活力を失ふ。之を人間は死ぬと云ふのであるが、靈魂は不滅である。靈魂が不滅なるが故に、我々は未耒生活を樂しむ事が出来るのである。死後の靈魂は「神が之を抱きかゝへてゐる」と教祖は教へられてゐる。故に死と云ふ事は、靈の世界へ歸るのであるから、古い着物

を脱ぎすてるのと同じである。

天地の悠久なるよりみれば、人生五十年は僅かな一瞬である。故に人間は怠りなく未生生活への準備を爲すべきである。夫未生生活への準備とは何か。消極的には人格の完成にして、積極的には傳道である。之を総称して甘露台建設と云ふ。

されば神は先づ日本國民に此の道を信せしめ、日本に甘露台を建て、世界各國に日本を親國として敬はしめ、世界人類が日々救ひを求めて、國々より集まる事を切に望み給ふてゐる。之を、

此の先は國一番に説きかせ、人間の心をすましたる上は毎年豊熟をとらせ、尙又日本におや柱を建て、万國までも親國と云ふて敬はせ、日々助けをもらをとて國々より参る道を第一に神はせき込み給ふ。

と記してゐる。人間の心がすんだ上、人を助ける心になるならば、神は毎年豊作を恵むと仰せられてゐる。此の事は衣食住に不足せしめ給はぬ事を意味する。

此の御話は常々取次へ御聞かせ給ふ事の大略を記すものなり。

以上泥海古記は、教祖が日常にお側におの者へ御聞かせ下さる御話の概略を記したものである。故に信者たると未信者たるを問はず、よく之を味ひ、神の御心に叶ふ生活を爲すべきである。之泥海古記を示し給ひし神の御旨に答へ奉る所以に他ならない。

第三 意義の解明

泥海古記は宇宙の意義と性質と生命とを詳細に明示するものである。即ち神より出發せる秩序と法則及び宇宙の發生起源と、目的と統一とを有する活動力とを示し、併せて良心の起源及び靈魂の出發と帰着とを明示するものにして、其の余は人類發生の順序と段階及び其の歴史的過程を示すものである。之を換言すれば人格を發生して理想の人に到る道を示すものである。吾人は今之を人間の淵源、人生、人間の將來の三章に分ちて之を述べ、最後に泥海古記のもつ進化的意義を明かにする事とする。

第一章 人間の起源

人間何処より来りしか。泥海古記の示す其の解決を明示し、以つて眞の人間——理想の人は如何なる人格を具有するかを明かにする事が本章の目的である。

一、神 観

泥海古記は宇宙の起源を明示して、神の創造せる所なりと示してゐる。然らば泥海古記の

神々の理

神の觀念

神觀如何、即ち泥海古記は神に対して如何なる解釈を下してゐるかを明示する事が本章の目的である。

神とは何ぞや、泥海古記は此の間に答へて神は見えざる存在、即ち天地の心なりと言ふ。

それは丁度人の主体は精神靈魂にある如く、天地の主体は目に見ゆる物質でなくして、物質を支配する靈即ち天地の心にあると云ふのである。之を「神は理、理は神」といふ。

泥海古記は神の存在を示して、天地はもともと天地の心たる神、自覚ある存在者が之を組み立て、之を支配してゐる。故に天地が整然たる秩序をもち、よく統一してゐるのであると示してゐる。即ち天地は決して塵捨箱か何かの様に、無茶苦茶にものをほり込んであるものとわけが違ふ。整然たる秩序がないならば、科学者が如何に苦しんでみても理法を發見する事が出来ぬ。然し天地は混沌としてゐる如しと雖も、心ある神、自覚ある存在者が組立てたのであるから、心を持つ学者が研究するに連れて理法を發見する事が出来たのである。

神は聰明なる智慧と聖き愛とを持つ自覚的存在者であるから、盲滅法に働く力ではない。

思慮深い目的に従つて世界を支配してゐる。泥海古記は之を進化に於て示してゐる。即ち天地は絶えず繰り返すのみではなく、繰り返す内に進化があり進歩がある。一体進化とか進歩とか云ふことは、下から上へ進むことである。決して偶然に変化する事ではない。低き階級より高きに進む事である。即ち神は進歩の方向を定め理想に向つて絶えず導いてゐるが故に、

天地は絶えず進化し進歩するのである。

之を要するに泥海古記は、神を目的と統一とを有する活動力、即ち生命であると解決する。之を換言すれば神は聰明なる智慧と聖き愛とを持ちたる自覚的精神力、即ち神は靈也とは泥海古記の示す所である。故に泥海古記の示す神は、エネルギー(力)の如く意識のない自覚のない物的勢力ではない。

普通神を力の方面よりみて、神は全智全能也即ち「自由用」と云ふ。確かに神は全能の力と全智の力によつて世界を支配し給ふてゐる。目に見えない心である神が如何にして此の物質の世界を支配し給ふかと言へば、我々の心が常に身体を使つて種々必要な働きをしてゐる事から想像すれば全く想像し得ない事ではない。靈なる神は斯くの如くにして、全智全能の力をもつて全世界を支配し給ふ。之を「この世は神の身体」と云ふ。

右に述べた所を要約すれば、泥海古記の示す神は、天地宇宙を創造し主宰し支配する精神上の存在者即ち天地の心にして、神は目に見えぬ形を有する存在者には在しませぬ。即ち「神は理、理は神」である。

理を哲学的に解する時に理体又は理法と解する事が出来るが、此処に言ふ理は活きて働く理即ち生命である。而かも此の理は活動的にして有目的である。換言すれば人格を具有する理である。今之を哲学的に説明するならば、狹義の本体論より理を觀れば唯心論に属し、宇

本体論

神の人格

宙論より理を觀れば一神論の有神論に属する。即ち本体論に於ては本体を理と觀、宇宙論に於ては之を神と觀る。故に宇宙論より本体論を觀れば「理は神」であり、本体論より宇宙論を觀れば「神は理」である。之を天理王命と奉称する。

神は天地の心である。所が心と云ふ意味も、時には心の一要素をとつて神とする事がある。例へば或る哲學者の示す神は理性である。之は泥海古記の示す神ではない。泥海古記の示す神は、人格者にまします。然らば神は天地の心乃至は宇宙の心と云ふ丈ではなくして、人格者だと云ふに就いては如何なる意味が加つて来るか。それは神は人間と特別の交渉を持つ聖き存在者にまします。即ち人間は神の子にして、神は神と人とを結んで行く事を只管に望み給ふ聖き存在者にまします事を、泥海古記が示してゐる。神は一個の人格者だといふ事は、神の心は心の働きの総べての要素を持つてゐる事を意味する。神は理性也と云ふ如く、心の一要素を取つて来て之が神だと云ふのでは、神を人格也と云ふ事は出来ない。神を人格だといふ意味の中には、神は心意作用のあらゆる要素即ち智情意等を備へてをり、而かもそれが完全に統一統合を保つてゐると云ふ意味を含んでゐる。

抑々人格なるものは、元々他に對する關係から生じて来るものであつて、他のものとの關係なしに人格を明かにする事は出来ない。即ち人格はあつても他のものとの關係なしに之を明かにし得ないのである。人間の立場より神の人格を表現する場合に、之を神と人との關係

と言ひ、神或は自然が人間に対して行ふ所をとつて、之を明かにする事が出来る。

自然界には智慧の働いてゐる事は誰もが認める所である。例へば天文学者が曆を作る場合には天文学と言ふ知識に基づいて造るのであるが、其の頭で考へた曆と全く同じ事が天体に於て行はれる。或は又物理化学、幾何学等の法則は、勿論我々の理性によつて解つたのであるが、此の法則に当てはまる如く自然界が出来てゐるのである。即ち自然界の法則を發見し應用するものが科学である。人間の理性が發達すればする程、之等のものがよく理解出来て行く様になる事から考へて、自然界に智慧の働いてゐる事は認めざるを得ない。即ち自然界には人間の智慧に共鳴する智的なものが働いてゐる事を否む事は出来ない。

自然界には人間が美しいと感ずるものが確かに存在してゐる。即ち自然の美の中には人間の審美心がたまらなくさせられるものがある。其処で人間は自然の美を其のまゝとつて身に纏ひたいと云ふ思ひが起る。之から考へて自然界にも之と同じ思ひが行はれてゐるから、自然を彩るものと考へられる。

以上述べて来た所によつて知らるゝ様に、自然界の智は人間の智を無限に延長したものであり、自然界の美は人間の美を無限に延長したものである事を暗黙の内に承認せねばならない。斯くの如く自然界には智も美も確かに存在する事は明かであるが、之を承認する時は意志の存する事を亦認めなくてはならぬ。即ち自然界には或る目的が宿つてをり、萬人等しく

之に従はなければならなくなつてゐる。何故かと言へば、此の目的は人間の道德性に丁度適つた様に行きつゝある事を承認しない訳には行かぬからである。即ち自然と云ふものは盲目的に働いてゐるのではなく、一定の方向がある事を考へなければならぬ。それが智となり美となつて現れてゐるのである。

之を要するに神の造り給ひし自然界には啓示が宿されてゐる。故に神は人格的存在にまします。而かも自然界の背後に在します神の人格は、人間より以下なもの、人間より貧弱なもの、と考へる訳には行かない。故に我々は人間の有する總べてよりも深き高き人格をもつて啓示を與へ、寧ろ神を知らぬものに働きかけてゐる神の力を感せずには居られない。

神は人格を具有し給ふとは、神は智に於ても意志に於ても、心意作用のあらゆる要素を備へてゐる事を意味するのであるが、そのみでなく、それが安全に統一統合を保つて居る。統一性の欠けた人格を二重人格と云ふが、人格には統一性がなくてはならぬ。神は完全に統一せられた最高の人格者にまします。人格の統一せられた状態を品性と云ふ。即ち心意作用の統一せられた状態を品性と云ふ。神は人格にまします限り、人格の色彩たる品性は如何と云ふ事を知らなくてはならぬ。

神の品性は「可愛い一條」即ち愛によつて代表する事が出来る。「神は親なり」とは泥海古記の示す大眞理である。それは神は愛の手を以つて此の世を支配し給ふとの眞理を示すもの

である。泥海古記の示す神は徹頭徹尾愛の神にまします。即ち聖典のどの頁を開いて見ても、神の慈愛が天地の中に満ち／＼てゐる有様が言々句々に示されてゐる。一例を挙げて言へば、十柱の神の守護の項には、人が神の慈愛を信頼し生活すべきを教へ、人間は何を着、何を食ふかに付き余計な心配をする必要はないと教へてゐる。即ち神は万物の靈長たる人間を愛を以つて守護し給ふが故に、衣食住の必要な事はよく承知であるから、先づ人生の第一義として神の御心に叶ふ様、正しき行ひ、眞面目な行爲をすれば衣食住に必要なものは神が與へて下さるから、安心して神を信頼せよと教へてゐる。然り、神は慈愛の神即ち「可愛い一條」にましますが、聖典を繙いてみると慈愛と云ふだけでは未だ神の愛を現すに足りない、聖典の示す神の人に対する愛は、太陽の如き白熱的愛である。

然らば神の愛の目的、即ち神の最大の興味、白熱的熱情をこめて苦心せらるゝ所は何かと言へば、それは人間の成人即ち人格の濟めらるゝ事、即ち宗教的に言へば靈魂の救はれる事即ち「たすけ一條」である。之を換言すれば、神は善人を造る爲めに日夜苦心してゐるとは、泥海古記の示す所にして、其の爲めに八埃を蔽へと示されてゐる。

泥海古記の示す人生最大の幸福は物質の豊富ではなくして、人が神を知り其の正しき道を歩む精神的に豊富な生活にある。神が日夜苦心し熱情をこめて人に得させようと望み給ふ所は、此の精神的豊富な生活である。神の熱愛の中心はまさしく此処に存する。聖典の中にも

亦泥海古記の中にも、此の精神的幸福を得るに迷ひし者の一人々々に、如何に絶大なる熱愛を注いで居らるゝかが示されてゐる。神は人を愛し之を物質的にも恵み給ふが、それよりも白熱的愛をこめて日夜心をくだいて居らるゝのは「因縁の切りかへ」即ち人の精神的悔改と向上とである。

前述する如く神の品性は愛である。即ち神は慈愛の神であり、熱愛の神に在しますが、更に神の愛の中には自ら「理」即ち正義公正の性質を包有する。神の愛は一人の人又は少数の人に対する愛ではない。全世界幾千億の人総べてに対する愛である。故に其の中に自ら正義公正が含まれてゐなければ、愛の実行はむづかしい。少数の者を愛するには偏狭な愛もあらう。然し神は全世界人類を皆子供として之を愛せらるゝのであるから、不公平な姑息な愛はない筈である。即ち神の愛は社会の正義公正を維持する愛である。人間の世界では義理と人情とが衝突する時もあるが、それは智慧の欠乏と愛の欠乏とから起るのである。然し神の廣大無辺なる智慧と絶大無限なる愛とは、愛の中に充分正義公正を包む事が出来る。即ちおもたりの命の御姿が三劔を有する大蛇であるとは此の意味を表象するものである。賢母の愛は細やかな愛の中に義理を包んでゐる如く、神の熱愛は全世界の全人類に及び、社会の正義公正は神の熱愛の坩堝の中に充分溶解せられてゐる。何となれば正義を行はんと望みが深ければ深いだけ、それだけ人を愛する熱度が加はる事が理想的な義人であるからである。

世の中に親の愛程不思議なものはない。子供が一人の時も十人になつた時も、親の子供一人々々に對する愛は別段薄くない。親の愛は相手次第で幾らでも出て来るものである。不完全な人間の愛ですらも斯くの如くであるから、全智にして宏大無辺なる愛をもつてゐる神が、世界の人類を愛し、而かも一人々々には胎も一人子を愛する如き愛が行き渡つてゐると云ふ事は想像に難くはない。

之を要約すれば、神の品性は愛即ち「可愛い一條」にして、神は慈愛をもつて我々を愛護し給ふ。神は我等の人格の向上―精神的向上の爲めに、日夜白熱的愛即ち「たすけ一條」をもつて心を粹いてをられる。神の愛は全人類に對する愛であるから、正義公正即ち「理」が包まれてゐる。之泥海古記の示す神の品性に他ならない。

人の品性は常に技能の支配者となるものであつて、技能が人の品性を支配するものではない。即ち人物評價は品性第一主義である。世の中には正直に忠実に仕事をする人をみると、彼は馬鹿正直だと嘲笑の眼を以つて迎へるものがあるが、品性第一の標準から云へば誤つてゐる。斯く考へてみれば、理想的人格は高尚なる品性をもつて、其の卓拔せる技量を支配操縦する人である。此の意味に於て神は理想的最高の人格である。神は徹頭徹尾愛の品性を以つて、其の全智全能の力を道具に用ひ給ふ方である。故に神は暴君の如く其の全智全能の力を、自己の勝手氣儘に用ひ給はない。即ち神は全智全能なりとは、其の愛の計畫を実行し給

ふ上に、何等不可能の事がない事即ち「自由用」を意味する。之神は天理即ち自然法、道徳法によつて森羅万象を支配し給ふが、必要に應じて奇蹟を顯し給ひ、或は攝理と恩寵とを垂れ給ふ所以である。神は自由用自在なりとは此の事を指すものである。斯くの如く神の計画は天地の内、何ものも之を妨ぐるものはない。

今若し我々が神の人格を知らんとすれば、神を慕ひ神を愛する即ち信じてこそ神の人格を知る事が出来る。それは人間が人間の人格を知るが爲めには其のものを愛さなくてはならぬのと一般にして、愛なくして人格を知る事が出来ぬ。故に人間が神を信する時、神の人格が明かになつて来るのである。神を信するものは先づ自然と親しまなければならぬ。自然と親しむ時は、人間が自然界の内に存在し、自然と愛によつて結ばれてゐる事が明かになつて来る。即ち人間が神を恋ひ慕ふと同じく、自然界にも人間を愛するといふ事を現す傾向のある事。事が判然として来ると共に、人間の有する総べてよりも深い愛をもつて啓示を與へ、寧ろ神を知らぬものに働きかけてゐる偉大なる神の力を感せずには居られなくなつて、此処に神の人格が明かになつて来る。即ち自然界の背後に在します神の人格は、人間の人格に比べて人間より以下なもの、人間より貧弱なものとか考へるわけにはゆかなくなつて、神の人格の偉大さがしみじみと身に感じられて来る。

人間が自然界を理解し、之に動かされてゐる事は事実であるが、泥海古記は神は萬有の創

造主にまします事を示すと共に、人間は神によつて造られ、神に支へられ、神によつて愛せられてゐる事を詳細に示し、人間は親神の存在する事を信じてこそ、安住の境地を得る事が出来る事を示してゐる。

神は人格を具有し給ふと同時に、神は自己を啓示したいと云ふ希望をもち給ふてゐるが、人間も亦どうかして之を知りたいとの傾向をもつてゐるのであつて、之は総べて愛するが故に起るものである。即ち「神人親子の名乗を奉げる」ことは神人の共に望む所である。そして此の二つのものが出会つた時に眞の活動が起り、此の愛が全ふされる時、自然界は其の目的通りに發達する。何故ならば本当の姿で我々が自然界と交渉を持つなら、自然界ももつと變つて来るに相違ないからである。其の一例を挙げれば、教祖は人間の心がすみきれば、農作物は豊作であると教へられてゐる。又河上の樹木を伐る事によつて自然界は變へられ、其の爲めに雨水が上流になくなり、時には一時水が出て河が溢れるに至る。斯くの如く今日の自然界は、人間の小さい自己の爲めに誤られてゐる。人間の足を一步地に着けた事が自然界に響くのであるから、人間の行動の如何が宇宙に影響して、人間の種々のやり方の違つた事は、自然界にも影響しない訳には行かない。即ち「心通りの守護」である。

斯くの如く今日大部分の人が神から離れてゐるのは、決して本当の姿ではない。其処で神は凡ゆる方法を盡して人間を原の姿に回復しようとして遊ばされてゐる。其の間違つてゐる証拠

は、其の關係を絶つてゐる爲めに種々の不都合が人間の生活に起つて来る事によつて判明する。即ち人間は一方に高いもの、聖いものを求めてゐるにも拘らず、種々の不安不正が起つて来たりすると云ふ様に種々の矛盾のあるのは神と結ばねばならぬ關係が絶たれてをり、神は之を正当の關係にたつよう導かれるからである。其の關係の絶たれてゐる方面に於て、神がそれを正当の關係に結ぶべく促し努力し給ふ事は当然である。何故ならば神は愛にまします即ち人間の親にましますが故である。

神は如何にして其の關係を回復し、之を取り結ばんとせられてゐるか云へば、其処には大きな法則がある。即ち自然界に神そのものを最もよく現す人格者となつて人間の中に顯れる、換言すれば人間の内のあるものを神と少しも變りないものとしておこし、其の内に神の正当な愛を盛り入れ、天然の神の愛と結びつけねばならないものとせられたのであつて、それが教祖にましまし、之を啓示と云ふ。

教祖の愛は神の愛なるが故に、どんな人間にも明かな愛である。即ち教祖は人間に神の愛を示し、徹底的に神に仕へ他人の爲めにし、一点も自らの爲めにせられなかつたと云ふ事は明かである。教祖の愛は若し我々がそれに触れるならば我々の魂も共に震へ、これこそ自分の日頃慕ひ求めてゐた愛の最高の表現即ち「親神」の愛であり、自分の慕ひ求めてゐた唯一の神に在しますと云ふ事を痛切に感じないではをられぬ大愛を示されてゐる。それは恰度人

間の母親が弱い子供に対しては殊に深い愛を示す如く、日夜聖賢の道に修養する者にのみ判然として、凡俗には少しも解らないといふ様な愛ではなく、却つて凡俗否極悪人に於て、余計に神の愛を知り得る如き愛を示し給ふてゐる。故に教祖は神を人間に示し、神の計畫を此の地上に実現し給はんが爲に、神がどれ程人間を愛し給ふてゐるかを、実践によつて教へんとして此の世に現れ給ふたものである。故に教祖を見る者は神の愛を一目で見える事が出来る。故に神が愛である即ち親神にまします事を知るには、教祖の御考へと其の信仰を通じてなければ神と本当の完全な關係を結ぶ道がないと言はなければならぬ。故に教祖によつて現された神、之が本当に神が愛である即ち親神であると云ふ事を証明し得るのである。即ち泥海古記に示された神は、教祖の御姿によつて具体的に我々人類の前に示されてゐるのである。

之を要するに、教祖といふ道徳上一点の欠点も穢れもない人格を靜かに見る時は、人間の理想の人格化と見られる人に、神が其の愛を示されてゐる事を知る事が出来る。此の事は教祖は理想の人にまします事を意味する。

前述する所を要約すれば、神は人格的心靈にましく、人間の親にまします。之を学的に言へば目的と統一とを有する活動力、即ち生命そのもの即ち「理」が神にまします。教祖は之を天理王命と奉稱し給ふた。天理王命は人格的に分裂して十柱の神となり給ふ。月日は十

柱の神の中心にましく、天理王命の人格の中心であると共に、創造の中心にまします。他の八柱の神は天理王命の人格の内容にして、創造の資材にまします。換言すれば天理王命と月日とは一体にまします。天理王命は教祖として実現し給ふ。之を換言すれば天理王命と教祖とは一体にまします。故に天理王命と月日と教祖とは三位一体にまします。

之を要するに天理王命は萬有を創造し主宰し支配する神にまします。教祖は之を「元の神、笑の神、親神」と示し給ふた。之泥海古記の示す神観に他ならない。

二、字 宙 観

吾人は前章に於て宇宙の起源たる神は如何なる神なるかを明かにしたのであるが、然らば泥海古記は宇宙に対して如何なる解釈を下してゐるか、即ち泥海古記のもつ宇宙観を明示しなければならぬ。之本章の目的である。

眞夜中に一人野道を歩けば、平素非宗教的な者も、非常に神祕的とならざるを得ない。眞夜中でなく晝間であつても、深山幽谷や大森林の中を一人彷徨すれば、宇宙の驚異に我々の魂は震ひ上る。果てしもなく曠野の中を一人で行く時、逆巻く怒濤の中を航行する汽船の甲板に立つ時、朝早く起きて輝かき日の出に一人で向ふ時、人間は理窟を言ふ前に先づ或る種の戦慄を感じる。それはどうしてなんだか口には言へない。宇宙に人間以上の力のある事、

物質の文明

が製造する

丁は人向

丁を賣る者

か。我々も我々

に之を之明

心その

なり、

人間以上の世界のある事を直感するからだと言ふのが一番早いであらう。即ち大自然に向つ

て敏感な神経が向けられると、人間は宗教的にならざるを得ない。それは理窟から来るもの

ではなくして、直感から来るものである。故に昔の人間になればなる程、皆宗教的であつた

のであるが、人智の進むに連れて、人間は人間自らの力を信ずる事が多くなり、それが多く

なるに従つて宗教心が薄らいで来た。人間の力が強くなればなる程、宗教的良心が旺盛にな

らなければならぬ筈であるけれども、淺蕪な人間は其処迄は考へない。それは恰も子供等に

は、自然の風物よりも汽車や電車や飛行機の方がより興味を感ずると等しく、機械的な文明

のみを慕つてゐる者は、自然の輝かしい感に就いては全く盲目的である。故に人間は自然の

姿から遠ざかれば遠ざかる程、宇宙の神祕を見失つて了ふ。現代人は此の事に就いて、深く

反省しなければならぬ。即ち泥海古記は斯うした人達に対し、深いく反省を促すもので

ある。

泥海古記は人間の小さい技巧以上に、大自然の支配する所のある事を我々に教へてゐる。

之を詳細に言へば、泥海古記は自然の奥にある人間以上の力と、自然の奥に横たはる整頓せ

られた法則と、自然のもつ不思議な目的と、それに向つての特殊なる淘汰性即ち撰択性と、

最後に成長して行く不思議な生命の世界とを、遺憾なく人類に指示するものである。

今日は昔と違ひ、我々は自然をみるに凡ゆる便宜を持つてゐる。然し不幸な事には我々の

知つてゐる自然はバラ／＼であつて、統一もなければ生命もない。況んや自然的法則と心理的法則との間には、何等の連絡もついてゐない。飽迄も自然は自然であり、人間は人間である。即ち自然科学はさうした法則をバラ／＼にして教へてゐるが故に、心をもつ人間と、物質を本質として現れてゐる大自然との間には何等の連絡もとられてゐない。當にそのみならず、自然科学は唯事実を教ゆるに止まるが爲めに、より記載的であり、より経済的である。要するに自然科学より言へば、自然は自然であり、人間は人間であつて、其の間に何等の連絡もとられてゐないが、泥海古記は其の間に連絡ある事を示してゐる。

泥海古記は之等のものを一つの体系にまとめて、人間の心の内に働いてゐるのと同じ法則が、宇宙に於ても働いてゐることを教へてゐる。即ち泥海古記は自然の奥に心が働いてゐる事を示し、自然が一つの言葉であり、表象であり、或る種の發言權をもつてゐる事を示し、ものそのものが或る種の意味をもつてゐる事を示してゐる。之が泥海古記と自然科学との間にある見逃す事の出来ぬ非常に大きな差である。

泥海古記は譬喩によつて神徳を表象してゐるが、泥海古記に示す譬喩は單なる譬喩ではない。即ち譬喩をもつて自然そのものを正直に教へ、其の統一性と其の組立てとが、生命と法則と淘汰と成長と目的性のある社会なる事を示すと共に、我々の精神の間に働く心理的法則と何等異なるものでない事を秩序よく充分理解せしめて以つて、大自然にも心があり、意味の

あることを発見せしむる爲めに示された譬喩である。即ち泥海古記は應用科学や機械学等を唯一般的に教ゆるものではなく、宇宙の秘められた法則と目的とを發見する爲めに示されたものにして、此処に科学と宗教との根本的調和がある。即ち普通の科学者は宇宙全体の他の法則と連絡させて機械学や應用科学を教へないが、泥海古記は部分の全体に対する神聖なる責任を示し、全体への献身と生きんとする生命の訓練とを教へてゐるから、常に全体へ連絡し、全体に対する或る意味をもつものとして自然の一部を教へてゐる。

要するに泥海古記に於ては、自然全体が個性の心にとつて、戯曲化された大きな情景として現れて来るのであるから、自然は完全に宗教化されてゐる。故に少し極端な言葉であるかも知れないが、泥海古記の眞意より言へば、泥海古記は宗教と科学とを宇宙藝術として取扱つてゐる。宇宙観は魂にとつては一つの藝術である。そして自然は生きた宇宙観を我々の心に囁いてゐる。其処に乾からびた文字の宇宙観は、其の權威を失ふのである。

我々が自然を研究するに當つて、自然科学の法則を説く事だけが許されてゐる。即ち宇宙の統一性、宇宙の組織、それは電子論から原子論へ、原子論からコロイドの進化、無機物から有機物へ、メンデルの法則から生物發生の進化論まで、宇宙が秩序正しい組織を持つてゐる事を示してゐるが、生命に聯絡する接続点を示してゐない。然し泥海古記は我々に眞の宇宙観を與へてゐる。即ち自分より以上の大自然が自分と同じ生命を持ち、心を持ち、自分を

保護し、自分を導き、自分を創造し、發展し、進化せしめてゐるのであり、而かも自分は其の大宇宙の寵兒である事を意識せしめてくれる。即ち泥海古記は、宇宙の意義は人をして永く神に楽しんで仕へしむる爲め即ち人間の「ようきゆさん」を見る爲めであり、宇宙の性質は有機的であり、宇宙の内容は道德的である事を示してゐる。

之を要するに泥海古記は最近發達した小さな自然科学を忘れしめ、大きな自然科学を通じての創造的進化を我等の眼前に提示するものである。即ち泥海古記の宇宙觀は、死せる文字の宇宙觀に非ずして、生きてゐる自然は永遠に神の言葉であるとの眞理の下に、大宇宙は神の御旨の顯現であり、人間は神の寵兒即ち「可愛い子供」にして宇宙を構成する一分子なる事を示してゐる。之泥海古記の示す宇宙觀に他ならない。

三、人 間 觀

吾人は前章に於て泥海古記は、人間は大宇宙の寵兒即ち「可愛い子供」であると主張する事を述べたが、然らば泥海古記は如何なる人間觀を有するか、之を明かにする事が本章の目的である。

泥海古記は宇宙創造の意義、即ち宇宙の意義を「人間のようにきゆさんを見て神も共に楽しむ」と示してゐる。此の事は神が宇宙を創造せる意義は、人間をして長く神に楽しく仕へし

むる爲めである事を意味する。之即ち泥海古記の示す宇宙の意義に他ならない。

斯くて神の意匠は此の目的を實現する爲めに行はれた。即ち神は創造に當つて先づ光を與へ給ひ、而して後物質を造り、物質に生命を與へて生物を造り、生物に靈を與へて人間を造り、人間の成人に應じて天地を開闢せしめ給ふたのである。之神の意匠の偉大なる所にして、人間は万物の靈長なりとの意義を創造に於て示されてゐる。斯くて泥海古記は地球中心説の立場に立つものである。

宇宙全体より觀れば地球は宇宙の一小部分に過ぎない。即ち現在の天文学説に依れば天体には地球より大なるものも無數に存在するが、此の地球上には高遠なる人格と崇高なる品性とを有する人類、尊嚴なる意義を有する神の子が生息してゐる。此の人類の存在は、殺風景なる大岩石の疊々たる中に咲く可憐なる薔薇一輪の如く、独り我々に美的感興を起さしむるのみならず、他の疊々たる岩石を如何に意義付けるかは計り知れぬのと同じ存在である。即ち我々人類の存在は此の地球を如何に意義付けるかは計り知る事は出来ない故に泥海古記が地球中心説をとる事は至当である。尙他の天体にも人類若しくは之に類するものが生息してゐるとするも、此の事は未知の事に屬し、確實性をもたざるが故に之をとり上げて論ずるには足らない。

扱て人間は萬物の靈長なりと言ふ事は如何なる意義を有するのであらうか。神は人間の造

物主にまします事は前節に述べたが、神は物と靈とによつて、神に似るが如く人間を造り給ふた。勿論それは姿や形が神に似てゐると云ふのではなく、肉体の内部にある自己と云ふものの姿が、神の姿と同じものであると云ふ事である。泥海古記は之を「人間は神の子」と示してゐる。即ち人間は云ふ迄もなく精神と肉体とから成つてゐるのであるが、精神が自己であり、肉体は其の道具である。人の精神の要は人格である。故に泥海古記の示す自己なるものは人格である。

人間を若し肉体の上より云へば、天地宇宙の大に比して九牛の一毛にも及ばざる実に微々たるものなるが故に、人間の偉大さは其の肉体にあるのではなくして、其の精神即ち靈魂即ち人格にある。此の人格が偉大なのである。

人格は心の働きの総べての要素をもつてゐる。之を知識の上より云へば人間は學術を有してゐる。即ち或る一定の現象を観察し、分類し、之を説明し、人的行爲を齊整し感化する力を與へられてゐる。動物中にて智慧の最もよく發達した類人猿すらも、人類の二三歳の子供の智慧位にしか相当しない。斯く考へると人間の知識は実に偉大である。之を藝術の上より云へば、美しき建物、麗はしき絵画、彫刻、工藝、人を酔はしむるが如き音楽等、人間の藝術的才能は偉大にして、創造的能力をかくの如く發揮するものは天地間に独り人間あるのみである。之を徳性の上より言へば、人間は肉体の慾望のみに終始する動物の活動とは其の趣

を異にし、他動物の有せざる徳性—道德性を有する。徳性は更に宗教性、即ち神の心に従つて生活せんとする性質によつて、人格の深奥の部分が固められてゐる。

斯くの如く人間が其の渺たる一小軀の中に提げてゐる精神程偉大なものはない。扇は要で固めらるゝ如く、人間の精神は人格で固められてゐる。即ち靈魂とは人間の精神の固めにして、人格の生命は同時に靈魂の生命である。

泥海古記は人間は神の子なる事を示す爲めに、人間の靈魂は「神の分け靈」であると示し、神心同性を主張してゐる。人は之を肉体の側よりみれば実に渺たる一小軀であるが、其の中に包蔵してゐる天地の神と其の性質を同じくする靈の偉大さを忘れてはならぬ。教祖は老若男女貴賤貧富を問はず、如何なる人をも実に貴いものとして一人々々を重んぜられた。それは其の人の靈を重んぜられたのである。

人間の靈魂は神より分派支流せしものである。即ちいざなぎの命が生み降しの際息をかけて廻られたとは、此の事を意味する。故に人間の靈魂は神によつて特に創造されたものではなく、神より與へられたものである。神は人間に之を與へ給ふに當つて、「どぢよ」の性質に基づいて與へられたのであるが、凡そ「どぢよ」なるものは泥の中に居て而かも泥に塗れない、故に誘惑に打ち克つ如く人間に人格を與へられたのであり、更に泥を物質と解する時は物質に囚はれない、即ち物質を超越して人間の靈魂が與へられた事を意味する。此の事は靈

魂は物質に比べて遙かに價值高き存在なる事を示すものにして、之人間が萬物の靈長と言はるゝ所以に他ならない。されば如何に金銀財寶を積むとも、人の靈の尊さに比すべくもない。故に教祖は其の御一生を通じて、恰も値高き金銀を得んとして世界の山々を探ね廻る鑛山師の如く、高價なる眞珠を千尋の海底に求むる海女の如く、人の靈を何よりも尊いものとして尋ね求められたのである。

神は人格的心靈にまします。故に神より分派支流せし人間の靈も亦人格を具有する。即ち人格は神より賜りしものである。之人格の尊崇なる所以にして、生命は他動物も亦之を有するも、人格は特殊的にして不滅であり、而かも神の人格も人間の人格も絶対的である。當にそれのみならず、人間の人格は神と近似性を有する。即ち人格の内容は智、情、意の三者であるが之を換言すれば知識と藝術と道德の三者である。宇宙創造の意匠は、無限の知識と無限の藝術と無限の道德性とを顯して遺憾がない。即ち神も亦、智、情、意の三者を具有し給ふ。故に人間は神の子なりとは、人間の人格は神より流出分布し、神の人格と近似性を有するものなる事を意味し、之を神性と云ふ。吾人が神性を有する事は、人間の人格は神より流出分布せるものなる事を実証する。

人間の人格の中心となるものは良心である。良心とは善惡の標準を示して、我々の行爲と挙動とを指揮命令する働きを言ふ。即ち良心は人をして正善に就き邪惡を避けしむ。故に良

善不善の混海古記指掌
心は神の囁きである。此の故に吾人は善を爲せば満足し、惡を爲せば不安を感ず。若し之に背きて一時の慾念に誘はれ、不正不善の行動に出んか、良心は立ちどころに責罰を加へて人をして懺悔苦悶に堪へざらしむる。即ち吾人は良心に背く事を得ても、之を滅却する事は出来ぬ。之良心が神より出でし証左でなければならぬ。即ち良心は神より出でしものに他ならぬ。此の故に良心の命令は絶対的にして之を犯す事は出来ぬ。之を「誠眞実一つの理はどのように潰さうと思つても、眞実誠天の理、天の理がつぶれると云ふ事はない、なんぼつぶしにかゝつてもつぶれるものやない」と教へられてゐる。

今吾人が人格を向上せしめんとする時は、必然的に自己意識—人間は神の子なりとの自信を高めなくてはならぬ。此の自信の高まり行く時、吾人は神の囁きたる良心の命令に忠実ならざるべからず。忠実に良心の命令に従ふものこそ、我は神の子なりとの確信をもつものなりと云ふ事が出来る。教祖が「まことの人の人になれ」と教へられし所以も亦此処に存する。

凡そ神はまことである。故に良心の命ずる所も亦まことにして、良心に過誤はない。神は人間の親に在します。故に神は子供—人間を愛をもつて掬育し給ふ。故に人間にして神の愛を行ふものは「まことの人」である。之教祖が「人を助けるは眞の誠」と示され、又「誠は天の理、天の理なればすぐとうけとり、すぐと返すが一つの理」と示されし所以である。教祖の教がまことの人を造るに存するとは、実に我々が罪惡を有する事を自覺し、神の子とし

人格の發見

て良心に忠実なる生活を爲さしむることに存する事を云ふ。斯くの如き生活の建立を称して人格の発見と言ふ。我々は教祖の教を信じて以つて新しき人格を創造せねばならぬ。之神の宇宙創造の意義に答へる所以である。

之を要するに泥海古記の示す「人は神の子だ」との思想信仰は、我等に絶大なる自重自尊心を興へるものである。泥海古記に示す人は天地萬有を創造し之を支配し給ふ天地の神の子だと云ふ事は、我々が其の系図が如何に正しきかと云ふ事よりも尙一層の自尊心を増すものである。実に世界の創造説に於て、泥海古記の如く人間の偉大さ尊嚴さ高貴さを明確に示すものは未だ曾てない。

上述する如く人間の靈魂は神より分派支流し、人間の人格は神の人格より流出分布せしものにして、泥海古記は之を「親が子となり子が親となる」と示してゐる。

前段に於て示す如く、人間の眞の生活は愛の神が天地に在します事を信じて安住の心境を得るに在る。弱い子程親を求め、親を頼り、親の愛に甘えるものであるが、如何に弱くとも求めないものには愛は何共致し方がない。相互の心が相互に寄り合ふから愛によつて結ばれるのである。之を換言すれば、神を信ぜざるものは神の愛を享くる事が出来ない、即ち信仰なくして人間の基礎が定まらぬ。従つて潑刺たる生活を爲す事はむづかしい。

神を信ずる事は、暗黒なる人生を照す燈台である、それにも拘らず、人間は科学を受け容

えづれでよ
わかえは向
題
ト

れる事は割合に容易であるが、神の信仰を受け容れる事はそれ程容易ではない。五に五を合せば十となると云ふ事はうけいれる事が出来ても、親神が此の世界に在しますと云ふことは容易に受け容れにくい。何となれば理窟では説明の出来ぬ神祕が伴ふからである、如何なる人であつても神に就いて手にとる様に総べてを語る事は到底出来ない。即ち其処が信仰を必要とする所である。我々が人として知り得た事だけを土台とし、それ以上は信じてかゝつた時に、始めて信仰生活の妙境に入る事が出来る。故に大切な事は神を信する決心である。此の決心が出来なければ、泥海古記も亦荒唐無稽なりとしか考へられない。それと同じく信仰談は恰も砂を噛む様なもので、何の味ひもない。

信仰と云ふ言葉の意義は、信念と信頼と云ふ二種の意味に用ひられる。信念とは言葉の現す事が出来る内容を信する知識で、人は死すものなり、神は唯一なりと信する如きものである。信頼とは常に人格者に対して用ふる言葉で、彼は事を托すに足るものだと信する事は人格的信頼であり、子が親を信じ、妻が夫を信するといふ事は、信用出来ることと云ふことである。勿論人が或る人を信頼するには、必ずや信頼し得る信念的内容を得てゐる筈にして、彼は今迄約束を違へた事がない、今迄に彼は忠実にやつたと云ふ風の信念的内容が必要であつて、其の知り得たる内容を基礎として、其の人に新しい事をも托し委せる所に信頼といふ事が起る。信頼によつて睦まじい夫婦となり、朋友は管鮑の交りが出る。

神を信ずる信仰も亦信念だけでは足りない。神は人格者であるから、信頼でなければならぬ。泥海古記に示されてゐる事を土台として神を信頼してかゝる所に、信仰生活の妙境に入る事が出来る。之を「ふじゆうなきよにしてやらう、神の心にもたれつけ」と示されてゐる。我々が信用する人に就いて、少々面白くない噂があつても容易に之を信じない如く、信仰生活も徹底的に神の存在を信じてこそ、信仰の妙味が味はれる。泥海古記も亦信じてこそ盡きぬ妙趣がある。

之を要するに人間は神の子なり、之泥海古記の示す人間観である。

四、理想の人

吾人は前章に於て泥海古記の示す人間観を明かにしたが、然らば此の人間観の下における具体的の人間、換言すれば泥海古記の示す理想の人如何を明かにする事が本章の目的である。

抑々神の内に人道が存在し、人間の内に神性が宿つてゐる事を詳しく考へてみるならば人間の内にある智、情、意及び道德性を完全に聖めて行くならば、人間は神に近づいて行くのである、其の窮極は神に近いものとなるのであつて、之を（おふでさき七号一〇九—一一一）せかいちうみな一れつはすみきりてよふきずくめにくらす事らな

月日にもたしか心がいさむなら　にんげんなるもみなをなじ事
このよふのせかいの心いさむなら　月日にんげんをなじ事やで

と示されてゐる。即ち謂はゞ無限な神を有限に縮めたものが人間の中に宿つてゐる。故に神が人間の内に存在する事も出来るわけであつて、人間以外のものの中に存在することは出来ない。即ち木や金や石や紙等の中に神が入り込む事が出来ぬと示されてゐる。故に神が具体的に顯れ給ふには、神が人間の姿に於て現れる事以外にはない。教祖は斯くの如き人格を具せられてゐる。

親孝行を道徳の根本にしようと思へると、どうしてももつと根本的な單に目に見える孝行と云ふ事よりも更に本質的な問題があると思ふ様になる。親に仕へるのと同じ行く道が天地の間にもあると考へる様になる。教祖は「親への孝行は月日への孝行としてうけとる」と示されたが、親孝行と云ふ道は人間が存在するとせぬとに拘らず昔から存在してゐるものである。單に孝行のみに限らず、道徳と云ふものは深く／＼源を探れば神に連つてゐる。故に神には正義、愛、聖等の精神が宿つてゐるが、それは又人間が神の正義、愛、聖等をもつてゐる事である。故に人間が眞実に人の道を求めて行く時に、正義、愛、聖等を求め、何とかして穢れを脱けてでて其処に至りたいとの願ひが起るに到るのである。即ちもつと理想的なものが存在すると云ふ事を人間自らが考へ及ぶと云ふ事それ自体が、神の内にも人道が存在する

と云ふ事になる。故に今度は人間の穢れを段々取り去つて行けば、段々神の聖が人間の内に現れて来る筈である。換言すれば人間を無限に延長すれば、神に近付く事が出来ると云ふ訳である。此の意味に於て教祖を神の実現と云ふ。即ち教祖は神を人類に示す爲めの神性を備へた人格を具有し給ふと云ふ事が、神の実現の意義にして、之を教主として我々が仰ぐのである。要するに教祖の人格は理想的な人格であり、之を人から見れば神を人に現す人格であり、之を教祖の言葉を借つて言へば「まことの人」である。まことの人とは、教祖の人格そのものがまことであると云ふ意味であつて、教祖がまことを実行された人とか、或はまことを説かれた人であると云ふ如き浅薄な意義ではない。

教祖の人格は理想の人格であり、神が人として現れた理想の人格は神性を宿すものであると云ふ事は、上述する所によつて明かであるが、然らば教祖の人格の本質は何かと云へば、教祖の人格は「救ひ」にある。之を「たすけ一條」と云ひ、教祖は「人をたすけるのが眞の誠」であると示されてゐる。即ち教祖の人格の本質は教主にましますといふ点に存する。

教祖が其の同じ同胞を見渡し給ふた時、人類と云ふものは当然神と親子の關係をもつて地上の生活を営まなければならぬ筈のものであるにも拘らず、全く此の關係を絶つて寄る辺なき生活をしてをり、其の爲めにあらゆる世の道德的矛盾や苦痛災難が行はれてゐるのであるから、どうしても之を再び神の御膝元に連れて戻り、神と人とを再び結ぶには如何にすれば

よいかと云ふ事が、教祖の此の世に於ける唯一の命題であつたのである。此の考へをもつて人と接してゐるに、どうしても之等の人の中に神と相容れないもののある事が見出された。それは「あしき」即ち罪惡と、今一つは「ほこり」即ち「八埃」とであつた。何故かうしたものが起るかと言へば、それは自我に仕へてゐるからである。其の爲めに人生に悉く矛盾が生じて来る。故に之を神に結び、神に仕へる様にせねばならぬが、其の爲めには先づ自己と云ふものを明かにせねばならない。即ち人格を發見せしめなければならぬ。

救ひの一番大切な事は、人生に於て極力人と接し相結ばんとしてゐる神をはねのけておいて、人間が自己に頼つてゐる、之を再び神に結ぶ爲にはどうしても罪から離さなければならぬ。埃を祓はさなければならぬ。所が人間の奥底にねほんのかすかではあるが良心が存在してゐる。此の良心はやはり神の子の姿を宿してゐるのであるから、罪や埃の爲めに誤つてゐても、此の良心の爲めに一番深い犠牲を捧げるなら、罪を破つて力強い権能を回復するに相違ない。罪が人を毒するよりも尙一層強い愛をもつて人に対するならば、人間は其の本来的面目をとり返すに相違ない。其の爲めには人間最高の道義を行はなければならぬ。愛の極致を行はなければならぬ。即ち「たすけ一條」の精神を親の愛において行はなければならぬ。

教祖は常に神と接し給ふてゐるから、神は他の人を捨て給ふ筈はないと信ずると同時に、

神は自分を愛し給ふと同様に他の人をも極力愛し給ふ事を確信し給ひ、此の神の愛を代表して彼等に行ふならば、彼等を此の神の愛に必ず伴ひ返す事が出来るものであると確信し給ふたが、それが纏てどうでもかうでも人間を神の御膝元へ連れて帰らなければならぬとの強い観念を持ち給ふ様になつたのであると我々は確信する。此処迄は我々の理性によつて理解出来たのであるが、之から後は理性にばかり訴へておかない問題になつて来たのである。即ち之からは信仰によつて理解するより他に道はないのである。

教祖の愛は神の愛を代表するものである。神の愛には人間の愛の如き矛盾がない。即ち如何に無智なる者にも、何等の修養なき者にも神の愛は徹底してゐる。知識ある僅かの人間、修養を積んだ僅かの人間にのみしか解らぬといふ神は、未だ眞の神ではない、教祖は「愛」を「たすけ」と言ふ言葉で示されてゐる。たすけと云ふ言葉の前には、人生には悲しみと苦しみが存在すると云ふ意味がある。教祖は之をたすける道も説かれたのではない。教祖の御人格そのものが「たすけ」であつたのである。之を「たすけ一條」と云ふ。

教祖の示された「たすけ一條」の精神は、一番偉い人間は偉くない人間に對して犠牲になれと云ふことである。世界にある道徳は皆小さく下のものが、大にして上の者に従へられたのである。孝悌貞順総べて下から上に向ふものであるが、教祖は之に先立つて強いものが弱い者の爲めに先づ自らを殺さなければならぬことを示された。「しんどのしぞんは親や」と示

たすけ一條

され、或は「百人の上に立つ者は百人の下に立たにやならん」と示されてゐるのは此の意味である。教祖は其の御一生を通じて人間をたすける爲めに如何なる犠牲をもものともされなかつた。即ち隣家の一子照之丞の黒疱瘡をたすける爲めに、二人の愛兒と御自分の生命とを差出し給ひ、或は乞食を家族の如く遇し給ひ、或は一家飢寒に迫り殆んど死に到らんとするも尙救世済人の大願を果し給はんとして勇往邁進遊ばされ、或は獄舎に繋がるゝも尙「一度は一度の匂ひがけや」と仰せられたるが如きは其の一例に過ぎない。此の教祖の愛にして始めて愛が徹底する。

神の愛は徹底してゐると共に權威がなければならぬ。即ち教祖の愛には何人と雖も之を犯す事の出まぬ權威がある。母が本当に其の子を愛するなれば、若し其の子が悪に向はんとする場合には立ち所に之に權威を以つて臨む如く、教祖は人を神の中に伴ひかへす爲に、其の方へ行けば危い、絶對的にこちらへ来なければならぬと「ひながた通らにやひながたいらぬ」と示され、教祖の人格そのものを目標として、自己の人格の向上を期すべしと示されてゐる。「たすけ」とは信仰と善行とである。此の善は絶對的な意味を含む。凡そ如何に偉い人でも、一点の穢れなき純潔を主張する事は出まない。然し教祖の御生涯を通じてみる時は、一点の穢れなき純潔を主張する事が出来る。

教祖は本当に我を信する者に自分が犠牲になる爲めに此の世に來たのだと自らを投げ出し、

其の心持で立たれた。神が人間を信任せらるゝ様に如何に小さい人間をも信任せられた。忘
け者の藤助が働き甲斐を見出したのも、教祖が忘ける者の中にも尙且つ神性を見出し、之を人
として信任せられ、之を重用せられたからである。教祖は人を反古にするなど常に仰せられ
た。斯くの如く教祖は如何に小さい人間をも信任せられた。元来人間の最も尊いものは、人間
が道義の爲めに燃え上る事である。戦時に於て戦争目的の正しきものが勝つと云ふ事も其の
一例であるが、罪を犯した人の話をすれば身震ひする様な氣の弱い者でも、道義に奮ひ立つ
話をきかせれば感激し、自らもそれに倣はんとする氣が起る。即ちどんな人にも道義をもつ
てすれば必ず燃え上るものがある。教祖は忘ける者の藤助の中にも、又其の主を毒害せんとし
た人非人のおかの中にも尙神の子の姿を認め給ひ、その尊いものを引き出す爲めに苦しま
れた。人間の内部から其の人間の本当の自分自身の價值により、願ひにより、喜びにより、
力により浮び上らせる爲に、人間の最も尊いものに訴へ、人間の内部の本当の力によつて自
分自ら奮ひ立たせると云ふことは、一番大きな「たすけ」であり、之が「救ひ」である。教
祖は斯うして藤助やおかの如き人非人と云はるゝ者をたすけ給ふた。
之を要約するに教祖は人をたすける爲めには「我が身どうなつても」と云ふ心―犠牲的精
神を以つて臨み給ふた。そして「我が身さへよくば人はどうでもかまはん」と云ふ心―利己
主義即ち自我に仕へる心即ち「人間心」から離れなければならぬ事を身を以つて示し給ふた。

之を換言すれば、教祖の「たすけ一條」の精神——犠牲的精神は、人を神に結び付くる爲めのひながた即ちあがなひである。

凡そ人生最大の職分は人間として甘露台建設に奉公私生の精神を以つて盡すにあるのであるが、教祖の御生涯は此の人生最大の職分を完全に盡されたものであり、教祖の人格は人間進化の頂点——理想の人になります。泥海古記は此の事を「みきの心天理に叶ふた」と示してゐる。即ち天理教徒が何処迄も教祖を雛形として其の御足跡を踏まして頂く所以である。

嘗にそのみならず、教祖の犠牲的精神は、人と神とを調和せしめんとの願ひであつて、此の事は神——人格として此の世界に永遠に存在する神——の人格は、今日の前に教祖として人類の前に示した通りの人格である。而かも神の人格の不滅なる如く教祖の人格も亦不滅であり、教祖の人格は永遠に汝等人間の中に生きて働くこと云ふ事を示すものである。之を「教祖存命の理」と云ひ、之を具体的に現すものが地場における教祖存命の理であり、泥海古記は之を「地場に天理王命の神名をさづけおく」と示してゐる。

嘗にそのみならず、教祖の人格によりて此の世界が聖められる。其の究極を甘露台世界と云ふ。此の事は教祖が甘露台にまします事を示し、甘露台世界は教祖の人格によりて此の世界が聖められた曉に於て実現する事を意味する。此の状態を指して教祖の再臨と云ひ、それに至る迄の道程を甘露台建設と云ふ。故に甘露台は教祖の再臨によつて実現する。換言す

れば教祖の御力によつて甘露台が実現する。

之を要するに教祖は我々の理想の人にましまし、教祖と同じ人格を有する人を「まことの
人」即ち善福の人と言ふ。換言すれば信仰と善行とを兼備する人をもつて理想の人とする。
之泥海古記の示す理想の人である。

第二章 人 生

人間何を爲すべきか。泥海古記の示す之に対する解決を明示し、人間の行爲と本格とを明
かにする事が本章の目的である。

一、道 徳 観

泥海古記は宇宙の性質を示して有機的なりとすると云ふ事は既に述べた所であるが、それ
は宇宙は部分と全体とから成り、全体から部分へ、部分から全体へと常に活動してゐる生活
体である事を意味する。既に事物の存在する以上、其の相互間に何等か一定の状態を保持す
るが爲めには、必ず従はねばならぬ一般的關係即ち法則（自然法、道徳法等）の存在する事
は自明の理である。此の法則に従ふ道、即ち泥海古記の示す道徳観を明示する事が本章の目
的である。

凡そ宇宙間に行はるゝ法則なるものは、神が宇宙を支配し給ふ法則である。即ち神の意志に基づく法則である。神の意志に基づく法則なりとは、法則の必然性、即ち誰しも従ふべき法則である事を意味する。之を詳細に言へば、神の意味が有意識なる心靈界に行はれて良心となり、無意識なる自然界に行はれて自然法となる。即ち宇宙に行はるゝ法則は神の御旨の顯現なるが故に絶対的であり、如何なるものも之に従はなければならない。即ち何人と雖も之を犯す事の出表ない所以である。とは言ふものの、神も亦法則に従ふものではない。法則の主宰者にまします。故に攝理と恩寵を垂れ給ひ、啓示し給ふ。

凡そ神は正義と仁愛とを以つて萬有を支配し給ふ。故に法則と言ふても、それは血も涙もない機械的のものではない。人間の成人、人間の出世が神の法則の目的である。即ち人間のようにゆさんの世界の實現、換言すれば甘露台の建設、之を学的に言へば神人交樂の世界の實現を目的とする法則である。此の世界を實現せんが爲めに神の行ひ給ふ法則である。天理教道德は之を中心として成人するのであるから、天理教道德の目的も亦甘露台の建設に存する。要するに自然法、道德法の背面には人格的心靈、即ち神がまします。

抑々道德なるものは判断と自由の存する所に行はれるものである。判断とは善惡の判断にして、自由とは善惡撰択の自由に非ず。神が人間を道德的に支配遊ばさるゝ爲に自由を與へられたのであるから、善を行ふの自由を有すると解するを至当とする。何となれば神は善な

るが故である。故に良心によつて善惡を判断し、動もすれば惡に趨かんとする心を善に向つて躍進せしむる動機たらしめ、善を行はなければならぬ。かしもの、かりものの教理も、單なる肉體或は萬有のみを指すのではなく、要は善を行ふの自由を與へられてゐる事が、かしもの、かりものの根本義でなければならぬ。判断と自由とは人間の人格より言つて、最も重要なものである。何となればそれが人格の高下に影響するからである。

人格とは心意作用の方面を指し、之を統一するものは品性であるとは前章に述べた所であるが、各人の行爲は其の品性によつて定められる。品性とは其の人の過去の習慣が造り上げた行爲の習慣である。それは物理学に言ふ惰性の如きもので、終始慈善の行ひをしてゐると慈善家と云ふ品性を造り、それを人を偽り欺く爲めにやる時は偽善家と云ふ品性を造る。即ち人の行ひは其の人の過去の行爲の習慣たる品性の現れである。然し過去に於て修養を重ねたよい品性の人も、特に惡を爲さうと努力すれば惡を爲す事が出未るし、反対に品性の少し位わるい人も、特に良い事を爲さうと努力すれば善を行ふ事が出未る。此処に意志の自由がある。若し特に意志の自由決定によつて新たな行爲を爲さなかつたならば、品性に變化はない筈である。然るに事実として品性の變化して行くのは、過去の行爲の習慣たる品性の上に自由意志によつて新たな行爲が加はつて行くからである。要するに品性はいつも固定してゐるものではなく、上なり下なり善なり惡なりに進む余地をもつてゐるものであり、それは

自分の中に意志の自由が興へられてゐるからである。而かも我々の日常生活の経験から考へてゐると、意志の撰択には常に自由の感じが伴つてゐる。更に人間が後悔を感ずるのは、意志の自由があるからであり、責任があるからである。此の故に我々は自由意志を興へ給ふた神の御旨を尊重し、善を行はなければならぬ。

我々が意志的行爲を爲した結果が事件の進行を決定し、又は左右する時は、我々は其の行爲に対して責任を負はなければならない。責任の存する所には自由存し、自由のない所に責任はない。自由を興へられてゐる我々は、其の責任を全うしなければならぬ。

之を要するに泥海古記は道德は神の御旨の顯現なる事を示し、判断と自由とによつて甘露台建設に向ふ事が、道德の目的なる事を示してゐる。之「かしもの、かりもの」の教理の内容である。

二、罪 惡 観

前章に述ぶるが如く、人間は神の子なりとすれば、人間は善人ばかりでなければならぬが、常に悪い事をするのは何故であるか、一体悪い事とは如何なる事か、何故惡が存在するのか、泥海古記は之に対して如何なる答へをするか、即ち泥海古記の示す罪惡観を示す事が本章の目的である。

か
し
も
の
か
り
も
の

前章に於て述べた如く、人は神の子だとの思想信仰は、我等を無限に自重自尊せしむるものであるが、現在我々の人格が神の子たるに相應しい大品性を發揮して居るや否や、我々の現在の人格品性の實際を反省してみると、神の子たる筈の人の行爲も品性も、神の子としてあらう筈もない事が多い。強盜殺人の如き法律上の罪を犯す人は勿論の事、人各々が日常やつてゐる事、心で思つてゐる事等を一々神の御心に照合してみると、己が身ながら恐ろしく感ずる事がある。

泥海古記は人間の罪惡を示して神の御心に叶はぬ事を罪だと示してゐる。即ち人から尊敬せられてゐる紳士淑女の家庭にも、或は親子喧嘩、夫婦離縁、薄情強慾等、多くの人の知らぬ不義不正が行はれてゐる事もある。埃及として泥海古記に示されてゐる虚偽、虚栄、高慢、嫉妬、怠惰等の罪惡、同情すべき時に同情をせなかつたり、憐れむべきを憐れまなかつたり、救ふべき筈の人を救はなかつたり、正義の戦の爲めに進んで奮闘する努力を欠いだりする事は皆善と知つて爲さぬ罪である。

法律では法律を犯したものが罪であるが、道徳では道徳の理想に反するものが罪であり、泥海古記では神の御心に叶はぬものを罪、埃及として示されてゐる。

上述する如く人の實際と云ふものは実に罪惡に満ち／＼してゐるにも拘らず、泥海古記は何故之を神の子と認めてゐるのであらうか。それは現在の下劣なる品性の中にも、尙神の子と

しての面目を發揮し得る可能性のある事即ち、人間の善性を認めてゐるのである。如何に罪に埋もれ社会から爪はじきされる様な人も、神の子たる面目を發揮する可能性をもつてゐる事を認めてゐる。故に現在は下劣なる行爲、醜惡なる品性をもつ人も、適當な道（救ひ）に従つて神の恩寵に浴する時は、神の子の眞面目を發揮する事が出来るものなる事を、泥海古記は確認してゐる。

神は世界を創造し給ふたが、それは善なる神に在します。善なる神が創造し支配する世界に惡の存在するわけは如何。

惡は神が作られたものではないが、少くとも此の世界に「泥」即ち誘惑の存在する事を許し給ふた。それは神の世界の一大経綸は、人の人格發展、徳性の練磨であるからである。此の世界は人類の人格練磨の舞台として神の造り給ひしものにして、今人格を練磨せんとすれば、刺戟を必要とする。即ち総べてのものは刺戟によつて發達する如く、徳性も亦刺戟によつて發達する。即ち誘惑は確かに徳性の刺戟である。故に偉大なる品性は誘惑の練磨によつて出現する。要するに神は人の人格練磨を主眼として、世界經營の計画中に誘惑の存在ををさめ給ふてゐたのであると解せられる。

誘惑の存在は神の世界経綸の中にあつた事は前述の通りであるが、それが罪惡となるのは、人の意志の妥協による。前項に詳述せる如く、本來神は人の意志の自由を許し給ふた。それ

は意志の自由は人格の大特色にして、神は人を機械的に造り給はずして、善惡何れの道をもとれる自由を與へた。機械には自由の撰択はないが、人間は機械ではないから、人間本来の面目は如何なる誘惑に出會つても、意志の自由をもつて惡を捨て善を執る所にあるのであつて、かくてこそ神の子としての眞面目を保つことが出来る。然るに意志が誘惑と妥協し、惡の実現となればその責任は意志にある。誘惑そのものは惡ではないが、人は決して誘惑に屈する如く造られたものではなく、之に反抗する事が出来る自由を與へられてゐる。人の意志は外界の事情のみに支配されるものではなくして、撰擇の自由を持つてゐる。故に惡の実現は飽迄妥協した意志に其の責任がある。即ち自由意志の濫用によつて罪惡が出發し、自由意志の誤用によつて過を犯すのである。

之を他の方面より説明するならば、人間には本能と理性の二つが與へられてゐる。之は神より與へられたものであるから、両方共善であるべき筈のものであるが、良心の示す境界を無視して自由権を行ふ時は惡となり、此の境界を守れば善となる。即ち自由権によつて行ふ時に、一方の善（理性）を行ふ時は善となり、一方の善（本能）を濫用すれば惡になる。之を例へて言へば、生命を持続すると云ふ善の爲めに食ふと云ふ事は確かに善であるが、良心が境界線であるといふ事を示すにも拘らず、自由権を濫用して境界線を突破するからそれが惡となり、無理矢理に食ふた結果は腹痛を起す。又人間種族の發展の上に、人格の發

揚の上に、人間が一家を成して生活するといふ事は道德生活上必要な事であつて、之は善である。所がそれを不祥なものとして了ふのは、自由権を濫用して性慾の爲めの奴隸となるからである。即ち男女が合して一家を成す事はそれ自身人間の道德上必要なものではあるけれども、其の關係を濫用するから種々の害毒を流す結果となる。人生の罪惡の陰には女ありと云ふが、之は男からの云ひ分で、女から言へば犯罪の陰には必ず男があるといふ事になる。何れにしても、道德的なものであつても、自由権を濫用する所から弊害が起るのである。要するに生存慾の濫用と誤用とを罪惡と言ふ。

では神は何故に人間に自由を與へたか。之は人間を機械化せよと云ふことになる。人間を機械化すれば人生は單調なものとなり、今日よりもつと苦痛なものとなるに相違ない。今一步進めて言へば、今日の人間は存在しないと云つた方が適當かも知れない。では自由を與へるのはよいかから罪惡に行かれない様にすればよいと云ふかも知れない。だから良心が與へられてゐるではないか。心のみあつて人間に自由がなかつたならば、人生はそれこそ悲惨なものであらう。

泥海古記に於ては八埃即ち自由意志の誤用を厳しく戒められてゐるが、自由意志の濫用に就いても亦神の思召に叶はぬものとして示されてゐる。

前述する如く、罪の責任は我々人間にある。だとすればその結果は如何、第一に罪惡の結

果は良心の呵責となつて現れる。世の中に辛い事苦しい事も多々が、良心に責めらるゝ程苦しいものはない。良心に責めらるゝ時は、如何なる金殿玉樓に住んでも、牢獄に住むより尚苦しい。之罪惡の結果である。

然しながら「咽喉元過ぐれば熱さを忘れも」とか。良心の呵責に対する苦痛も、一日習慣のついた下劣なる品性は、又々罪を犯さしめる。斯くて罪惡の結果は第二に罪の墮性といふ恐ろしき結果となり、人間は放蕩息子の如き存在となる。

放蕩息子は悔い改めねば到底親と親しい關係を結ぶ事は困難である如く、罪惡を犯して神との親しき交りに入る事は不可能である。低い信仰の持主は、不義不徳をしても神にお供さへすれば恵みを下して下さると云ふ風の信仰をもつものもあるが、さうした事によつて神と親しき交りを結ぶ事は困難である。斯くて罪惡の結果は第三に神との絶縁と云ふ尙一層恐ろしき結果を招来する。

營にそれのみならず、罪惡の結果は個人にのみ止まらずして、社会に傳播し社会を墮落せしめる。それは社会は有機的の如きものであるから、有機体の一部分の病氣は全体に惡結果を及ぼす如く、一人の罪惡は決して一人に終らずして、社会の流行と云ふ疾に恐ろしき勢ひをもつて傳播する。

要するに罪惡の結果、個人は墮落し、社会は破滅する。神の子たるべき善の人間が、罪惡

の爲めに其の眞面目を發揮し得ざるのみならず、慘憺たる有様になる。故に人生最大の職分は、此の罪惡より救はれて、神の子たるの品性を發揮する事である。泥海古記は、科学、文学、藝術、政治、法律等の文化に対して直接に貢献する所はないが、罪に埋れた人格を改造し、罪に打ち克つ品性を創造する上に、古今無比の貢献を齎らすものである。即ち教祖は身を以つて此の事を実証せられてゐる。

之を要するに泥海古記の示す罪惡觀は神の御旨に叶はぬもの、即ち良心に反する思想と行爲を罪惡とし、人間は自由意志を濫用するから罪惡を犯し、其の結果善を行ふの自由を失つたのであるから、善を行ふの自由を獲得して、神の子たるの品性を發揮する事が人生最大の職分なる事を明示するものである。

三、救極觀

泥海古記は人間は神の子にして其の眞の姿は教祖の御姿にある事を示すと共に、現在の人間は自分さへよければ人はどうなつてもかまはんと言ふ心から埃を積んでゐる。即ち現在の人間は罪惡に覆はれてゐる事を示してゐるが、然らば泥海古記は如何にして現在の人間を眞の人に導かんとするか、即ち泥海古記の示す救極觀を明かにする事が本章の目的である。

教祖の本性は助け一條にある。即ち神の至聖性にある事は前章に示す所である。故に人間

は神の至聖性目指して進んでこそ理想の人に至る事が出来る。泥海古記は「かしももの、かりもの」の教理に於て道德の完全を期してゐるのであるが、之を握るものは自己の努力である。然しながら善と言ふもの主張、善の實際的に及ぼす結果を觀察するならば、單なる善のみをもつてする壽は完全な道德とは行かないのみならず、善のみをもつて完全な人生と見做すわけには行かない。故に道德的に圓滿な發達を遂げんとする時、人間は大いなる矛盾に陥らざるを得ない。故に人間が其の眞の生活を送るが爲めには、純然たる道德的生活を志すべきは勿論であるが、それ丈では目指す神の至聖性に達する事は出来ない。之を全うするには教祖を信ずる事が第一の條件であつて、道德上の努力によつて之が全うされるものであるとは主張してゐない。此の主張は眞理である。何となれば人間は自ら克つ事の出未ぬ大きな罪惡の支配下にあるが故に、道德上の努力によつて、神の至聖性に達する事は不可能であるからである。故に人間が悟りを開く事によつて、全智全能の人になれると考へる事は誤りである。人間の智、情、意の完全な發達を期して人間が辿つて来た文化の跡を尋ねるならば、必ず善に矛盾があり、教祖によつて新たに創造されると云ふ事が必要である。即ち教祖の内に人間を改造する力のある事を信じ、教祖と特別の關係を結ぶ事によつて、人格が新たに創造されるのである。

救ひの意義

教祖と特別の關係を結ぶとは如何なる事かと言へば、救はれると云ふ事である。救ひとは

人格即ち靈魂が救はれると云ふ事にして、救はれた状態を宗教的に云へば神と人が親しき交りに入る事であり、之を道徳的に云へば罪より脱却したる生活である。此の両者は同時的に行はれるが、神との親しき交りに入る事が根本にして、道徳的救ひは寧ろ其の結果である。

偕て如何にすれば神との親しき交りに入る事が出来るかと云ふに、神は心なき無生物に非ずして人格である。我々人類も亦人格である。故に人格と人格との間には何等かの交渉があるべき筈である。交渉がないと云ふ事は其処に何等かの原因がなくてはならぬ。其の原因を除く時は、神と人が親しき交りに入る事が出来る筈である。故に神と人が親しき交りに入るが爲めには、神と人との交りを妨ぐるものを除かねばならぬ。即ち罪惡を除かねばならぬ。泥海古記は之を八埃を蔽へと示してゐる。

第一に我々は過去に於て嘘も吐いた、不義理もした、不人情な事もした。斯うした過去に於ける種々の罪惡の記憶は、良心の呵責に苦しめられる。良心の呵責に耐へないで尙神と親しき交りに入らうと云う事は、目かくしをして人の顔を見ようとするのと同じ事で、不可能と云はなければならぬ。即ち種々なる罪惡の記憶は、自らが心と神との間を裂くものである。故に我々が神との親しき交りに入る爲めに先づ必要な事は、今迄自分の犯した種々の罪惡が、神によつて許されたと云ふ確信を得る事ではなければならぬ。

第二に過去の罪が如何に赦された所を、再び罪惡を犯さぬ何等かの力を得なければ、同じ事を繰り返すから神との親しき交りを永續させる事は困難である。即ち我々が罪惡の歴史を再び繰り返さぬ様に、現在及び將來罪惡に打ち克つ力を得なければならぬ。

之を要するに、第一に過去の罪惡の呵責から救はれる事、第二に現在及び將來罪惡に打ち克つ力を得なければ、救はれる事が出来ない。

我々が心の眞底から悔い改めるならば、神は今迄の総べての罪を赦して下さるとは、泥海古記の示す所である。即ち家内の者が残らず十五才からの心得違ひを眞實懺悔して、神の教の道を守り、嘘、追従、慾、高慢をない様にし、人を助ける心と入れかへて願へば、其の心を神が受取つて萬づ助けをするとは此の意味である。然し之は罪惡を帳消しにしてやらうと云ふ意味ではなく、忘れてとらすと云ふ意味である。之を義として救はれると云ふ。

何故に悔い改めたならば罪科を赦されるかと言ふに、それは神の人物評價の標準によるのである。凡そ人物評價には三つの標準がある。第一は結果即ち行ひによつて人物を評價するのであるが、之は動機を問はないから時に誤る事がある。第二は品性によつて人物を評價するのであるが、然し品性は常に動的のもので、往々品性は変化するものである。即ち品性は常に向上か墮落かの途を辿つてゐるものであるから、品性によつて評價する事は前者より根本的ではあるが、品性を靜的に固定したものと観る所に誤りがある。最も根本的な人物評價

の標準は、其の人の精神の向つてゐる方向、志す所によつて人物を評價する方法である。神は人が悔い改めるならば総べての罪を赦し給ふとは、神の人物評價は其の人の精神の方向によつて之を定め給ふ事を示してゐるのである。即ち泥海古記は之を「其の心をうけとる」と示してゐる。

悔い改めるとは方向轉換の意味で之を「因縁切りかへ」と云ふ。泥海古記は之を「人を助ける心と入れかへる」と示してゐる。即ち神は我々が罪の生活より方向を轉換して、天の理想に向つてゐるならば、其の人の行ひや品性がまだ少々出来上つてゐなくとも、神は之に見込み点をつけて、罪なきものと同様の扱ひをして下さるといふ事が、悔い改めれば過去の罪は悉く神が赦して下さると云ふ教理の内容である。それは神の御目には地上にある神の子が悔い改める事程價值あるものはないからである。即ち其の人の品性が未だ理想には余程遠しと雖も、理想に向つて向上せんとする熱意があるならば、神の御前には價值があるのである。之を要するに赦罪の眞理は、神の御前に一番價值ある人物は、譬へ其の人の過去の行ひや現在の品性が少々感服せなくとも、今悔いて助け一條の精神に燃え上り、神の至聖性目指して向上の一路を辿る人は救はれてゐるものなる事を示すものである。

然しながら赦罪の眞理によつて、法的の犯罪も亦赦されると考へるのは誤りである。何故ならば、神は人の心の奥も底も手にとる如く分るから眞実の改悛であれば人の罪を赦し給ふ

が、人には神の如く人の心の奥底まで知る明がないから、法律上、社会上の罪の制裁は止むを得ない。即ち当然である。

悔い改めるならば神は総べての罪を赦して下さると云へば如何にも容易な事で神は人の罪を赦して下さると思ふが、眞実の改悔は甚だむつかしい。故に神は此処に贖罪形式を容し給ふたのである。即ち神樂動によつて罪が赦さるゝ所以である。泥海古記は之を「人を助ける心といれかへて願へば」と示してゐる。

之を要するに我々が悔改して人を助ける心となり、神樂動を奉仕する事によつて始めて罪が赦されるのであり、此処に始めて神と人とが交り得る事となるのである。之を如実に示すものが、おびやゆるし、守り、肥のたすけ等である。

我々は茲に漸く神と人との交りをする道を見出したのであるから、之を永続せしめなければならぬ。即ち再び罪惡を犯さぬ様に罪惡に打ち克つ力を得なければならぬ。

凡そ人格の感化とか人格の模範とか云ふものは、不思議な力を興へる。世の宗教が偉大な力を現すのは、神の靈の力にふれるからである。然らば靈の働きとは何かと云へば、人格者たる神の我等に及ぼす感化力である。故に之を己の精神上にうける大切なる條件は、第一に信仰である。人の感化を受けるには、其の人を信用する度合が深ければ深だけ其の人の感化をうける事が大である如く、神の感化をうけるには神を信頼する事が深ければ深だけ

罪惡に打ち
克つ力

其の感化が大である。昔から神の靈の働きの偉大なる事を経験した人は、神を非常に信頼した人、即ち熱烈なる信仰家であつた。故に神を深く信じてこそ、神の感化がますます加はるのである。

神は物質力ではなく一個の人格的存在であるから、神の内面にある精神を解する事が深ければ深いだけ、神の靈の感化をうける事が大である。神の内面にある精神を最も明かにして下さつたのは教祖である。即ち教祖の心は完全に神の心を明かに示して下さつたのである。

換言すれば教祖に現れた諸徳は神の諸徳である。此の故に教祖を通じてみる神は、神の精神内容に深い理解を持つてみる神である。換言すれば教祖の人格は模範の人格にして、凡べて模範に進むべき目標を與へるものである。即ち人間は自分の意志の力だけで自己改造をやる事は中々困難である。悪習に囚へられて墮落してゐる品性の根本的改善は、甚だ以つて困難である。然るに教祖を救ひ主、人格の模範、ひながたと信じてうける神の靈の感化は、此の困難を敢へてする偉大なる力である。

之を要するに神を信仰し、教祖をひながたとして信じてうける感化、教祖の人格的感化は、人をして現在及び將來に互つて罪惡に打ち克つ力を與へるものである。斯くて教祖の人格的感化によつて八埃を祓ふことが出来るのである。

以上述べ来つた事を要約すれば、我等は教祖の生涯を通じて一面過去の罪を悔い改め、罪

を悔い改むものは総べて罪を赦さるゝとの確信を得、他面には現在及び將來罪惡に打ち克つ力を得、神樂勤を奉仕する事によつて義として罪惡より赦され、此処に人格の全き救ひが完成する。之を換言すれば、靈肉が一新して人格の新たな創造が行はれる。

此処に特に注意しておきたい事は御供に就いてである。人は動もすれば御供を贖罪だと考へる様であるが、御供は贖罪ではない。即ち人間の心靈界は物質を靈化するてふ靈妙極まる作用がある。一例を挙げるならば、我々が郷里を遠く離れた時に母の慈愛をこめた未狀に接すると、一読の下に其の愛に感じて涙を流すであらう。其の書狀は物に相違ないが、之に自己の精神界に於て自由に靈的意義を與へ、通常の見解を下さないであらう。之と同じく神に御供する物質に靈的觀念を與へ、其の瞬間に物靈を並行せしめて神恩報謝の意義を有せしめる事が御供である。之を宗教的美行といふ。即ち御供は斯くの如き意義を有するのであつて、贖罪ではない。

偕て我々が愈々救ひをうけたとなると、次に其の救ひを持續し完成する爲に必要な二大條件がある。それは聖典の拜読と、祈禱を行ふ事である。

祈禱とは何か。成る人は祈禱とは神に祈願を捧げる事であると解するが、お願ひする事だけが祈禱ではない。祈禱即ちお願ひすることは祈禱の一小部分である。何故かと云へば人格を持つものは他の人格者に交通せんとする特質をもつてゐる、神は生きた人格者であり、人

間も亦生きた人格者である。故に人が神の存在を知つて来ると、必ず神と交らうと要求するのは至当であり、又神も靈に於て人と交らんと求め給ふのである。丁度人の世は交通のある如く、神と人との間にも交通がある筈である。神と人との交りを称へて祈禱と云ふ。故に祈禱を眞実の意義から云へば、靈交と云ふ方が適當だと考へられる。然らば祈願と云ふ意味の祈禱は何の價値もないものかと言ふに、神は全智全能であり人間は不完全である。故に神の前に不完全な人間が出た時に、心の中にある願ひを述べる事は当然である。人間は絶えず種々の要求をもつてゐる。其の要求を神かけて願ふことは、人として当然のことである。

之を要するに祈禱とは全体としては神と交りをする事、即ち靈交と云ふ事が本末の意味であるが、人の交際にも信頼する親にすべてを打ちあけて相談し、事を依頼する如く、神にお願いすることは正当である。

泥海古記は神は最初に此の世界を創造し給ひしのみならず、今日も世界の支配者であり維持者に在します事を示してゐる。即ち十柱の神の守護は之を示すものである。故に神と自然法との関係は神は自然法を枉げようとはせられないが、自然法は本末神の造り給ふたものであるから、神は聰明なる智慧をもつて自然法を運用し給ふ。神が世界を支配する爲めに自然法を造られたのは、世界の秩序を維持する爲めである。人間は此の自然の理法を探り、自然法を利用して種々の計画をする事が出来る。即ち自然界は神の造つた自然界の支配下にある

から、我々が自然法を信用して種々の計画が出来る。故に自然法は自然界の秩序を維持するもので、我々は其の有難味を痛切に感じないわけには行かない。然し神は人格者にましますが故に、自然法が神を支配するのではなくして、神が人格者として自然法を支配し給ふのである。即ち宇宙の自然法は人格によつて支配せられる。人格は技術者である。故に人間は其の智慧をもつて自然法を利用する事が出来る。之を發明、発見と云ふ。人格は技術者であるのみならず法則の利用者である。即ち人間の智慧は法則を枉げずして之を利用する。斯くの如く神は自然法を枉げずして、我々の祈願に應答し給ふ事の出来る四満具足の智慧を持つて居られる。人間の智慧から考へると、神は自然法を枉げて應答し給ふより他に道なしと思はれる時にも、案外神の廣大無辺なる智慧は自然法を行き詰らせず、之を枉げ給はずして人の要求に答へ給ふ事が出来る。何故ならば人の智慧すら自然界に不思議な結果を齎らすのであるから、神の智慧は想像に絶する偉大さをもつてゐる。

要するに我等の祈願が自然法を枉げて下さいと云ふ様なものずきな願ひでない限り、多くの我々の願望に、神は自然法を枉げずして應答し給ふ道を持つて居られる。とは云ふものの、我々の祈願は百発百中^に非ずして、應答のない祈願もある。神は何故に我々の願望に應答し給はないのであらうか。みかぐら歌に「むりな願ひはしてくれな、神のうけとりでけぬから」と示されてゐる。それは大体次の二つの場合に應答し給はないと考へられる。

第一 我々の無智より来る祈願の爲に應答なき場合がある。我々は時に無智の爲に随分不道理な願ひ、不道德な願ひをする事がある。如何に神は全智全能にましますとて、二と二とを合せて五にして下さいといふ様な御願ひは、世界の秩序を破壊する結果になるから應答し給はない。又神は盗みをする様な不道德な願ひを許し給ふとは考へられない。故に少くとも神は不道理不道德な願ひには應答し給はない。若し其の願ひが神の前に正當な願ひであるならば、人の智慧には不可能と見える様な事でも、我々が熱心に祈る事によつて應答し給ふのである。我々が無智の爲め根本的に誤つた願ひをした場合に應答のないと云ふ事は、実は神の愛を示し給ふてゐるのである。即ち親は子供の願ひを悉く許さずして、許して差支へのないもののみを許すのは、子供に悪意を持つ爲めではなく、子を愛するが爲めであると同じである。それにも拘らず、我々は何故に神は此の願ひに應答し給はぬのかと嘆声をもらす事がある。それは我々の思慮の至らぬ所から、神の愛を知り得ないからである。

之を要するに、我々は願ふ所を知らぬ爲めに應答なき祈願を経験する事がある。然し時には表面我々の祈願を拒絶し給ふた如く見えて、其の実は我々の祈願の主意に應答し給ふ事も沢山ある。即ちたとへ表面上其の願ひが拒絶された如く見える場合にも、実質的には答へられてゐる場合が多い。

第三 我等の怠慢の爲めに祈願に應答し給はぬ場合がある、世の中に「果報は寝て待て」

神にお願ひさへすればそれでよいと、自分の努力で出来る事もせず、何の努力も拂はずに神の應答を待つ人がある。又たとへ努力しても精一杯の努力をせずに、神の應答を待つ人がある。恐らく神はこんな怠げ者の祈りには答へ給はぬであらう。祈願と云ふものは我等の努力の代用にせられるべきものではない。我々が精一杯盡した上尙我々の力の及ばざる時に神の加護がある。即ち神は人の爲し能はざる所を爲し給ふ。

我々の爲し能ふる所を爲さずして、唯神の加護を待つ者は怠げ者である。神はかゝる怠げ者の祈願には應答し給はぬ。賢明な親は子供に数学の宿題を解決してやるに先立つて、先づ子供の考へ得られるだけ考へさせ努力させた上、尙解決のつかぬものを解決してやる如く、神は我等の爲し得るだけの努力は我々自らが之を爲す如く仕向け給ふのであるから、自分の爲し得る努力もせずして單に祈願するに止まる者の祈願に應答し給はぬのは当然である。

祈禱は御願ひと云ふ狹義の意味もあるが、廣義には靈交と云ふ重大な意味のある事は前述の通りであるが、人間は何故に神との靈交を求めらるるのであらうか。

それは第一に神との交りは愉快であるからである。即ち我々は水入らずの家族と四方八方の話にふける時、家庭が團欒する事を考へるならば、我々が愛の神として親神を知り、神に対する感謝の心が湧いで来れば、其の神と靈の交りをする事が何よりも愉快である事が了解出来る。

第二に神との交りによつて人格の向上を計る事が出来るから、靈交を求めるのである。即ち有益な交友の結果はよき感化をうくる事より考へれば、靈交は靈の訓練、人格の訓練せられる道である事が判然とする。故に靈的先覚者は好んで靈交より得る品性の感化を味つてゐる。要するに祈禱する人と祈禱せざる人との差異は、神の靈的感化をうける人と然らざる人との差異である。

上述する所によつて明かな如く、靈交の結果は人格の向上である。之を詳細に云へば、靈交は第一に我々の思想感情を清め、第二に淨められたる目的に向つて活動する力を得る事が出来る。即ち靈交は清き心を造るにとゞまらずして、清き目的に向つて進む勇氣を造るものである。故に本教の信者は、大事件に遭ふ毎に神の御前に出で、神より来る靈の淨き力を得て、勃々たる勇氣を興へられ、如何なる大事件にも騒がず驚かず、清き目的に向つて進む事が出来る。されば靈交としての祈禱は、実に偉大なるものである。

偕て然らば靈交の條件如何。神との靈交に就き最も必要なものは、神が目にあたりに在ますといふ神の現在の感である。人と交るには其の人の存在が必要である如く、神と交るには神の現在の感が必要である。即ち神は目に見えぬ存在であるから、靈に於て今神の御前に我坐せりとの自覚がなければならぬ。此の自覚は謂ふ迄もなく信仰のある人にして始めて起るのである。若し我々が今生ける神の前にありと云ふ神の實在の感がないならば、或は暗

示作用による効果はあつても、眞実神の靈化をうける事は困難である。故に神が眞実に実在する事を信する人にして、始めて靈交の眞果を結ぶ事が出来る。

右に述べる如く靈交の第一條件は神の現在の感であるが、第二に必要な事は神の人格の内容を思ひ浮べる事である。それは單に神といふ時はつかみ所がないといふ様な感じがするからである。人格には大体二つの方面がある。それは力と品性である。

第一 神の力は絶対にして神は力の根源にまします。神の力は絶対なるが故に神の力に越ゆる力なく、神に敵する事を得る力も亦ない。神の力は種々の方面に顯れてゐるが、其の最大なるものは生命の力である。生命の力は何人と雖も之を認むるに容易にして、之以上の神祕な力をもつものは、我々の眼前にみる事が出来ぬ。

第二 神の品性は教祖の品性に於て考へるべきである。病人に親切な教祖、罪人に同情深き教祖、教祖傳の一々の光景は教祖の品性を雄辯に物語ると共に、神の愛の品性を示してゐる。

之を要するに、神の人格の内容を考へる時は、我等はもつと実感的に神の実在を我が眼前に感せしむる事が出来る。

我々は靈交を爲す爲めの積極的方面の條件を述べたが、更にそれと同時に靈交の障害となるものを見出さなければならぬ。之にも二つの場合がある。即ち其の一は邪念、邪慾、世俗

的の考へが靈交を妨げ、他は祈禱にふさはしからぬ氣分又は身体の具合である。

第一 我々は勿論世俗的の諸種の仕事に携はるものなるが故に、動もすれば世俗的の考へが我々の心の注意を奪ひ易い。然し我々が暫くでもこれ等のものを忘れ、神との靈交を得てこそ我々の思想も活動も淨められる。故に我々は暫くでも邪念、邪慾、世俗的の事を忘れて靈交に入る事が、我々の品性の修養上必要である。其の爲めには練習を要する。練習によつて邪念、邪慾に打ち克つ習慣がつけば、神との靈交は充分出来る様になる。

第二 我々は心ゆくばかり祈禱の出来る時もあれば、然らざる時もある。それは身体の疲れた時、氣持の悪い時等である。然し之も訓練によつて充分打ち克つ事が出来る筈である。之を要するに靈交の障害となるものは訓練によつて除く事が出来る。多くの宗教家は之を実験してゐる。我々は日頃祈禱のよき訓練をして、靈交の眞果を味はねばならぬ。清き偉大なる生涯は皆此の靈交の賜である。我等は神の淨き感化をうける様、日頃祈禱の修養をせねばならない。

之を要するに「自分さへよくば人はどうなつてもかまはん」と言ふ心を「我が身どうなつても人をたすける」と云ふ心に入れかへ教祖をひながたとして之を実行し、日々常に聖典を拜読し、お勤を奉仕させて頂き、もつて教祖の人格目指して日夜たゆとぶ事なく進む所に、我々は理想の人に至る事が出来る。之泥海古記の示す救極観である。

四、運命觀

苦痛の存在

吾人は前章に於て泥海古記の示す救極觀を明かにしたが、然らば泥海古記は運命を如何に觀るか、即ち泥海古記の示す運命觀を明かにすることが本章の目的である。

人生に存在する苦痛といふものの解決は、人間の世の中に於て一番解決の困難なものである。人間生活に於ては煩惱が絶えない。然らば人生に於ける苦痛の存在は抑々如何なる意味を有するのであらうか。

翻つて人間發達の歴史を考へてみるに、人間の進歩は苦痛の伴ふことによつて大いに刺戟をうけ發達してゐる。之に反して何の苦痛もない所には生存の力を失ひ、消滅の状態に陥つてゐる。例へば退化する所の人種として殆んで生存競争に敗北する人種を調べてみるに、大抵皆比較的苦痛のなかつた人種である。精神的目的に苦痛を持つ民族は必ず發達してゐる。此の事は個人に就いても同じことである。即ち悲痛の反対たる人生の幸福、而かも其の最大幸福は人格の完成にある。即ち立派な品性を築き上げる事にある。泥海古記の示す人類最後の幸福なる大婦結とも稱せらるべき甘露台建設といふことも畢竟するに立派に磨かれた品性の集團たる社会を建設すると云ふ事になる。故に人格の完成は人生最高の目的であり、人生最高の幸福である。今品性を練磨せんとすれば、困難なくして品性の練磨はおぼつかない。

教祖は此の事を「身上事情は蓮の花」と示されてゐる。即ち困難があつてこそ品性も練られ、人格も高められる。故に偉大なる人格は困難を利用した人である。即ち大品性は常に不幸困難を利用した人物に與へられる。要するに不幸困難を利用することによつて、人間は進歩して来たのである。

とは云ふものの、世の中には實際悪人榮えて善人衰へ、不義なる人跋扈して善人が苦しめられるといふ風の現象の存在するのは何故か。即ち不義者が榮達して義人が困窮してゐるのは何故か。之を今少し深く考へてみると、少くとも此の現世に於て悪人が必ずしも罪せられず、善人必ずしも報いられるとは限らないと云ふ事は、此の世界は偉大なる品性の修練場としては極めて都合のよい事であると言はなければならぬ。何故ならば不義不正が必ず現世に於て罪せられるとすれば、罪をうける事が恐ろしさに善を行ふものが多くなるだらう。斯うした意味に於て出来た善人は、極めて安價なる品性の善人であらねばならぬ。何となれば正しき事の爲めに正しきを求め、善の爲めに善を求めると云ふのではなくして、榮達といふ物質的報酬を得たさに義を求め、善を求めからである。之では善人、義人としての價値がない。即ち正しい事に褒美があり、不義な事には罪があるとすれば、それを得る爲めに善を爲し、それが恐ろしさに不義を去る結果となるからである。教祖在世中に於て建設される筈であつた甘露台が、將來の樂しみとして残つたのも、要するに此の意味である。故に少くと

不義者の榮
達と義人の
困窮

も現世では賞罰がしかく嚴正でないから、賞罰の觀念を離れて義を求むる立派な品性を造るに都合がよい。義人はたとへ困窮しても尙正義の爲め、神の御旨だと信じ、断乎として正義を行ふ所に義人の偉大さがある。人は当然受くべき苦痛の爲めに苦しむ事もあるが、義人の苦しみは正しき事を行ひ、社会を益する爲めに善事を行ひ、それが爲めに却つて苦痛をうけるのであつて、其処に偉大なる品性があるのである。要するに物質的に恵まれませんとも、否却つて苦痛を受けても正義公道を勇ましく進む所に義人の本領があるのであつて、現世の賞罰が嚴正でない所が却つて賞罰の誘惑がなくてよいのである。

之を要するに、人間の苦痛は、苦痛に余儀なくされるとそれから逃れる爲めに人が種々工夫を凝らす、斯くて苦痛は進歩の母となる。人生に苦痛がなければ、人の生活は精神的にも物質的にも今日の發達を見る事が出来なかつたであらうと思ふ時、苦痛には確かに意義があると考へざるを得ない。

原因結果の法則から言へば、人生の苦痛の大部分は原因があり結果があるのであらうが、何人とも前の世と言ふものを知る事が出来ない。故に原因結果の法則のみによつて苦痛を解釈する者は、單なる論理をもつて人生にあてはめんとするものに過ぎない。故に原因結果は人生の狭い営みのみに於て之を確かであると肯定する事が出来るが、之は余りにも智に偏した考へ方である。何故ならば、人生には智のみではなく、感情といふものがある。否感情だ

けで生きてゐる人さへあるではないか。故に智のみによつて人生を解釈せんとするのは偏つた見方である。故に苦病の問題は、之を人格と云ふ方面から考へてみる必要がある。

泥海古記に於ては、人生の苦痛は其の罪惡が基礎であると示してゐる。故に罪惡を談するなら人生の苦痛、即ち人生に明快なる解決を得るのである。泥海古記の示す罪惡は、神の御心に叶はぬ行爲は總べて罪惡である。凡そ人生は良心が基礎となつて築かれてゐるのであるが、其の一番大きな源は神である。人間は神の子と云ふのは、人間には良心と同時に自由意志を與へられてゐる事を意味する。即ち人間は自由の存在者である。自由の存在者なるが故に智、情、意の何でも、此の地上に於て行ふ事が出来るのであるが、それらを統一する爲めに良心といふものが與へられてゐる。所が良心に背いて自由意志を濫用するから罪惡になる、即ち神が自由と共に良心を與へられたと云ふ事は、良心をして罪惡への道を防がしめる爲めである。良心は罪惡を犯した犯人には遠慮なく之を呵責する。其処で自由權の濫用は犯人にとつて不幸である事が自ら體驗されて来る訳である。

泥海古記の観点よりすれば、社会の不都合は個人の罪惡に源を發する。故に神に先づ人間が悔い改めるならば、社会には段々本當の道が行はれる様になると云ふのが、泥海古記の主張である。人道的に改革を行はんとしても、人間の内に罪惡があれば、矛盾のものを人間が包んでゐるから、利己的な改悔は行はれるかも知れないが、それは決して本當の改悔では

なくして、互に相争ふ根源となるに過ぎない。故に本当の進歩を素たさんとするならば、人間が中心から非を意識し、悔い改め、互の目標に向つて進む様に社会に感化を興へる事が、一番至当な行き方である。所が人がどんなに非を悔いても、自らの非を認めても、自力によつて自らを改造する事は不可能な事柄である。何故ならば、唯立派な例を挙げただけで其の通りに立派になるものならば、教育の結果は素晴らしい多くの聖人君子を出してをらなければならぬ筈である。然るに支那の如きは、孔子の廟は至る所に祀られ、孔孟の教は國を挙げた靡き渡つてゐるにも拘らず、不道德は依然として影を絶たない。故に單に理想を掲げたのみでは人間は駄目だと云ふことになる。我々個人にしても、それは悪であると云ふ事を明かに承知してゐながらも、尙且つ之に立ち向ふことは非常に困難ではないか。これによつて觀れば、人々は自力を以つて自己を改造する事は不可能だと云ふの外はない。即ち神の御力によらなければ自己を改造する事は出来ない。

泥海古記は、人間を改造するのではなくして、新しき創造を行ふことを示す。人間が新しく初めから更生する道を授ける。之が泥海古記の主張である。第一歩から出直せと命じてゐる。社会が腐敗紊亂してゐるのをそのまま改造すると云ふのではなくして、此処に新創造の力を輸入して第一歩からやり直せと云ふのが、泥海古記の主張である。然り、非常に紊亂墮落した社会を改革するものは、改造に非ずして新創造の力である。新創造の力より以外に之

を改革するものは断じてない。

然らば此の新創造は如何にして行はれるか、それは教祖に対する信仰により、贖罪の事実が認められて、教祖を之に結ぶ時に社会と云ふものが始めて救はれる。道徳を根本として徐々に人間の社会は進歩して行くが、其の背後には常に此の信仰力、強い自覚がなければならぬ。若し然らずして道徳の根源を知らずに居るならば、人間は唯盲目的に導かれる所に引かれて行くに過ぎない。故に根源を知つて自覚して立つ者が、社会の爲めに一番進歩の中心に立ちいる人格だと認められなければならない。斯くて人間は創造的に進化して行くのである。之を要するに泥海古記より勸れば、人の世に苦痛の存在する事は、人生をして大なる意義をあたらしむるものである。即ち苦痛の存在によつて人間は進歩し發達するものであつて、若し人の世に苦痛なかりせば、或は人間は今日の如き發達を見る事が出来なかつたかも知れない。故に苦痛の存在は人生をして益々意義あたらしむるものであり、苦痛の存在によつて人生に意義が存する。

本教に於ては、此の泥海古記の主張する所を因縁の教理によつて之を詳細に示してゐる。

因縁とは因縁因果の法則に非ずして、過去の生活の回想である。即ち人間の生命は大いなる生命の流れであるが、之に時間点を挿入して「前生の因縁」と「なす因縁」とに大別する。現在の自己が前生に於ける生活を回想する場合に、之を「前生の因縁」と言ひ、現在の自己

が十五歳より以来の生活を回想する場合に、之を「なす因縁」と言ふ。言はゞ、「前生の因縁」とは遺傳的のものであり、従つて回想するとしても之は自分に覚えのない事である。然し「なす因縁」は十五歳から以後の事であるから、回想すると身に覚えがある筈である。従つて自己が過去に於て如何なる生活をなしたかを自覚する事を「因縁の自覚」と言ひ、過去の生活の誤れる事を自覚して、教祖の教へられた通り「人を助ける心」に入れかへて之を実行する事を「因縁きりかへ」と云ふ。要するに「因縁きりかへ」とは、心の方向轉換即ち「思ひかへる」事である。

過去の生活を回想した場合に、過去の生活が誤つてゐた場合に之を「悪因縁」と言ひ、過去の生活が正しく善である場合に之を「白因縁」と言ふ。

之を要するに因縁とは「過去の生活の回想」にして、之を時間的に区分して「前生の因縁、なす因縁」と云ひ、之を善悪に区分して「白因縁、悪因縁」と言ふ。

前述する如く因縁は過去の生活の回想なるにより、其の責任は自己にある。故に「因縁なら通らにやならん、通さにやならん、通つて果すが一つの理」とも亦「ならうまいと思ふてもなつて来るのが因縁、ならうと思ふてもならぬが因縁」と云ふ事になる。即ち過去の生活の反映が今日の自己の生活であり、それは神が道徳法によつて人間を支配せらるゝからである。即ち「かしの、かりもの」であるから、過去の生活が現在の生活に反映するのであつ

て、換言すれば因縁なるものは我々の運命を決定する。

然らば此の運命は到底打開出来ぬものであらうか。茲に「因縁を自覚」して「因縁をきりかへる」ならば之を打解する事が出来る。即ち人間の苦痛（身上事情）なるものは、過去の悪しき生活を反省させる爲めに神が與へられるものなるが故に、過去の生活を「さんげ」し、神の思召の通りに心を入れかへて願へば、神が此の運命を打開して下さるのである。「かうなり来るも先の世の定まり事と諦め」たり「思へば」此の身は先の世で如何なる事の罪せしぞ、さても「味氣なの浮世や」と呷つ事はいらぬ。

「さんげ」とは自己の罪過を神の御前に表白する事であるが、なす因縁の場合はそれでありとして、前生の因縁の場合には表白するにも身に覚えがない。即ち遺傳的のものであるからである。然らば如何にして前生の因縁を「さんげ」するか。神は「たんのふは前生因縁のさんげとなる」と教へられてゐる。たんのふとは何か。苦しみを樂しみとして通る事である。即ち「成つて来るのは天の理、天の理を樂しめ」と教へられてゐる。即ち如何なる苦痛も神から與へられたものとして喜んで之を受けさして頂く所に、前生の因縁を「さんげ」する事が出来る。

上述する如く我々が「因縁を自覚」し、過去の生活を「さんげ」し、人を助ける心と入れ換へる即ち「因縁をきりかへ」て、如何なる苦痛も皆神の御旨であると喜んでうけさせて頂

く即ち「たんのふ」して通る事を「因縁なつしよ」と云ふ。要するに眞の人間生活（第二章第七節）が「因縁なつしよの生活」である。

之を要するに本教の運命観は、運命とは如何ともなし難きものに非ずして、運命の彼方に光明を認むる事が出来る。即ち救ひが存する。之泥海古記の示す運命観に他ならない。

五、征病観

前章に於て泥海古記の示す運命観を明かにし、人生に於ける苦痛の意義を明かにしたが、中に就き特に病に関するものを明かにする事が本章の目的である。

人生に存在する病なるものは、人間の一大苦痛である。みかぐら歌にも「病むほどつらい事はない」と示されてゐるが、病は死を聯想させるが爲めに、人間の一大恐怖となる。泥海古記は人間に病といふものはないと断言し、然らば病とは何かと言へば、神の意見であると記してゐる。今之を具体的に述べるならば次の通りである。

人間は衣食住について不自由だと感ずる時は「ほしい」といふ心が生ずる。今若し「ほしい」といふ心が埃となつて「非道のほしい」となつた場合はめくらとなつて現れる。其の最大なるものは盲目にして、眼病一切は目の守護せらるゝ「くにとこたちの命」の御意見である。何故に「くにとこたちの命」が「ほしい」の埃に対して御意見せらるゝかと言へば「く

にとこたちの命」の性質たる正義には公正が包まれてゐるから、心眼の開かぬ知足安分を忘れた「ほしい」の埃に対して目に意見し給ふ。故に知足安分は人間にとつて必要欠くべからざるものである。此処に眞の平等が存する。

人間は「すたるもの」ををしむのはよいが、それが「をしい」の埃即ち「出しをしみ、身をしみ、骨をしみ」となつた場合は、熱病となつて現れる。其の最大なるものは肺ろうにして、熱病一切は「ぬくみ」の守護をせらるゝ「おもたりの命」の意見である。何故に「おもたりの命」が「をしい」の埃に対して意見せらるゝかと言へば「おもたりの命」の性徳たる仁愛には「親心、慈悲、なさけ」と云ふものが含まれてゐるから「ぬくみ」即ち「慈悲、なさけ」を忘れた「をしい」の埃に対して意見し給ひ、それが熱病となる。即ち人間は人に対して「温かさ、慈悲、なさけ、親心」を忘れてはならぬ。

人に対して「温かさ」が必要であるから「温かさ」を持つてゐなければならぬが、それが「身びいき」とか「我が子と人の子のへだて」をすると云ふ事は、眞の「温かさではない。之を「かわいい」の埃といふ。此の埃は飲食消化器、排泄等の病として現れる。其の最大なるものは「かく」であるが、上述の病一切は「飲み食ひ出入り」の守護せらるゝ「くもよみの命」の意見である。何故に「くもよみの命」が「かわいい」埃に対して意見し給ふかと云へば「くもよみの命」の性徳たる保養は人類全般に行き渡るべきであるが、自分を可愛がり、自

分の子と人の子と隔てすると云ふ事は、保養の誤用であるからである。故に人間は偏つた愛即ち溺愛を慎しむべきである。

人間は動もすれば人の悪口、中傷、嘲笑、誹謗等をし勝ちであるが、之を「にくい」の埃と言ふ。要するに自己を許して他を許さぬものを「にくい」の埃と云ふ。此の埃は耳鼻咽喉科の病となつて現れ、其の最大なるものは「おし、つんぼ」にして、それは「息ふきわけ」の守護せらるゝ「かしこねへの命」の意見である。何故に「かしこねへの命」が「にくい」の埃に對して意見し給ふかと言へば「かしこねへの命」の性徳たる活動力を阻止するものは、己を許して人を許さず、之を排斥する「にくい」の埃であるからである。宜しく人は己を許すより以上に他を許すべきである。

人は腹立ちを忘れぬ時は、怨恨、猜疑、嫉妬、りんき等となる。之を「うらみ」の埃と云ふ。此の埃は皮膚病となつて現れ、其の最大なるものは「らい病」であるが、それは「皮つなぎ」の守護せらるゝ「くにさづちいの命」の意見である。何故に「くにさづちいの命」が「うらみ」の埃に對して意見し給ふかと云へば「くにさづちいの命」の性徳たる比和即ち「あはせる、従順」を破るものは「うらみ」の埃であるからである。宜しく人は腹立ちを忘れねばならぬ。

然らば腹立ちとは何か。癩癩、忿怒等即ち寛容を忘れたものを「はらだち」と云ふ。此の

埃は骨の病として現れ、其の最大なるものは「いざり」であるが、それは「骨つっぱり」の守護せらるゝ「つきよみの命」の意見である。何故に「つきよみの命」が「はらだち」の埃に対して意見し給ふかと言へば「つきよみの命」の性徳たる建設を濫用するものは「はらだち」の埃であるからである。故に人は宜しく寛容の態度を持すべきである。

人は動もすれば、自慢、我慢、我慢、我慢等をもつものであるが之を「こうまん」の埃と云ふ。此の埃は筋（運動神経）の病となつて現れ、其の最大なるものは「かにかたかい」であるが、それは「をふとのべへの命」の意見である。何故に「をふとのべへの命」が「こうまん」の埃に対して意見し給ふかと言へば「大とのべへの命」の性徳たる力を過信するものは「こうまん」の埃であるからである。即ち自己の力を過信する高慢、自慢、我慢となるのであるから、人を眼下に見下さず、神の子として尊重すべきは言ふを俟たぬ。

貪慾、強慾等を「よく」の埃と云ふ。此の埃は肛門科の病となつて現れ、其の最大なるものは中風であるが、それは「たいしよく天の命」の意見である。何故に「たいしよく天の命」が「よく」の埃に対して意見し給ふかと言へば「大しよく天の命」の性徳は切断であるから、豊富と充足とをとり違へた「よく」に対して切断を命じ給ふ。即ち中風は半身不随となり、肛門科は主として痔疾であるが、何れも其の方面の神経が切断するのである。

性慾の濫用は人間に最も多いが、男子の場合は「いざなぎの命」の意見として性病と現れ、

女子の場合は「いざなみの命」の意見として婦人病と現れる。

之を要するに、病は生存慾の濫用又は誤用に対する神の意見にして、換言すれば神が涙と共に打ち奮ひ給ふ愛の鞭に他ならない。故に心を入れかへて神に願へば助けられるのである。

(第二章第二節参照) 故に、我等は身上を契機として人格内容の充実に志すべきである。

六、人 生 観

既に述べた如く人間の人格練磨の爲めに人生に苦痛が存在し、此の苦痛を與へられる爲めに人間は反省する機会を與へられる。然らば泥海古記は人生を如何に観るか。即ち泥海古記の示す人生観を明かにする事が本章の目的である。

泥海古記の示す宇宙の内容は道徳的である。即ち宇宙は道徳的形式を與へられてゐる。其の一例を挙げて云へば、萬有は進化しつゝあるものであるが、進化は総べて共存共榮の目的の下に、相互扶助の精神に基づいて行はれてゐる。相互扶助の精神は社会生活の核心を爲すものである。故に宇宙は神を中心とする家庭にして、神は愛をもつて之等のものを結び給ふてゐる。即ち宇宙は道徳的形式を與へられてゐる。故に人間の道徳生活は、神を中心とするものでなければならぬ。之を「かしの、かりもの」の教理に於て示してゐる。

上述する所によつて明かなる如く、道徳なるものは神より出でたものであつて、人間相互

の便宜から拵へた約束事ではない。聖賢達は良心に忠実なる人々であるが、彼等は道は決して人と人との關係に極限するものであるとは唱へてゐない。道は天に起るとは聖賢達の唱へてゐる所である。之を例へて云へば、人間は道に従ふ事を好まず、願はくば道を破りたいとの低い自我の願ひによつて多く行動するが、人の良心は之を制止して理想に憧れる。此の二つの矛盾が存するにも拘らず、種々の關係から人の良心の儘に人生が赴かねばならぬ様に余儀なくされてゐるのである。それは人生は道德的に支配されてゐるからである。

要するに信仰によらなければ道德の実行はむづかしい。それは恰も一本の木に譬へて言へば、宗教は地下に張る根であり、道德は地上に伸びる幹枝である。故に道德的修養は信仰なくとも出来ると云ふ考へは間違ひである。悪いことをしなければよいではないかと言つても、惡に対する見解が誤つてゐては何にもならない。信仰によれば道德律は神の命令であると信じ、之に反く事は罪惡であり、之を誤れば過である。

然らば罪惡若しくは過の責任を帯ぶるものは誰か。即ち人格である。此の故に人格の高きものは罪惡を自覺する事深く、人格の低きものは罪惡を自覺する事亦尠い。故に人格が高ければ高いだけ罪惡を自覺する事深く、之より救はるゝ事を祈るに至るのである。

神は惡を造り給はなかつたが、人間の品性練磨の爲めに誘惑の存在を許し給ふた。此処に人間の自由意志が誘惑に打ち負かされ、或は之を濫用し、或は之を誤用するに至る。自由意

志が何故斯かる間違ひを起すかと云へば、人間の生存慾—生きんとする爲めの熾烈なる慾望が與へられてゐるからである。即ち良心が善惡を判断し、善に向つて躍進することを命ずるにも拘らず、生存慾が誘惑に打ち負かされ、自由意志は生存慾の命ずるまゝに狂奔せんとするが爲めに、之を抑制せんとして良心が活動する。之が苦悶の状態である。此処に生存慾に打ち克つて良心の命ずる所に従へばそれが善となり、生存慾の命ずる所に従へば惡となり、生存慾が善の如く之を僞る時は埃となる。斯くて人生の事実なるものは善惡の闘争場裡である。さりながら今一步を進めて何故に善惡の闘争が行はるゝかと言へば、善に最後の勝利を與へしむるが爲めである。さりながら善に最後の勝利を得しむるが爲めには、之を未末に求めなくてはならぬ。現世に於ては到底之を望む事が出来ない。何となれば現世は矛盾の世であるからである。即ち甘露台世界に於て始めて善が最後の勝利を與へられる。斯く考ふる時、人生なるものは未末生活への準備にして、品性練磨の道場である。されば吾人は常に品性の練磨に志さなければならぬ。

既に述べた如く人格は神によつて與へられたのであるから、吾人は信仰に基づいてこそ人格が向上する。そののみならず道德の背面には神がましますのであるから、吾人は信仰に基づいてこそ善を実行する事が出来る。信仰に基づくかぬ時は善惡の標準が定まらぬ。即ち神の思召に叶ふものはそれが善となり、神の思召に叶はぬものは惡であるからである。之を教祖

の啓示に基づいて云へば、甘露台建設を目標とし、之に適合するものは善であるが、然らざるものは悪である。故に吾人は甘露台建設を目標として善悪を判断し、甘露台建設の爲めに自由意志を行使せねばならぬ。されば吾人は甘露台建設に全力を傾倒しなければならぬ。之「人間のよふきゆさんを見て神も共に楽しむ」と仰せられし、神の御旨に答へ奉る所以である。之を要するに泥海古記の人生觀は、未末生活への準備、即ち人格練磨の道場に他ならないのである。

七、人間生活

人生なるものは未末生活への準備、即ち人格練磨の道場なりとは前章に示す所であるが、然らば此の立場に於て人間は如何なる生活を爲すべきか。人間の眞の生活如何。之を明示する事が本章の目的である。

既に述べた如く我々の理想の人は教祖にまします。故に教祖を目指して進む事こそ人間の眞生活でなければならぬ。之を換言すれば神の至聖性目指して進む生活こそ、眞の人間生活である。

今此の神の至聖性目指して進む生活を爲さんとする時は、常に助け一條の精神をもつと共に之を實行し、日々常に聖典を拜読し、併せてお勤を奉仕させて頂くを必要とするといふ事

感謝

も亦既に明かにした所であるが、お勤は之を學的に云へば祈禱の形式にして、祈禱には第一に感謝、第二に讚美、第三に懺悔、第四に祈願、此の四つの重大な要素を含んでゐる。而して此の四つのもは人間の実生活に於て最も重要なものであり、又人間生活に於てはかゝる事が必ず起らざるを得ないのである。故に祈りの生活が眞の人間生活であり、之を「勤め一條の生活」とも「勤め一條」とも云ふ。故に感謝、讚美、懺悔、祈願の四つのもは人間生活の四要素であり、祈りの生活―勤め一條こそ人間の眞生活である。今左に之を少し詳述することとする。

農家の人が自ら天地の恩を考へざるを得なくなる如く、総べてのものの衣食住はもとより現在の境遇から思ひを廻らせば神の存在を信じざるを得なくなる。神の存在を信する事が出来るならば、更に進んで精神上の問題を考へ、第一は自ら進んで神を信じてゐると意識する時代から次第に經驗を経、信仰が進むに従つて神が事々に導き給ふと云ふ絶対服従の境地に到達する。此の境地に於ては、悉くが自分の爲めに計画されてゐる様に感じ、世界が自分自らのものであるかの如く思はれて来る。斯くて神に服従する心即ち「理にすなを」の心でたつたならば、自ら神に対して有難いといふ氣が起り、又魂の方から云へば教祖が自分を導き給ひつゝあるといふ事がわかり、其処で思はず神に対して又教祖の事業に対して心から感激し、感謝の念を発する事が祈りの第一である。之が生活に現れて「ひのきしん」となり「つくし

運び」となり「たんのふ」となる。

人生の組織を觀察してみるに、神の計画の遺憾のない事は、人類にとつて至れり盡せりの手段が用意されてゐる事を知る事が出来る。此の事がわかるならば神の攝理に対し感激すると同時に、讚美せずにはをられなくなる。感謝が起れば讚美も亦伴ふて起る事は当然である。神の智慧に本當の喜びを感じ、之を思はず讚美するのは自然に起る行動である。之が生活に現れて「陽氣づとめ」となる。

過去の生活と攝理によつて神が人に要求し給ふ生活との間に懸隔のある事、又斯かる攝理に導かれて自分自身の示す誤つた道に入つてゐた事を知るならば、攝理の道にかへるや否や以前の生活を省みて心から悲しみ、神の御前に心から悔やむのが本當である。完全なる神の攝理に帰すると同時に、人々は自己を頼んでたてた生活が誤りであつた事を必ず悔ゆるであらう。之を神の御前に表白する事を懺悔即ち「さんげ」と云ふ。 んげのんり、解たれ。

人間の生活には困ると云ふ問題が起つて来る。人が苦しむ困ると云ふのは、人の人格品性の問題である。何かの問題に當つて困ると云ふのは、人生は倫理的だとはうけとれない。普通の人には此の意味がわからぬかも知れないが、苟くも神が此の世を支配し、神のまに／＼此の世界が進んで行く事を認める人にとつて、此の意味は明白であらう。即ち我々が行き詰つた、困つたといふ事は、自分の現在の品性の立場で困つたのであり、行き詰つたのである。

懺悔

讚美

懺悔

懺悔

懺悔

懺悔

懺悔

懺悔

神の御心を
神の御心を

神の御心を
神の御心を

の力が最高の勝利であるとの信念から之を許す事にもなり、或は之を氣にもとめない事にもなる。神の支配を信すれば他の人に対する態度も變つて来る。斯くて此の生活が即ち絶えざる平和の生活であり、神の子としての眞生活である。

神の御心を
神の御心を

天地万物悉皆自分の爲めに出まてゐるものであるとの信念をもち、又性善の良心が神に導かれてゐる事を信する人は、どうしても彼は小人だが己は君子だと云ふ様な態度になれない。

神の御心を
神の御心を

それは自分が神から救はれて、恩寵の下に生活してゐるとの意識をもちながら、他の一方には自分自身が尊いものであるといふ一見矛盾したかの如く見ゆる態度で人に対する事が出来ぬからであり、之が眞の平等の感である。此の人にして眞に神の至聖性に向つて突進する事が出来る。之が生活に現れて傳道となる。我々が神を拜む事によつて、神の聖と愛とが我々の人格に影響して、人間は益々聖くなり愛を増して来る。一言にして言へば普通の生活から眞の生活に入れば、段々其の人が變化せずにはゐない、そして自分の生活が本當に喜ばしきものであり、平和な生活である事をしみんと悟れる様になるのである。斯うした神の至聖性即ち教祖を直指して、自己の人格を向上せしめて行く生活が眞の人間生活であるとは、泥海古記の示す所である。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

神の御心を
神の御心を

之を要するに良心の呵責なき生活、即ち「陽氣暮し」こそ眞の人間生活に他ならない。而して此処に眞の自由がある。

第三章 人間の將來

人間は何処に治まるべきか。泥海古記の示す其の解決を明示し、之を基礎として天理教の使命を明かにする事が本章の目的である。

一、生 死 観

人が死ねばどうなるか。此の問題は人類のもつ大きな謎である。人間が今日生きてゐると云ふ事は、必ず死が訪れると事ふ事である。死は悪魔だと死を恐れるのは人間の通有性であるが、泥海古記は之を如何に解決してゐるか。之を明示するのが本章の目的である。

人が死ねばどうなるか。泥海古記は之に答へて、人の死とは古い着物を脱ぎすてる様なもの、即ち肉体は壞れ、靈魂は肉体と別れて永久に生きると示す。靈魂不滅は学的に種々なる方面から立證せられてゐるが、教祖は死者の靈魂は神が抱きかゝへてゐると示された。即ち此の世界を支配し守護し給ふ神は、愛にして善なる神、即ち親神にまします。人間は現在親神の恵みの中に生きてゐる。而かも此の世界に於て神の最も愛護し給ふものは人の靈魂である。今神の愛の中にある我等の靈魂が、五十年や六十年で全く無に帰するとは考へられない。何となれば神は永恒の存在である。永恒の存在者たる神が最大の愛を注ぐ人の靈魂が、水の

泡の如く現れては消えて了ふものとは到底考へられない。即ち靈魂は肉体の死と共に終るものではない。之を「形は消えても理は残る」と教へられてゐる。此の靈魂不滅即ち人格の永存と云ふ事は、人生生活に極めて有意義な信仰である。

第一 人格永存の信仰は、人生に一個の嚴肅なる感じを與へるものである。泥海古記は此の世を仮の世だとか、夢の世だとか主張しない。此の世の生活も未耒永久に続く生活の一部だと主張してゐる。故に「旅の恥はかきすて」と云ふ風な。此の現在を不眞面目に考へない。否、此の世は永遠に続く生活の一部と考ふるが故に、人生の事は何事をやるにも不朽の考へ、遠大の希望をもつて進むのである。故に不死の信仰は、人生に一種云ふべからざる嚴肅の感じを齎らすものである。

第二 人格の永存を信する事は、個人の價値を無限に高くする。即ち各個の人格を不朽の存在者と見るが故に、眞実の尊敬を拂ふ事となる。こは單に社会的地位のある人へのみ對してではなく、如何なる地位の人、如何なる種類の人、如何なる階級の人、男たると女たると老人たると子供たるとを問はない。苟くも人格者たる以上は之を尊敬する。不滅の存在者として之に敬意を拂ふ。眞実の民主主義も亦人格の不朽的存在たる事を信じてこそ実行出来る。弱者の友となる救済事業も亦然り。徹底した救済事業は、弱者の不朽的存在者たる事を信じてこそ出来る事である。要するに人格永存の信仰は、個人の價値を無限に高くするものであ

第三 靈魂不滅の信仰をもつ者は死の恐怖を去り、希望をもつて死に臨む事が出来る。人はいつ何処でどうして死ぬかわからぬ。老いて死ぬやら、若くして世を去るやら。病院で死ぬやら、天災で死ぬやら、日本で死ぬやら、外國で死ぬやら、其の辺の事は解らぬ。然し氣味の悪い程明確に解つてゐるのは、我々は一度死ぬと云ふ事である。誰かの歌に「死ぬるとは人の事だと思つたに、おのが死ぬとはこいつたまらぬ」成る程自分も死ぬのかと思ふと心細くなつて、がた／＼震へて来る。人が死んだといふことを話し合ふことは平氣であるが、自分の死を解決することはなか／＼困難である。然るに神を信じ、靈魂の不滅を信じて此の世を去る人の有様をみると、実に偉大な感にうたれる。即ち靈魂不滅の信仰によらなければ、死の恐怖を去ることは出来ない。即ち靈魂不滅の信仰によつてこそ死を解決する事が出来る。之を要するに泥海古記は人類の未來に對して不死の信仰を打ち樹てるものである。之を學的に云へば、生命の目的を的確に意識し、それを實現せしむることこそ、泥海古記の眞意義である。之を具體的に云へば、人格を發見して理想の人に至る事であり、教祖の人格が我々の眼前に之を示してゐる。斯くて泥海古記が人類に提示する問題は、人類の常に要求する所を明快に解決するものである。

以上吾人は全般的に生死を語つたが、個人の生死を明かにするならば、素より個人の靈魂

神の魂

魂を宿る事

魂を宿る事

魂を宿る事

魂を宿る事

魂を宿る事

魂を宿る事

魂を宿る事

魂を宿る事

魂を宿る事

魂を宿る事

魂を宿る事

も亦神より分派支流せしものに相違なく、それが何時人間の肉体に宿るかと言へば受精と同時
 時に宿るのであつて、寧ろ魂を宿り込める事によつて受胎する。此の事を「宿しこむのも月
 日」と示されてゐる。而して「夫婦の心を定規として子供を興へる」と教へられてゐる如く、
 夫婦のもつ品性に相應した品性をもつ子供が興へられる。然らば其の子供のもつ靈魂は何処
 より来りしかと云へば、神の攝理によつて與へられるのであるから、或は親の靈魂が宿る事
 もあり、或は次に示す如き場合もある。即ち教祖が黒疱瘡に病む小兒を助ける爲めに二人の
 子供と御自分の生命とを差し出されたが、差し上げられた二人の子供の生命如何になつた
 かと云へば、泥海古記に、

其後に至りて我が子代りに差上げたる壽命は、一度に一人迎ひとりになり、又其の魂を宿
 し込み再度出産し、其の子を迎ひとりになりたり。此の事たるや後に神の御せなり。

と示してゐる。即ち個人の靈魂は生れかはり死にかはりして人間として生活するのであつて、
 個人の死は此の意味に於て出直しである。而して其の靈魂は同一家族として生れて来るか否
 かは神の攝理に属し、人間の窺知する事の出来ぬ事柄に属する。

上述する如く、個人の死は境遇の変遷にして、之を「古い着物をぬぎすて、新しい着物
 と着換へる様なもの」と示されてゐる。而かも着物には四季折々に変化があり、貴賤貧富に
 よつて相違する如く、其の人のもつ品性に相應した所に人の子として生を享けるのである。

孔子

ト云ハルル事ヲ

甘露台世界

二十の事

二十の事

エナ

ト云ハルル事ヲ

ト云ハルル事ヲ

ト云ハルル事ヲ

ト云ハルル事ヲ

甘露台の建設

甘露台実現の時期

41
37
14

之境遇の變遷を要する所以である。

二、未 来 観

人間が死ねば人格が永存する即ち靈魂は不滅なりとは前章に示す所であるが、然らば其の靈魂は何処にをさまるべきか。靈魂の歸着する所如何を明示する事が本章の目的である。

泥海古記は「人間の心をすましたる上は、病まず死なず弱りなき様の万づ助けを教へる」と記してゐるが、此の事は**不死の世界の実現**を意味する。而してそれは天より與へられる甘露が壽命藥となる。即ち甘露が靈糧となり、靈糧は親より心次第に渡される。即ち**教祖の御手**により、教祖の御心のまに／＼人間に渡される。此の事は教祖の御力によつて**不死の世界**が実現する事を意味する。而して此の世界は甘露台の建設成つて始めて実現する。故に此の世界を甘露台世界と云ふ。**教祖の再興**

甘露台世界は如何なる人によつて維持されるかと云へば、信仰と善行とを兼備する人即ち「まことの人」によつて維持される。故にまことの人を養成する事は之甘露台世界実現の準備にして、之を甘露台建設と云ふ。故に天理教徒の使命は甘露台建設に存する。

然らば甘露台世界は何時実現するかと言へば、甘露台が実現した曉に於て実現する。甘露台は何時実現するかと云へば、人間の心がすみきつた時、即ち人類がまことの人となつた時

に実現する。人類がまことの人となつた時、教祖の教は上流社会に通じ、或は外國に弘通し、甘露台勤を奉仕する「勤め人衆」も揃ふのであつて、斯くて人類待望の不死の世界が実現する。(参照おふでさき第九号一八一二三・第十号二九一三七)

然らば甘露台世界は何処を中心として実現するかと言へば、甘露台を中心として実現し、之を狭義に解すれば地場であり、廣義に解すれば日本である。

之を要するに人間の未耒生活は、人間の「ようきゆさん」の世界、之を学的に言へば神人交樂の世界にして、それは日本を中心として実現する。之泥海古記の示す未耒觀である。従つて此の世界の建設、即ち甘露台建設こそ天理教徒の使命である。

三、新世界の建設

吾人は前章に於て天理教徒の使命を明かにしたが、其の向ふ所は甘露台世界である。然らば如何にして此の理想社会を建設せんとするか。泥海古記の示す其の方法を明かにする事が本章の目的である。泥海古記は之を個人、家庭、社会の三方面より示してゐる。

泥海古記の示す人間創造の順序は、強者より賢者へ、賢者より善人即ち美人へと人格を完成する事を示してゐる。即ち泥海古記の示す所に従へば、人間は神によつて神の子として創造せられ、水中の住居から智慧の仕込み、智慧の仕込みから学問の仕込み、学問の仕込みか

甘露台世界
の中心

人間の創造

ら最後の仕込みへの進み、最後の仕込みは教祖を通じて行はれてゐる。教祖は智者、賢者に非ずして美しき人、即ち善人にまします。即ち教祖が善人にまします事は、泥海古記は智者に非ずして、善人が神の子の眞義なりと示すものである。

此処に注意すべき事は、人間の智慧によつて新しき人格を創造する事は出末ないと云ふ事である。即ち人間が進化の道程に於て、女猿が一匹残つたと泥海古記に示されてゐるが、猿は動物中に於て最も智慧を有するものとせられ、人間に於ては智慧は女は男に優る。而かも此の女猿はぐにさづちいの命の魂であると示してゐる。此の事は要するに、智慧は人間が物事を理解する爲めに必要なものである事を意味する。而かも「女さかしうして牛を賣り損ふ」と云ふ諺もある如く、人間は智慧のみに頼る時に世の中が不可解となる。結局迷つてしまふ而していざなみの命の魂たる教祖によつて救ひの道が示された事は、信仰によつて人間が育成される事を示す。即ち人間が神を信じ、神と人とが親子となつて團欒する所に、人格がますます向上するものなる事を意味する。要するに人間は智識によつても物事を理解し、信仰によつて神と交通し、意志によつて行ふべき所を行つてこそ人格が向上する。

之を要するに、智、情、意の円満なる發達こそ人格の向上にして、其の中心は信仰にある。之泥海古記の示す創造の順序に他ならない。故に人間の信仰生活によつて、人格向上を計るべきである。

泥海古記の示す創造の段階は、新生、聖化、神癒、再臨、即ち四重の御業の実現にして、
 之が形式は授訓カウツリである。

もとく人間には罪惡がある。八埃を祓へとは罪惡より救はれよ、即ち神の御旨に叶つた人間になれよと示すものである。神の御旨に叶はぬ時は、神は身上事情を通じて、我々の人格を練磨し給ふ。故に人格を向上する事が出来たならば、神は身上事情を助け給ふ。然しながら教祖の教が実現する迄は、人格向上の目標が定まらなかつた爲め、人間は迷ひに迷つた。此の迷ひを憐れみ給ひ、神は異教イコウを通じて人間を其の進むべき正しき道に導き給ふた。而してそれとは別個に医者藥を通じて、人間の身上を助ける事と遊ばされた。換言すれば、之等のものは教祖実現の準備であつたのである。

然しながら教祖の実現によつて之等のものは其の存在の必要がなくなつた。即ち教祖の教によつて救はれたものは、必ず行爲に変化を未たす筈である。之を新生といふ。行爲の変化は癒て性格に変化を與へる筈である。之を聖化と云ふ。斯くて神の御旨に叶ふ人間と爲り、神癒によつて身上事情から救はれ、教祖の御膝下に歸らせて頂けるとの確信が與へられる。之を再臨と云ふ。此の新生、聖化、神癒、再臨の四つのは、個々別々に独立するものでなくして、必ず相重るものであるから、之を四重の御業と云ふ。再臨の確信は授訓によつて與へられる。故に授訓は尊い末代の宝である。要するに授訓は人間が新しく創造せられたと

性格も変化
 一
 変化

の意義を示すものであるから、之を新生の形式と云ふ。然しながら人間は浅慕なものであるから、動もすれば又々罪惡を犯すに至る。罪惡を犯したものは、最早新生の意義を失つたものである。之を「授訓をおとす」と云ふ。

とは言ふものの人間は教祖の教へを信ずる事によつて必ず救はれると云ふ事を確信する事は非常にむづかしい。其処で、おびやゆるし、あくなんよけの守り、ほうそ守り或は「さづけ」等によつて此の事を示し給ふのである。之等のものは総べて神癒の形式であるが、之は教祖の教の權威即ち救ひの權威を如実に示すものである。

之を要するに人間の創造は、教祖の人格即ち美しき人を目標とし、授訓によつて之を爲し給ふ。之を換言すれば人間は神の子なりとの自覚を以つて生活してこそ、人間が新しく創造される。之を学的に言へば個性尊重が人格完成の出発点である。

家庭は父と母と子から成り立つ。而して此の三者の間には何等の区別があるのではなくして、差別があるのみである。即ち父と言ひ、母と言ひ子と言ふも等しく神の子に相違ない。故に男女は平等である。たゞ其の天職使命が異なるのみで、根本的に差別があるのではない。即ち平等の中に差別あり、差別の中に平等がある。教祖は之を「男松女松の隔てはない」と示されてゐる。故に人間は其の個性を尊重せねばならぬ。

然しながら父と母と子の存する限り、神より與へられた道、即ち法則がある。即ち家庭に

は家庭道德がある。家庭道德の中心は夫婦におくべきか、將親子の關係におくべきか。泥海古記は之を明示して夫婦におく。即ち神が最初「ぎ・み」二柱の神によつて夫婦を造つたと示してゐるが、親子を造つたとは示してゐない。夫婦は人倫の大本であると示してゐる。即ち夫婦があつて親子があり、親子があつて兄弟姉妹がある。故に家庭道德の中心は夫婦にある。夫婦を中心として家族が團欒する所に、家庭の平和があり、人間生活の楽しみがある。之を要するに泥海古記の示す新しき家庭建設の順序は夫婦にある。夫婦は實に人倫の大本である。

泥海古記の示す新しき家庭の建設は、一夫一婦の確立に存する。

泥海古記に従へば、人間の父親は「ぎ様」人間の母親は「み様」である。而して其の宿し込みは吐く息で男を、吸ふ息で女を宿し込んだと示されてゐる。凡そ呼吸は吐く息ばかりでもなければ、吸ふ息ばかりでもない。吐く息と吸ふ息とで呼吸である。呼吸によつて人間は生きてゐる。故に呼吸によつて人間が宿し込まれたとは、夫婦は一体なりと云ふ事を示す。換言すれば夫婦生活に人生の妙趣がある事を示し、男ばかりでも女ばかりでも人生は成立たない事を示す。即ち人間は夫婦生活を爲すべく造られたのである。而して二人宛宿し込まれたとは、一夫一婦が一体となつてこそ夫婦生活を全うすることが出来るが、一妻多夫、一夫多妻、蓄妾主義では健全なる家庭が成立たぬ事を示す。故に一夫一婦にして夫婦一体なる家

庭を建設する事が、新しき家庭の建設である。

一夫一婦は個性の尊重によつて保たれる。即ち夫は妻を神より與へられた只一人の妻と信じて之を愛し、妻は夫を神より與へられた只一人の夫なりと信じて之を敬する所に、一夫一婦が確立する。

さりながら、泥海古記の示す家庭道德の中心を夫婦におくと云ふ事は、單に夫婦生活さへ全ふすればそれでよいと云ふ事を意味するものではない。何故ならば夫婦あつて親子があり、親子があつて兄弟があるのであるから、一家は夫婦だけではない。故に夫婦があると云ふ事は、必ず家族があると云ふ事を意味し、家族があると云ふことは其処に道がある事を示し、夫婦を中心として一家が團欒してこそ人の世は楽しい事を示す。即ち泥海古記には、家族に病人がある場合、本人は固よりであるが、家族の者も共にさんびして、人を助ける心と入れかへて願へば、神はどんな守護もすると示され、教祖は又「五本の指一本噛んでも痛からう」と示されてゐる。此処に新しき家庭は實に楽しく平和な家庭である事が判然とする。之を要するに新しき家庭は、一夫一婦を中心とする家族の團欒によつて建設される。泥海古記は之を「人間もなむく」としてゐるは良き事なり」と示してゐる。

新しき世界は個人より家庭へ、家庭より社会へ及ばなければならぬが、教祖は更に「谷底せり上げ、高山きりくづし」と仰せられてゐる。此の事は海を山を以つて埋めて平均させ

ると云ふ意味ではない。それは弱者は強者の犠牲となつてゐるが、強者は弱者の犠牲となれと云ふ事を意味する。斯くて新しき世界の建設は、先づ社会の下積みとなつてゐるものを教ふに始まり、それを逐次に及ぼして行くにある。之即ち泥海古記の示す新世界建設の順序にして、肥のたすけの渡される事及び教祖の教が先づ農家に顯れ、百姓を中心として拡充されし事は之を立証するものである。

新世界建設の段階は先づ日本から逐次世界へ及ぼすにある。即ち大和民族が人類の兄弟なりとは、單に大和民族が最も早く生れたものであると云ふ事のみを意味するものではなく、先づ大和民族を救ふ事を意味する。而して大和國以外に生み下ろされたものは、食を求めて外國へ移つて行つたとは、單に人類の分佈を示すに止まらずして、本教の傳道線が世界的に拡充せられる段階を意味する。

而して地場は人間の故郷であると云ふ事は單にそれのみを意味するものに非ずして、其処が教祖の教を傳道する爲めの根拠地であり、世界救済の中心地である事を示す。即ち此処に甘露台が建設される所以である。従つて救済と云ふ上から言へば、日本は根の國であり、外國は枝先の國である。文化の上から言ふ時も亦、日本は文化の根であり、外國文化は日本文化の余光に過ぎぬと云ふ事を示す。それは文化を創造する者は人間であるから、人間の徳性の高きもの程、其の創造する文化も亦高いものである事を意味する。

之を要するに、新世界建設の段階は、先づ日本より始めて外國へ及ぼす、之泥海古記の示す所に他ならぬ。

以上述べ来りし如く、教祖の教は新しき世界を建設するものにして、現在は之を實現する準備、即ち途上にある。それは個人より社会へ、日本より外國へ、日本より世界へと新世界建設の運動を継続發展しつゝある事を意味する。換言すれば神の御旨のまに／＼甘露台世界を建設しつゝあるのであつて、本教の發展は即ちそれである。故に我々が眞に神の子としての自覺にたつならば、甘露台建設の爲めに自己を捨て、働く事が、之自己の眞價を發揮する所以である事が判然とする。我々は神を信する熱と、人類を愛する熱とによつて、神を中心とする世界の建設に自己を捧げて惜しまぬものである。

新しき世界は教祖の御力によつて實現する。決して我々の力によつて實現するものではない。我々の努力を嘉納し給ひ、茲に新世界が實現する。

新世界は善人―美しき人によつて充たされる。美しき人々は「じきもつ」靈糧を與へられ、永生の賜を與へられる。即ち百十五歳定命、それから先は何時までも心次第と示されてゐる。之を要するに、新しき世界は我々の求めてやまざる理想の世界である。泥海古記は此の理想世界建設の爲めに示されしものに他ならない。

第四章 人間の進化

今日の進化論が絶対に眞理だと認める事は出来ないと云ふ事は勿論であるが、よし之を進化論から考へても、泥海古記の主張する所はそれと矛盾するものではない事を証言し、普通進化論の單種進化説に対し、泥海古記の複種進化説を明かにする事が本章の目的である。

一、進化の原理

進化論の成立

泥海古記の示す人間進化の原理如何を明かにする事が本章の目的である。

言ふまでもなく進化論は生物学に属し、生物学は自然科学に属する。自然科学的知識は何によつて成立するかと言へば、観察と実験の結果即ち認識によりて成立する。認識の原理は如何。カントの言葉を借つて言へば直感形式と悟性形式とによつて成立する。斯くて進化論は学的に成立するのである。

進化の意義

先づ進化の意義を考へてみるに、進むとか退くとかは何を標準としてゐるかといへば、人間を標準とする。即ちアミーバの状態が下等であり、人間が出来て来たといふ事が進歩だと考へる。若し下等動物が偉いものと考へるならば、人間は退化したものと云はなければならぬ。然し如何に考へても、他の動物が人間より以上であるとは考へられない。故に人間は

進化の最高の冠、人間に迄進化して来た事は、最高の進化だと言はなければならぬ。

然るに進化論者の中には、人間の進化は今日が絶頂であつて、之からは次第に退化し消滅すると主張する人がある。けれども若し人間が今日迄最優者として進化し次に退化するとするならば、次に何か起らない限り、即ち人間以上の者が出現しない限り此の主張は成立たない。何か人間より以上のものが、人間に代つて起つて来て、始めて人間が消滅すると云ふ事が出来る。もとより時間の経過するに従つて、人間の物質的本性が最早これ以上進化する事は出来ないと云ふ事には或は同意しなればならないかも知れない。或る人の如きは人間は物質的(肉体的)には退化つゝありときへ主張してゐる。然らば人間が其の長く進んで行く道において、どんな方面に向つて来たかを考へてみる必要がある。

進化論者は適者生存即ち或る種の形が進歩するのは、此処に始めて現れたものが、其の形に適ふか適はぬかと云ふ事により、適合すれば進歩し、適合しなかつたならば退化消滅の運命にあると主張する。所が人間の様子を考へてみるに、人間は決して本能のみで動くのではなく、人間には既に意志とか智能とか云ふものがあつて、自らの好む所に従つて道を選択する能力をもつてゐる。故に今日の人間より更に進化したものとなるには、人間が何等かの止むを得ない本能によつて進化するのではなくして、人間の何等かの智慧によつて工夫された進化が行はねばならない。故に生存競争なるものは、今迄の如く外部から余儀なくさ

れてする盲目的の競争ではなくして、智慧によつて撰んで起る戦争の觀念から生じる競争であると云ふ事になる。強き者は興り弱き者は亡ぶといふことは、人間が其の智慧によつて明かに知る事が出来たのである。斯く考へてみると、人間は靈的存在者に進化しつゝある事を認めなければならぬ。而して其の靈的進化は、一般的進化と同じ方法をもつて行はれて行く事を認めなければならぬ。

次に考へるべきことは、人間の上に其の進化が如何なる形をもつて現れるかと云ふことである。それは新しい靈的進化の行く道が開かれて来たことになる。人間の本性から言へば、心は確かに物質以上に進んでゐる。即ち物質的本性が退化するとしても、精神的道德的領域に於ては進化の著しい事を否む訳にはゆかない。故に進化の新しく行く道は正しく維持せられてをり、前の方法と同じものが嚴かに行はれてゐるのである。即ち自然淘汰適者生存といふことは、前に行はれたのと同じ過程に於て行はれてゐるのである。たゞ意志の力によつて進化が行はれるといふ事が、前の自然の力による進化に代つたのみである。

靈的進化には人間の内部から其の撰択が行はれてゐる。若し人間の意志によつて撰択が行はれるのならば、其の意志の目指す目標が必要となつて来る。即ち自分が適者となり失敗者となるのは、一に目標によるとよらざることにあることとなる。然らば其の目標如何と言ふに、人間は先づ知識を考へる。故に知識の最高を目指して進めばよいかと言へば、智慧のない民

族は次第に辺鄙に追ひやられて消滅して行つたのであるから、智慧といふものも人間を進める上に必要であつたに相違ないが、智慧といふものが今日の如く殆んど万遍なく人類の上に行き互つたからには、それは半面の眞理であつて全体ではない。即ち此処に今一つ大切なものは、人間の道徳である。道徳は智慧以上に必要なものとなつて来る。何故ならば、民族又は國家が智慧や物質に於て如何に進んで行つても、其の國が一度不道徳に陥る時に其の國民は其の不道徳によつて亡びなければならなくなり、遂には意志の力によつて進んで行く國が始めて堅實な國家を成して行くからである。此の事は古今の歴史に明かな所である。之を要するに人間進化の原因は適者生存の原理により、其の形式は道徳的に進化するのであつて、之泥海古記の示す処である。

二、進化の法則

前述する如く人間は人間として靈的に進化し、他動物とは全然別個に進化するとは泥海古記の主張する所であるが、然らば人間は如何なる法則に基づいて進化するものなるかを明かにする事が本章の目的である。

翻つて人生を觀するに、人間の進歩と一致する道徳律の働いてゐる事を認めなければならぬ。故に人生には動かす事の出来ぬ道徳律が存在してゐる事を知る事が出来る。之人間進

化の法則である。

試みに今日の世界の文明に貢献した諸要素を遡つて考へてみるに、之を三つの原因に帰せしむる事が出来る。第一に政治の基礎はローマに存し、ローマの法律は政治は如何に行つて行くかという原因を與へたものである。第二に人間の美的方面、或は眞理の探究に貢献したものはギリシヤである。ギリシヤの文明は連綿今日までつゞき、美の方面、眞の方面の研究に於ては其の感化を永遠に残すものである。第三に道徳的影響を残したものはユダヤにして、由來今日の文明は、小アジア、バルカン、イタリーの界限に起つた文明が段々世界に傳播したものであり、昔の文明國の舞台に與へた影響は此の三つである。

エジプト、印度、支那の文明は、思想は存在しても實際の文明に何等の貢献もしてゐない。佛教は實社会に何等の建設も行つてゐないのみならず、其の思想の行はれた國は存在さへも認められない。孔子の教は今日尙其の形骸を残してゐるが、孔子が死して後は支那の文明は停滞してゐる、之では進歩とは言へない。故に世界に貢献したものは、ローマ、ギリシヤ、ユダヤの文明であると言はなければならぬ。即ち人類の文明を支配したものは此の三の根源からであるが、其の内道徳はユダヤに源を發し、之が更に泥海古記によつて本當の道徳上の勢力となつて、文明世界に感化を與へたのである。之を「日本は根の國」と言ふ。

ギリシヤ思想とは如何、それは極力人間を崇拜する思想にして、之は人間の價値が認識さ

れない時代を代表する思想であるが、ギリシヤ思想によつて此の方面からも人間の價値が認められる様になつたのである。此の思想に於ては常に人間を礼讃して、人間以上の存在が此の世にないかの如くに考へる。然しそれは人間の内にある悉くのものを肯定する行過ぎである。故に人間を基準としての権利の要求は發達しても、道德的即ち其の時代々々の人間以上に進むことは出来ない。人間を基準とするものが、道德的の向上が行はれる筈はない。即ちギリシヤの宗教は、悉く人間の現在の状態を理想化するにとどまるものである。此の故に今日の社会運動は、大体に於て人間の價値を非常に高調する所から行はれて来てゐる。若し今日の様には、一方の人が其の價値を主張して相手に当るなら、其処には決して永遠の有價は行はれない。ギリシヤ思想の如く、人類が唯其の権利を主張するばかりでは、到底矛盾から免れ得ないのである。此の事はギリシヤ思想によつて人間が崇拜せられてゐた際、社会の道德が如何なる状態にあつたかを觀察すれば明かである。

人間の権利が何にも増して主張されてゐる時、果して社会の道德は如何なる状態にあるかと云ふに、人間が礼讃されると同時に、人間の総べての矛盾も罪惡も其の儘肯定される事になるから、社会は道德的に非常な墮落に陥り、道德的に云つて人間を互に不幸に陥れる不道德が行はれる様になつて来る。斯かる道德の衰へた際、一番先に現れるものは人間の劣情から行はれる罪惡がある。衣食について人生の上に一番重要な慾望は性の慾であるから、道德

の衰微した時、其の方面に野性が發揮される。今日の世の中に一番多く見受けられる罪惡は之である。其處でかゝる社会に必要なものは、良心が覺醒せられ、良心が人を導く事でないならばならぬ。即ち國民が道德的に進んでゐる間は無事であるが、一旦不道德に陥ると、それが急に退化に変する。況んや個人が道德を破つて生活してをれば、人間は凡ゆる点に於て退化して行く。斯くの如く道德が人間を支配する力となる。故に意志の力によつて道德を追ひ求めて行く者が、始めて適者としての生存に叶つて来る。故に人間なるものは、先づ強者より賢者へ、賢者より善人へと進まなければならぬ。然しながらギリシヤ思想のみによつて之を実現する事は不可能である。茲に泥海古記の思想即ち天理教思想によつて、ギリシヤの道德思想が本當の道德上の勢力となつて、文明世界に感化を與へるのである。

抑、神の本性は人の良心の源にして、道は其の源を神に發してゐるものである。此の道德的秩序は、如何に人が之に抗争しても破ることの出来ぬ神の主權によつて、人生に徐々に開發せられてゐる。泥海古記の主張は人間压制を以つて、或は人間を余儀なくせしめて斯かな道を行はしめようとするものではない。直接間接に人間の本心に訴へて、己の内から其の方面に進まねばならぬ様にするのであつて、之が神の人間に對する手段であり方法である。つまり泥海古記は教祖といふ人格が愛を以つて人を悩みから救ふ爲に導いて行くに際し、其の人が罪惡をさとり、誤りを理解し、それが自分の生活に及ぼす不幸を自覺し、救はれたい

との要求を呼び起し、人自らの内に救ひを憧憬し望む様に仕向けるのであつて、之が神の教祖を通じて人生に行ふ手段であり方法である。其の内にそれを其の儘に受け入れて教祖に同じたものが人生の爲めに一身を捧げて奉仕しよう、人の爲めに同じ様に己を捨て、奉仕をしようとの中心からの願ひを惹起するのである。斯かる事情から、今日の社会は道德的に向上したのであつて、其の小数の人が社会にあつて己を捨て、人に仕へた其の感化が、今日の文明を形作つたのであると言はなければならない。

之を要するに思想上より言へば、世界は永遠に泥海古記と思想と、ギリシヤ思想との何れが主權を占むるか、世界は常に此の二つの思想によつて、あざなはれる繩の如く進歩しつゝあるものであり、人間は強者より賢者へ賢者より善人へと進歩しつゝあるものである。

然らば人間は如何なる目標に向つて進歩しつゝあるか、善人とは言ふが其の人格は如何なる人格であるか。

聖典及び泥海古記の示す人間進化の目標は教祖にまします。教祖は人間の本性を極めた生存者にましく、其の生活は全く靈的にして、此の靈によりて人間を導き給ひ、今日尙導き給ひつゝある事を示してゐる。人間は教祖の靈的生活によつて、人間の今後の目標が明かにせられる。聖典及び泥海古記に現れてゐる人間の目標とすべき此の典型は、其の行ひや熱情や靈魂に湛へる愛から云ふとも、如何なる方面から云ふも人間の理想を體現してゐるのである。

抑々人間の一番大切なものは愛である。道徳の最高の標準は愛である。何となれば道徳は人間が互に生存するに大切な條件であり、又自分が自己を生存させる爲めに一番大切な條件であるから、己に對しても人に對しても愛が一番重要なものとなるのである。勿論正義と云ふものも大切ではあるが、若し或る人格が他の多くの欠点を持ちながら正義ばかりを主張したとすれば其の下につく人は相容れない所が沢山出来る筈である。我々が不完全な人間である以上、正義がどんなに強要されても、そのみによつては社会は共存共榮する事は出来ない。どうせどの方面かに於て人間は欠けてゐるのであるから、正義をれ自体は勿論確かに立派な標準に相違ないが、実際にはそれのみを主張する事は出来ない、即ち正義を標準にして愛が実行された時、始めて世の中はうまく行くのである。故に愛は正義を標準として適用されなければならぬ。故に人間に一番大切な條件は、正義を背景として愛を最もよく行ひ得たもの、それが人間生活の理想を実現し得たものであると云ふ事が出来る。而して自己犠牲は愛の最高表現である。

自己を犠牲として他の人に人生の目標を示す爲めに、愛を以つて自らを示されたのは教祖にまします。愛を以つて人間進化に資す此の愛を行ひ給ひしは教祖にまします。若し愛を以つて世に処するなら、己一個のみならず他の人との関係も始めて明かとなつて来る。故に其の人は意志によつて撰んで、生存の第一條件を成した事になる。更に教祖の境地に迄到達す

るならば、今迄の道德的世界が一轉廻して、靈の世界に於ける生活が明かにされる。教祖によれば、斯かる靈の生活を仕上げて行くに従つて、次第に永遠の世界に住む事が明かにせられ、永遠の世界に進化するといふ事が始めて明かにされたのである。其の世界を指して甘露台世界と云ふ。

其処で如何なる標準を以つてしても、人間の今日の道德的狀態から考へて、これ以上の人格者が世界に現れるとは思はれない。如何に理想的の人格者が現れても、教祖以上のものが現れるとは思はれない。又教祖の人格は、人間が今後發展する上に何人もが認めなければならぬものである。若し人間が意志をもつて或る進化をもくろむならば、其の目標は教祖でなければならぬ。即ち道德に進む最高の標準である所の教祖を認めぬわけにはゆかない。世に聖賢と言はれる人も、或る程度迄は其の標準となり得るかも知れないが、彼等は全然罪穢れなきを得ないのである。然し教祖は一点も罪と言ふものを經驗した事のない愛の最高極致にまします。而かも教祖は其の意志の命ずる所に従つて、道德的に一点の誤りもないとの自覚を有してをられたばかりではなく、何人が之を見ても一点の傷もない、昔は一生懸命になつて不道德だと呼ばれてゐた事すら、今日に於ては却つてより道德的になつてゐた事柄が幾等もある。泥海古記は此の生ける人間を標準として、我々の不完全さが之によつて助けられ、完成に趨く道程を示すものである。

若し教祖に於ける如く人類が進化發展するのぞなければ、此の世の中は開けない。之を目標としなければ、或は未末は發展しないかも知れない。故に泥海古記に示されてゐる理想と、現在現れてゐる理想とが一致しない限り、人間として此の世に生れて来た事は不幸と言はなければならぬ。然り、人間は靈的目標により進化發展するが故に、此の上人間の進化を合理的に考へる訳にはゆかないのである。

今日の進化論は、人間にまで進化して来たとは主張しても、先はどうなるかに就いては教へてゐない。故に進化論に於ては、我々が今日の様子によつて今後の人間の狀態を考へるより他に道がない。其の結果人間の進化は今日が絶頂で、之からは退化すると主張する者すら生じて来るのである。それは止むを得ぬ所ではあるが、眞理ではない。即ち泥海古記は之を立証してゐるのである。

之を要するに人間の進化の歴史は泥海古記の示す人間の歴史であり、それは道徳的に進化しつゝあるのである。道徳律に基づいて進化するのである。

三、進化の方法

人間の進化の法則は道徳律に基づくとは前章に於て明かにした所であるが、然らば如何なる方法によつて人間は進化するのであらうか、之を明かにする事が本章の目的である。

物質的に観れば人間は一番偉く發達して来たから最高の冠には相違ないが、悲しむべし智慧や想像力を加へられた爲めに、人間は人間界を憐みの世界と観なければならぬ事になる。故に之は決して人間にとつて親切な過程ではなかつた事になる。進化論は之を解決する事は出来ない。故にそれはどうしても他の解決によらなければならぬ。

人生に存在する苦痛といふものの解決は、人間の世の中に於て一番解決の困難なものである。人間生活においては煩悶が絶えない。所が動物は其の苦痛が目前に迫るまでそれを感じないで、それが当面の問題として落ちかゝつて来た時にのみそれに対するのである。故に動物の方が人間よりも余程幸福だと見える訳である。即ち人間は自然界より起る災害のみならず、人間と人間との間にも苦痛がある。斯くの如く人生には人間各自が進歩した爲めに、非常な苦痛のある事を認めなければならぬ。然らば人間は却つて幸福な状態から、苦痛の状態に進歩して来たのであらうか。進化論が動物が人間に進化したと主張するならば、こんな風にも考へられる。果して進化とは苦痛と云ふものであらうか。

既に述べた如く、苦痛は罪惡に対する良心の呵責であり、之によつて人間の發達を刺戟し、人格を練磨するものであり、不義者の榮達と義人の困窮も亦見逃す事の出来ぬ重要な意義を有するのである。今之を進化的に解決すれば、手が熱いものに触れると火傷するといふ事を知らず爲めには、熱いものに会へば必ず焼けると云ふ事を知らず事が、教育の賢い方法であ

る。それは内部から啓発せられ、智的にも開かれるのであつて、茲に教育の重要性がある。故に神が若し進化論によつて人間を特に高等なものにして行くとすれば、良心と自由とを人間に與へたと云ふ事は、最も賢明な方法であると言はなければならぬ。即ち良心に背いた時に苦痛のある事を教へられるのは、自由権を濫用する事は人間の不幸であると言ふ事を示す爲めである。

右に示す如く、智的に考へては人生に對して悉く解釈する事が出来ない場合にも、倫理的に考へて良心が中心なりと考へる時には、人生は倫理的であり、人間の良心の要求が否む事の出来ぬ強い要求である事を知る事が出来ると共に、人生が今日の進歩發展をみた事に就いても亦、明かな解釈を見出す事が出来るのである。即ち若し人間が益々道德化して行くなれば、人生はもつとよくなるに相違ない。人生を斯くの如く解するならば、社会の総べての苦痛は道德の進化によつて考へられなければならない。故に純粹に論理的に頭丈だけで行かうとする時は、人間の進化は合理的でない所もあるが、泥海古記の唱へる人間は神の子、即ち良心に立脚して人生を考へたならば、苦痛の存在の意義も亦明かに解決する事が出来る。而して之が人生に對する最後の解決にして、人生の最高の標準を示して人生を解釈せんとするものである。其の他に行く道はない。即ち進化論によつては、人生の苦痛の存在と其の意義を解決する事は出来まいけれども、泥海古記よりすれば、之を進化的に解決する事が出来

るのである。

之を要するに人間進化の方法は、神の興へ給ふ苦痛に存する。即ち神は苦痛をもつて人間を進化せしむる爲めの方法と爲し給ふのである。

泥海古記は総べての事に就いて余りに明快に問題を解決してゐるが爲めに、人間の理性の彼方の問題にまで携はらなければならなくなり、従つて合理的でない様に見える所もあるが、それは今日良心が鈍つてゐる爲めに理智が暗くされてゐる爲めである事を思へば、今日の人間が社会の総べてを合理的に解決されないのも亦止むを得ない所であるとせねばならない。純粹に倫理に立脚して考へれば、宇宙の哲學的な問題には或は不合理な所があるかも知れないが、良心の範囲内で解決の出表る所に従つて行くのであるから、それで人生の問題、人間生活の目標は明解に有効に解決されて行くのである。我々の良心が暗んで居れば人生も小さく見え、良心が低い所にさ迷つて居れば、従つて人生も低く解釈されるのが当然である。故に今日罪惡に囲まれた人が眞理でないと言つたとて、それをもつて直ちに眞理を否定する事は出素ない。其の眞理の体験によつて倫理的な生活が描き出されるならば、人生にとつては確かな眞理である事を認めなければならぬ。實際生活に関係のない空論が如何に合理的であつても、人生から見ればそれは思想上の一遊戯に過ぎない。即ち泥海古記の示す人生の苦難に對する解決は眞理であり、それによつて人間も社会も進化して行くのである。而して其の進

化の目標は教祖の人格即ち甘露台世界である。故に人間の物質的進化は進化論者の言ふ如く今日が絶頂かも知れないが、泥海古記の示す靈的進化は寧ろ之からである。

之を要するに泥海古記は人生問題を解決するに不可欠の存在にして、其の價値は絶大である。

四、泥海古記の特異点

泥海古記の唱導する進化に対する見解は以上によつて明かであるが、然らば普通進化論と泥海古記の主張する進化との關係及び區別如何。之を明かにする事が本章の目的である。

前述する所によつて明かな如く、神の意志は進化的に表現されてゐるが故に、泥海古記も亦進化を認むるものであるが、普通進化論者就中生物学者は進化は力なりと主張するも、泥海古記は進化は法則であるとする。即ち道德律に従つて進化するのであり、進化は法則に過ぎないのである。之兩者の特異点である。而して力即ち生命の問題は哲学乃至宗教の問題にして科学の問題に非ざるが故に、科学的に言ふとも、進化を法則なりとする泥海古記の見解を以て妥当なりとせねばならぬ。

泥海古記は種を人種と他動物及び其他の生物と二者に區別し、人類を主として其の進化を述べてゐるが、普通進化論は人類と他動物及び其他の生物とを同一視し、之等の総べてが

進化に対する
見解

單種と複種

同一歩調をもつて同方向に進化すると主張する。

翻つて考ふるに進化論に根底がない。何故ならば普通進化論は事実を根底として其の上に成立つものであるが、事實は悉く眞理ではないからである。此の故にダーウインの進化論は後に至つて猿即人祖論と人猿同祖論の二流を生じ、現代の進化論は専ら後者を支持してゐるのである。

泥海古記は人類の進化と其他の生物の進化とを全然區別する。生物学上より言へば素より人類も亦生物中の一類目に過ぎないが、既に神の創造は單種に非ずして複種である。即ち万有は物によつて創造せられ、人類は物と靈とによつて創造せられたのである。即ち單種に非ずして複種である。又存在價値より之を言へば、他動物に觀る事の出来ぬ自己意識を有し、他動物の爲し能はざる行爲を爲し、文化を創造する人類は、自然他動物と異りたる存在價値を有しなければならぬ。斯くの如く既に單種に非ずして複種である以上、その各々の進化を認めなければならぬ。之泥海古記が複種進化を主張する所以にして、万有は普通進化論の道程によつて進化するも、独り人類のみは泥海古記の道程によつて進化するものである。要するに泥海古記は、普通の進化論的思想が百尺竿頭一步を進めたものと言ふべきである。

然らば人間の進化と其他の生物の進化との關係如何と言へば、人間の進化に應じて他動物も其他の生物も進化したのであつて、それは神の攝理に基づくものである。即ち人間を万物

の靈長とし、其の進化に併行して其他のものも進化したのであつて、人間の成人に連れて天地が開闢したと示されてゐるのは、此の事を示すものである、即ち人間と他動物と別個に創造せられ、一は道德的に進化し、他に物的に進化し未つたのである。

普通進化論も泥海古記も共に適者生存の原理によつて進化するとする点は一致するも、一は外部より撰択されるとし、他は内部より撰択が行はれるとする点に於て異なる。即ち一は自然的に進化し、他は道德的に進化する。換言すれば一は物的進化を示し、他は靈的進化を示す。之兩者の特異点である。然らば物と靈との進化に於ける關係如何と言へば、靈的進化に伴つて物質的にも進化する。何となれば靈肉合して人間であるからである。

之を要するに人間の進化は独り物質的進化のみによつて進化するものではなく、靈的進化を根底として物質的にも進化するのである。之泥海古記の示す進化の意義である。即ち泥海古記は現代文化の眞意義より觀て、何人と雖も見逃す事の出来ぬ重要な問題を吾人に提供するのである。即ち万有は総べて進化の道程を辿るものなる事を認め、人類も亦進化するものなる事を認め、而かも他動物と人類の進化とを嚴然し區別し、單種進化に非ずして複種進化なりと主張する。即ち人類進化の頂点に到達せるものは教祖の人格にして、泥海古記はそれを啓示によつて示し、強者より賢者へ、賢者より善人へと進化するものなる事を主張するのである。

結 論

科学は専ら現前の事実局限し、只管其の現象上に行はるゝ原因結果の理法法則を発見して抽象的概括を企つるものに他ならぬものにして、何等の價值観もなき頗る無味乾燥なるものに過ぎぬ。従つて少しも生命活氣の躍如たるもののある事が見受けられない。さりながら、人生なるものは元来斯くの如き殺風景なるものに非ずして、理法法則は固より甚だ必要なりとは云ひながら、而かも善惡・美醜・好惡の價值こそ寧ろ人生の妙趣である。即ち泥海古記は端的に此の人生の中核に突撃し、人をして價值ある生活を爲さしめんとするものである。即ち泥海古記は即ち泥海古記は科学と別にして宇宙の本初に還到し、世界万物の由つて起る所以及び諸般の理法や法則が維持せられ、由つて管理せらるゝ所以を明かにする事によつて、人をして價值ある生活を爲さしめんとする。其の目標は教祖にして、教祖を理想の人とし、全人類に價值ある生活を爲さしめんとする。此の意味に於て泥海古記は吾人の信仰を培養するものである。教祖を理想の人として價值ある生活を爲すとは救ひを得る事である。吾人は救ひによつて四重の御業に浴する事が出来る。泥海古記は此の四重の御業の実現を期する。四重の御業の実現とは靈の更生を指す。靈の更生とは之を通俗的に言へば、人間の靈的發展とも言ふべき

である。

人間の靈的發展は固より禽獸草木の發育成長とは全然別個にして、人間の精神即ち心意の發展の汎稱である。此の人間の精神の發展展開は、實に古今の歴史上に顯現せらるゝものである。而かも此処に注意すべきは、歴史上に躍動しつゝ徐々に展開し發展進歩せる心的歷程は、決して物理的理法を以つてのみ説明し盡さるべきものに非ざることである。然り而して今日文化の發展を謂ひ、歴史の開展を謂ふものは、多少共人類独自の精神的躍動を認めざるものは未だ曾てない。此の事は彼のカールマルクス一派の唯物史觀はヘーゲルの歴史哲學に淵源し、ヘーゲルはもとゞゝ絶對的唯心論者なるに思ひ到らば、思ひ半ばに過ぐるものがある。要するに人間の進歩は人間独自の精神的躍動に帰さなければならぬ。人は動もすれば進化の外形外面のみに囚はるゝも、其の内容方面を窺ふ時は靈的發展こそ進歩の眞意義でなければならぬ。進歩の極致は靈肉の一新にして、之を換言すれば靈的に更生することこそ進歩の極致でなければならぬ。然り、更生にして覚醒に非ず。されば泥海古記の眞意を知る者は、旧來の因襲を突破して、靈肉の一新を期さなければならぬ。何となれば、泥海古記は人間の進歩の指針に他ならないからである。

凡そ靈なるものは主觀的にして物質的ではない。此の故に靈は物理的機械的に外界周囲の左右し得られるものではない。即ち因果律と雖も尙靈を左右する事は出まぬ。斯く言へばと

て靈を以て全然自然と離れ、物質と別れて浮遊するものとするものではない。即ち靈は實際に於ては物質に依存し、意識中に現はるゝものなる事は掩ふべからざる事実である。此の故に物質の漸く靈化し、意識の漸く靈的なる事こそ、靈的發展の眞義でなければならぬ。

之を要するに靈は生命にして力の根源に他ならない。其の作用は自由自在にして縦横無碍なり。此の故に靈的生活とは消極的には「たんのふ」と「ひのきしん」の生活にして、四週周圍の影響に左右されず、常に能く之が主となり、之に壓迫されずして超越す。其の積極的には「勤一條の生活」にして、勤一條の生活は神樂勤の奉仕と、傳道と、奉仕の三者を以て其の内容とする。吾人は此の生活によつて凡ゆる苦難を突破し、生活を創造し、一切の因襲及び旧物を脱して新面目を開き、由つて甘露台建設に勇往邁進する事が出来る。此の故に所謂道德生活と靈的生活とは其の意義及び内容に於て全然別個なりと言はざるを得ない。されど眞の道德は靈性に根ざし、之によつて道德が維持されつゝあるものなる事は、既に明かにした所である。故に靈肉の一新を具体的に言へば信仰と善行とを兼備せる人格の創造を意味する。然らば靈肉の一新は如何にして可能なるか。泥海古記は此処に宇宙意志に即する生活を提唱する。宇宙意志に即する生活の境地に於ける信仰とは、單なる神の認識でもなければ、單なる神学でもなく、單なる哲学でもなければ、單なる藝術でもない。それは宇宙意志全体が人間生活の中に燃焼して末る事であり、宇宙意志それ自身がある実現をもつてくれる事であ

る。此の不思議なる生活はそれ自身が親和であり、それ自身が奇蹟であり、それ自身が神の子である。其処には自力と他力の区別なく、それ自身が他力であり、それ自身が自力でもある。即ち絶対の境地に於ては自力と他力との区別はない。自力のものは総べて他力的のものであり、他力的のものは総べて自力の中に表現せられる。此の世界が即ち信仰生活の最後の段階だと言つてよからう。何となれば此の境地に於てこそ神の如き生活が可能となり、罪なく、穢れなく、不淨蒙味の恐れなく、眞理と愛とが一致し、自由と秩序とが一致するに至るからである。されば生理的悲哀より救済せられ、心理的不完全さから解放せられ、道德的墮落から更改に導かれ、産業的決定より解放さるゝ工夫こそは、信仰生活の完成によつて始めて可能なりと言ふ事が出来る。

尙注意すべきは、信仰なるものは唯單に心理的作能を意味すると云ふのみではなく、宇宙意志と同化する場合に於ても、漫然数学の符合の如き抽象的宇宙意志と同化するものに非ずといふ事の信仰である、哲学乃至は神学による信仰は余りにも抽象に過ぎる。眞の信仰は生々した宇宙生命を呼吸する事である。而かも其の宇宙生命は直線的に生きる生命に非ずして、宇宙進化が今日迄司つて来た保護と本能愛と、互助愛と、犠牲と、宗教的贖罪愛に眼ざめて行つた愛を内容とする生命そのものである。宇宙意志に同化するとは、此の宇宙愛に對する同化を意味する。故に信仰とは此の宇宙愛に信頼することを意味する。故に信仰生活とは字

宙愛の智的、情的、意的實現をも意味するのである。即ち愛による眞理の把握を意味し、眞理による愛の完成を意味する。故にかゝる宇宙意志の内容に対する理解なくして、眞実の信仰は起らぬ。吾人の信仰は断じて迷信であり、盲信であつてはならぬ。

眞実の信仰は恐怖より出発する信仰に非ずして、神聖なる愛より出発する信仰でなければならぬ。神聖とは不純なるものを混へない絶対性を意味する。古き時代の宗教的信仰は此の神聖を恐怖の的として考へた。然しながら宗教歴史の進展は、此の神聖を神聖なる愛と考へるに至つた。それは東洋の歴史を通じて一様に理解される事実である。故に吾人は漫然と宇宙意志の神聖を信じてはならない。即ち宇宙の教に生きなければならぬ事を、泥海古記が我々の眼前に判然と示してゐるのである。

以上信仰なるものは宇宙意志に同化するものなる事を明かにしたのであるが、宇宙意志に同化する生活は体験を通じて滲み出なければならぬ。此の故に宇宙意志に同化せし人間によつて信仰の眞理が学び得られる。之を具体的に云へば信仰生活なるものは、人格的感化によつて来る場合を多しとする。然れども信仰生活なるものは、独り人格的感化にのみよる事なく、自然、藝術、瞑想、歴史等からも部分的に学ぶ事を得るものである。とは言ふもの的人格に接触する時は最も容易に信仰生活の何ものなるかを学び得る。之を方面をかへて言へば、読書により抽象的に信仰生活を理解する者と雖も、或る人格に接触するに非ざれば不足

する何ものかを感ぜざるを得ぬ。此の時人格に接近する時は、不思議なる力が其の周圍に起る。之を聖なる体験と言ふ。此の体験を基礎として宗教的眞理が發展する。宗教的眞理の發展とは、人間の魂の内に魅つて自由・自主・自立・自治の人間を養成する事を言ふ。泥海古記は教祖の人格を基礎として宗教的眞理の發展を示すものである。故に泥海古記の眞意を知るものは、此の宗教的眞理をして、ますます發展せしめなければならぬ。即ち人格の陶冶によつて犠牲的精神を養成せねばならぬ。

之を要するに泥海古記の眞意を理解する者は、自己が信仰と善行とを兼備する人格の具所有者となるのみでなく、斯かる人を養成せねばならぬ。之泥海古記を示されし神の御旨に答へ奉る所以である。斯くて泥海古記は神の奏で給ふ魂の行進曲であり、此の音楽は溶け込んで踊る所に人間の眞生活があり其処に眞の自由即ち陽氣暮しがあると云ふ事が本書の結論である。

泥海古記指掌 終

以印刷代贍寫